
Dead in pokemon world!

時雨 豊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Dead in pokemon world!

【Nコード】

N5119V

【作者名】

時雨 豊

【あらすじ】

車にひかれて死んだと思ったら、何故かやぶれたせかいにいた。話によると、アルセウスが俺の命を救って(?)くれたらしい。…って、何でアルセウスが人の姿してるんだよ? とにかく、俺が元の世界に帰るには、奪われたアルセウスの力の源、『プレート』を探す必要があるらしい。なんだかよく分からないままに、死んだはずの俺はポケモン(擬人化)の世界に落とされて…。

でも、せっかくのポケモンの世界! たくさんポケモンGETだぜ!
なーんて思っていたんだが、仲間になるのはいつもワケアリの

ポケモンばかりで……。

※この作品は擬人化ものです。

始まり。

「……んうえ？」

起きたらいきなり真っ暗闇だったので、つい素っ頓狂な声をあげてしまった。

それにしても、どうしたんだろう。なんでこんなに真っ暗なんだ？
こんな真っ暗は中々ないだろう。昔入ったお寺の地下くらい真っ暗だ。

自分の手を見してみる。見えない。やっぱり真っ暗だ。

『――グよ』

「ん？」

奇妙な感覚がした。まるで、頭の中に話しかけられているような……
：というか、頭の中に話しかけられている。テレパシーってやつだろうか。

『――シグよ』

どうやら、俺の名前を呼んでるらしかった。

『シグよ、私の声が聞こえますか？』

「ドラ○エみたいですね」

『……シグよ。私の声が聞こえますね』

「はい聞こえます。すみません」

どうやら冗談の通じない人みたいだった。

『シグ。あなたは、ここに来る前の事を覚えていますか？』

「いや、全然」

そういえば、何で俺はこんなところに？ よく考えたら状況がさっぱり分からない。というか、

「さつきからナチュラルにテレパシってくるあなたは誰ですか」

『……私は、アルセウスです』

「は？」

アルセウス？ アルセウスって、あの宇宙作ったとか言われてる、全ステータス種族値120のポケモン？

「……ちよっとよく分かんないです」

『まあ、じきに分かるでしょう。それより、もう時間がありません。言わなければいけないことがあるのです』

「ちよ、ちよっと待った。アルセウスってことはここはポケモンの世界」

『あなたは、死にました』

「ってこと……え？」

なにか、とんでもないことを言われた気がする。死にました？ 俺が？

『事実を知れば、徐々に思い出してくるはずです。どうですか？』

「ど、どうですか……」

あ。

思い出したくないが、思い出してきた。

あの時は、適当に散歩してたんだ。そしたら向こう側の道路で、子供がリフティングしてた。嫌な予感がしたんだよ。でも残念ながらそれは当たって、リフティングが失敗して道路にボールが転がった。そして、それを追いかけて子供も飛び出した。……そう、ちょうどその時に車が走ってたんだ。

間に合わないと思って、咄嗟に子供を突き飛ばした。でも、俺が代わりに車に当たって吹き飛んだ。すごい痛みに襲われながらも、涙目で困惑してる、俺が助けた子供の姿だけは確認できたんだ。俺を轢いた車から人が出てきたところで、意識が途切れた。

「……そっかそっか、俺は助からなかった訳だな」

『そういうことです』

死んでみると、意外にあっさりしたもんだな。両親にはすまないけど。

それにしても、いくら死んだからって何だよこの真っ暗な空間。なんで俺一人？ 天使とか悪魔とかいないの？ いや、悪魔いたら困るけど。

「んじゃ、今の俺はただの精神体ってやつなの？」

『いえ、ちゃんと肉体もありますよ』

「ええ！？ 何で！？ は、そうか、今の俺は霊じゃなくてゾンビということか！」

『……勝手に納得している所とところすみませんが、そうではありません。私の能力です』

アルセウスの能力？ ……って、まだアルセウスだって決まった訳じゃないけど。アルセウス……そうぞうポケモン、何も無い所から生命を生み出すことのできる力を持つ、だっけ。

「ってことはつまり、アルセウスが俺を『作り直した』ってことか？」

『はい。その通りです』

「そりゃまた、創造神とも呼ばれるポケモンがどうして」

もうすでにポケモンという存在については否定しなくなってるのが怖い。まあ、もう何があったっておかしくはないけどさ。実際、死んだはずの俺が生きてる訳だし。

『私は、身を呈して子供を助けるあなたの姿にとっても感動しました。あなたのような人を、その若さで失うのは惜しい。ですから、命を救おうとしたのです』

「……そりゃまたありがたいけど、どうしてこんなところへ？」

さっきも言ったけど、ここはめっちゃ暗い。贅沢言うつもりはないが、もう少し照明とか点けてくれたって良いと思うんだ。

『ここは、やぶれたせかいです。暗いことについては許してください』

「あ、へー……そうなのか。って何で!？」

やぶれたせかい、って、あのギラティナのいる!？　なんでそんなところに？

『私は見てのとおりポケモンですから、ポケモン世界の方が力を発揮できるのです。今の私では、人間世界では一人を作るほどの力を出せない。かといって、ポケモン世界からでは力が届かない。よって、その間、やぶれたせかいがちょうどよかったのです』

「なるほどね。分かったような、分からないような……というか、見てのとおりって姿見えないけどね」

『まあ、確かに』

「なー、すこしくらい見せてくれよー」

『……仕方ありません、少しだけ姿を見せましょう』

おっ？　まさか人生初、生のポケモン？　なんかテンション上がった。なんて思っていたら、目の前にぼやっと光が浮かんできた。灯りを頼りに手を見る。……うん、ゾンビではないな。って違う！

この光が、アルセウスのものなのか……？　でも、それにしては、やけに光が……人型のような……。

『お待たせしました』

「……いやいやいや！ 違う！ 俺の知ってるアルセウスじゃないこいつ！」

『？ 私は真正正銘アルセウスですが』
俺がそう言うのも無理はないと思うんだ。だって、そのアルセウスは、まるっきり『人』なのだ。そう、なんか、アルセウスをそのまま擬人化した感じの。銀髪緑目で、尻尾も付いてる。

『ポケモンは元来、人間の姿をした、人間に限りなく近い生き物です。日本のポケモンというゲームは、それを子供向けにコミカルな動物にただけなのです』

う……確かに、美少女同士が闘うゲームなんて作っても、ウケるのはごく一部の濃い人たちだけだろう。

つまりだ、ポケモンの擬人化は、擬人化であって擬人化では無かった？ 公式こそが違っていたってことなのか？ おいおい、そりゃまたすごいこと知っちゃったな。

……いっそのこと大がかりなコスプレだと思いたかったが、それは違うということくらいすぐ分かった。それくらい、ぴったりとイメージに合っているのだ。尻尾もついてるし。

……尻尾、ね。

『どうしました？』

じーっとアルセウスの尻尾を見る。近づく。

『……？』

「ぐいっ」

『ひゃっ!?!』

引っ張る。

「はずれない……やっぱりコスプレじゃなグヘアッ!?!」

しばらく引っ張っていた尻尾で、思いつきり引っぱたかれた。多分5メートルくらい吹っ飛んだ。

『次、やったら……裁きます』

「は、はは。すみません、調子乗りました」

さばきのつぶてなんぞ覚えているだけに、本当に裁かれそうで恐ろしい。

しかし、尻尾触られて顔真っ赤にするなんて、なんか可愛げあるな。幻のポケモンとは思えない。……いやまあ、悲鳴まで頭の中に直接入って来るもんだから、なんだか複雑だけど。

『そ、それですね。今の私の力では、あなたをつれて人間世界にはいけないのです。ですから必然的にポケモンの世界へ連れて行くことになります』

「なるほど……。元の世界には戻れない、と」

『いいえ、私の力が元に戻れば、あなたを人間世界まで連れていくことができるのです』

あー、なるほどね。

「プレートがあればいいんですね?」

『話が早くて助かります』

つまり、世界にちりばめられる16種のプレートを集めるということか!　なんかロマンある冒険だな!

『ちなみに、あなたが想像してるトレジャーハンターみたいなことをしろと言っているのではないのですよ?』

「えっ!?!　じゃあどうすんの!?!」

『16種のプレートは、一人の人間が持っています。それが、私の

主。どうか、私の主を——」

声がとぎれとぎれになってくる。時間がないと言っていたが、もしかして今がタイムリミットなのかもしれない。

『じか——な——い——』

よく聞こえない。それは、声がとぎれとぎれになっているからというだけではない。俺の意識が、薄くなっているのだ。

アルセウスの光が消えると同時に、俺の意識もまた消えうせた。

そして冒険は始まった。

始まり。(後書き)

これからようやく、Dead in pokemon world
になるわけですね。

作者の妄想垂れ流しな小説にあるとは思いますが、そこはどうかご勘弁を。

おれのかんがえたさいこうのぽけもん。 (前書き)

サブタイの元ネタってなんなんでしょうね

おれのかんがえたいこのぽけもん。

「……んうえ!？」

目を覚ましたら、真上にある太陽が燦々と輝いていたので、つい素っ頓狂な声をあげてしまった。

これならさっきの真っ暗闇の方がいいわ。太陽眩しい。

とりあえず、起きて辺りを見渡してみるか。

どうやらここは山のようにだった。周りが木で覆われている。どうやら俺が寝ていた所だけポカンとスペースが空いているようだ。

それにしても、何も無いな。ここがポケモンの世界ってことでいいのか? それにしては、ポケモンがいない。ゲームだといくら倒してもいくらでも出てきたが、現実は今まで甘くないか。まあ、ポケモン世界って時点で現実かどうかは怪しいんだけど。

……というか、これ、どうしろってんだ? この草むらの中に入るの?

おいおい、水も食料も無いけど、ちゃんと街はあるのかよ……。というか、まず何地方なんだ?

「分からんっ!!」

とりあえず進もう! 進まなきゃ何もできねえ!

長い草をかき分けながら先に進む。

……それにしても、俺が寝てたところだけやけに綺麗だったな。草もきっちり生えそろってたし。誰か住んでるのかな?

……。

あっ! あそこで待ってれば誰か来てくれたかもしれん! なんてこった戻らなきゃ!

あーっ、もうどこにいるのかわかんねえ！　進むしかねえか！

……よし。

「うおおおおおおおっ！！！」

とりあえず叫びながら走る。ほら、熊とかいたら怖いし。熊鈴もないしね。

ちよ、草痛え。やばいかぶれるかも。

「……ぜー、はー……」

疲れた。あかんわこれは。無駄に体力消費してる。なのに草ばっかで進んでる気がしねえ。

……山って怖いなおい。心折れそうだわ。

サラサラ……。

「ん？」

何か聞こえる。

サラサラ……。

これは、川の音か？

「って水じゃんっ！」

一目散に音がする方へ向かう。

川に沿って下っていくと、麓につくって聞いたことがあるし、これは大きな手がかりだ！

それにしても、きれいな川ってのは本当にサラサラって音がするんだなー。うーん、聞いているだけでも癒される。

「よしっ、ここだな！？」

最後の草むらをかきわけ、川が見える。その川に一瞬だけ、感動した。

そう、一瞬だけ。

俺は、川なんかよりよっぽど大変なものに、視線を奪われ、硬直した。

——人が、倒れていた。

しかし、人が倒れていたことに対して硬直したんじゃない。

その人の、圧倒的な美しさに、だ。

まず目に映ったのは、薄橙をベースとした、黒のラインが入ったチャイナドレス。そして、長く、しかし綺麗で整ったアイボリーホワイトの髪。チャイナドレスによってより鮮明に表れている、女性としてしっかりと発育した胸元の曲線。

特に、髪に浮かぶ白磁の肢体。ドレスから見え隠れする生足は、こんな状況であるにもかかわらず、官能的な気分さえ沸かせる。

——まるで自分の理想を表した二次元の中に入ってしまったかのように、その人は美しかった。

「……………」

ここまで来て、ようやく我に返った。

その女性は、傷こそないものの、苦しそうにしていた。

そうだ、こんなところで倒れてるんだから、何かがあったに違いない！

あれ？

何だ、この犬耳……それに、尻尾も……。

「あぁっ!？」

そうだ、ここはポケモンの世界！ しかも、擬人化ポケモンの世界！

ってことは、実際にここは二次元の世界だったわけね、ある意味。

ってか、このポケモンって……

『薄橙をベースとした、黒のラインが入ったチャイナドレス。』

『そして、長く、しかし綺麗で整ったアイボリーホワイトの髪。』

『なんだ、この犬耳……それに、尻尾も……』

——あのポケモンしかないじゃん！

擬人化されたポケモンの基準がまだよく分からない俺でも、はつきりと何のポケモンだかわかる。

「ウイン、デイ」

ウインデイ。俺が知る中で、最も気高く、凛々しく、美しいポケモン。初代から、こいつより好きなポケモンが現れたことはない。

ウインデイだと分かった理由は、それだけではない。

地に伏して苦しげに喘いでいるというのに、その姿に弱弱しさなど欠片もない。そこにははっきりとした『強さ』が、ただ凛然と在るのみ。

そんな人間が、この世にいるわけないからだ。

嘘だろ？ まさかこの世界に入って最初に会ったポケモンが、俺の一番好きなポケモンなんて！

って、そうだ、感動してる暇はない。早く手当てしないと！

……と、いっても、何をすればいいんだ？ 息はしてるようだけど、意識はないようだし、ポケモンでいえば瀕死ってところか？

瀕死といえげんきのかけらだけど……そうか、ポケモンの世界なんだからオレンの実とかあるかも！

「……ん」

「だ、大丈夫!？」

ウインディが、目を開けた。綺麗な深紅の目が俺の目に映る。

「……ポーチの中」

「ポーチ？」

確かにポーチの中と言った。よく見ると、ウインディは腰に小さなポーチを下げていた。中の物を使えということだろうか？

「じゃ……ちょっと失礼」

一応断ってから、ポーチの中を見る。……オボンの実だ！

「はい、オボンの実!」

オボンの実を口に近づけると、力なくかじった。シャク、という音が聞こえる。シャク、シャクと、少しずつかじっていくにつれ、顔色も少しずつよくなっていくように見えた。

それにしても、オボンの実って意外とでかいんだな。そういや9.5cmだったけか。

半分ほど食べたところで、ウインディはゆっくり立ち上がった。

「も、もう大丈夫なのか？」

「……ああ」

返事をしてくれた。

ああ、なんか、声だけでも顔が真っ赤になりそうだ。凛々しく、高貴で、美しいその声だけで。まったく、どこまで俺のウインディ像に合わせてくるつもりなんだろう。

「ふむ……君」

「は、はいっ!？」

「私の体に、傷は無いかな？」

「あ……はい。見たところないです」

「ふむ……。あいつは相変わらず、傷を残さないのが得意だな」

「……?」

ボソツと呟いたのは確かだが、何と言ったか聞き取れなかった。

しばらくしてウインディは、もう半分のオボンの実を食べ始めた。

そういえば、オボンの実って全部食べて四分の一の回復なのかな？

ってことは、今のウインディの体力は全快の八分の一ってところか。
オボンの実を食べきってから、彼女はまた口を開いた。

「誰かは知らないが、礼を言う。おかげで助かった」

「……なんでこんなところで倒れてたんだ？」

それが気になるところだった。よく考えたら、ウインディは野生では出ない。しかも、ウインディは強い。しかも、これは想像だが頭がよさそう。だから、そう簡単に誰かにやられるなんて、想像できない。あ、でも傷はないしなあ……。熱射病か何かか？

「いや、何……。ドサイドンのがんせきほうを受けてな」

「えっ、近くにドサイドンが!？」

ドサイドンっていったら、ウインディの天敵の一匹だろう。ウインディは物理戦が得意だし、何より炎技が効かない。ドサイドンの防御は半端じゃないし、岩も地面もウインディの弱点だ。ドサイドンは無振りでもかなりの防御力だから、よほどレベルが違わない限りインファイト使ったって一発じゃ落ちないし、さらにウインディの耐久は——と、まあここまででやめておこう。

しかしドサイドンがいるというのは恐ろしい。俺はドサイドンも結構好きだが、はつきり言ってポケモンとして登場したら一目散に逃げると思う。だって、あんなのに生身で勝てる気がしないもん。

「いや、この近くにドサイドンはいないよ」

しかし、ウインディの答えは意外なものだった。

「え？　でも、ドサイドンの攻撃でやられたんだろ？」

「はは、まあそうなんだがな。……何も、ここで闘ったわけじゃない」

「え？　じゃあウインディがやられた後にここまで逃げてきたってこと？」

「お、よく私がウインディだと分かったな」

「まあ、大好きなポケモンなので」

「そうか、ウインディが好きとは見る目があるな、お前は」

自分で言うなよ。

「……………」

「……つっこんでくれないのか」

「ツツコミ待ちだったの!？」

な、なんだかなあ……思ったより威厳ないかも。

「まあ、その質問なんだが……私が逃げてきたんじゃない」

「じゃ、一体どうやって？」

「八十キロ先からな、ここまで、がんせきほうで吹っ飛ばされてきたんだ」

「はっ……!？」

八十キロ!？ おっそろしいわ! それじゃポケモンじゃなくてバケモンだろ! つか、八十キロ吹っ飛ばされて生きてるウインディも恐ろしい!

「いやはや、がんせきほうを防御できたのは我ながらよく反応できたと思う。まあ、そのおかげで防いだ右腕は使い物にならないが。ははっ」

ははっじゃないよ。右腕の骨、完全に折れてんぞ。うわあぷらぷらさせないで!

「というか、八十キロ飛んできたなんて吹っ飛ばされながらなんで分かったんだ? 随分具体的に言ってたけど」

「ああ、吹っ飛ばされてる間暇だから距離を測っていた」

「いや余裕あるなオイ!？」

めっちゃ苦しそうにしてたくせに何やってんだよ!

「まあ、苦しかったのは事実だし、実質余裕は無かったのだがな。だから助けてもらったことはとても感謝しているよ」

「あ、そう……」

あんな笑顔向けられたら、ツッコむ気も失せるよ。

「……そうだ。ウインディは、誰かのポケモンなのか？」

さっきから気になっていたのだ。ウインディは野生では出てこない。なら、トレーナーバトルでここまで飛ばされたと考えるのが……自然、ではないけど。

「……」

だけど、ウインディは何も答えなかった。……いつのまにか険しい顔になっていた。それは怒りじゃなくて、どっちかっていうと悲しみを表した顔。

ひょっとして、トレーナーバトルじゃなくて、持ち主であるトレーナーといざこざがあったのかも。

「私は、もう行くよ。『マスター』のところへ戻らねば」

「あ……うん、分かった」

マスター、ってことは、一応トレーナーはいるってことでもいいのか？

「あ、それと、匂いからしてここは人里からそう遠くない場所のようだ。この川を下れば、そう迷わずに麓に辿りつけるはずだよ」

それだけ言い残すと、ウインディは跳んだ。助走なしで、たった一つの跳躍で、もうウインディは見えなくなっていた。その跳躍力は、彼女がポケモンで会って人間ではないことを表していた。……仲間になってくれるかも、なんて考えたが、それは都合が良過ぎるか。

サラサラという、川の流れる音が、また俺の耳に入り込んできた。

おれのかんがえたさいこうのぽけもん。 (後書き)

名前で分かってくれたかもしれないですが、この主人公、ほぼ私です。

ええ、ほぼです。私だったらウインディに会えたら全力で抱きつきますから。

8／13

今後の物語の進展で矛盾が出るかも知れなかったので、大幅に変えました。ついでにウインディの美しさマシマシ。

縄張り。

「……さて、行きますか」

少し休憩を入れてから、歩くことにした。

まあ、ウインディも麓が近いって言ってたし、少しくらい長い休憩でも問題は無いだろう。

さ、歩こう歩こう！

——多分二時間後くらい。

まだ人の気配すら見えない。

……あつれー？ おかしいぞー。もう足がガクガクだぞー。日が暮れてるぞー。

何？ 何でこんなに遠いの？ これで麓が近いの？

……『ウインディにとって』の「麓が近い」だったのかな？ だとしたら、俺が遠く感じるのも無理はないか。いや、そもそも山ってこんなもんなのかな？ 山登ったこと無いから分からないけど。あーもう、やっぱり俺は海派だ。山なんか行きたくない。

「まっ、海にも行ったことないけどねっ！！」

シーン。

……虚しい。

「さて、下りるか……」

再び歩き始める。なんだか一気にローテンションになったわ。その時。

ガサツ、と。草の擦れる音がした。

「何だっ!?!」

しかし、音の方向にはなにもない。ただの風かな?

……。

………あ、空、もう真っ暗だな……。

夜は、人を不安にさせる。

そういうことだろう、うん。

………そういえば、俺、一人だな。

「一人、かぁ……」

——一人じゃないよ

「っ!?!」

何だ? 今度は、風の音とかそういうレベルじゃない。

「だ、誰だ?」

声の主は答えない。

代わりに、

——こちらへ、真っ直ぐ走ってきた。

「はっ!？」

かろうじて、こちらへものすごい勢いで走って来る何かを避ける。

「いだっ!！」

その直後、ドォンッ!! とものすごい音がして、何かがぶつかった木が倒れた。

その際、女の子の声も聞こえたんだが……。

ポケモンだ、絶対。

普通の間人が走ってぶつかるだけで、木が折れて倒れるなんてありえない。

ポケモンだ。

冗談じゃないぞ、あんなのにぶつかったら死ぬかもしれないっ!

——初めて、死への恐怖を感じた。一度目……車につっこんでった時は無我夢中だったからなにも感じなかったが。そうか、死が間近にあるって、こんなに怖いことなんだな。特に、誰かから狙われてるってのはっ:!

また、何かが走って来る。また、避ける。

「くっそ……おい、お前誰なんだ!？」

答えてくる気配はまるでない。返って来るのは突進のみだ。

突進?

「そうか、この技は突進か!」

だから、あの時「いだっ!！」って声が聞こえたんだ。突進は自分も少しダメージを受けるからな。

だとしたら、あんまり突進をさせたくないな……かといって、避けないと死ぬし……。

ハッ、こういう時の為にモンスターボールがあるんじゃないか！
よしモンスターボールでこいつを……

モンスターボール持ってねえええ！！

「ま、待て、落ちつけ！ とりあえず突進をやめろ！ えーつと……」

誰だよこいつ。

「とにかく突進をやめろ！」

「やー！」

「やーじゃないよまったくもおおっ！！」

なんとなく雰囲気から分かったが、このポケモンは子供のようだな。なんとか説得をと思ったが、無駄に終わった。

くそ、このままじゃじり貧だ。どうにかしてこいつを何とかしないと！ モンスターボール、どこかに落っていたりしないかな？ それは都合がよすぎるか……って

「うわあっ！？」

何か丸いものを踏んで、すっ転んだ。そのせいで、先程からの襲撃者に足を踏まれた。

「いでっ！？」

って何だこの痛み！？ 足自体は小っちゃくて、子供みたいだったけど、今の靴か！？ 小さなハンマーを思いっきり振り下されたみたいなの痛みだ！

や、やばい。痛くて、足が動かない。頭踏まれたら、確実に死ぬぞ！？

動かなくなった俺を、再び狙う様子が見える。チクショウ、ここま
でか……！！？ そもそも、一体俺は何に転んだんだ？ あれか、ゴミか？ ゴミをポイ捨てするなよ！ 俺のようにな、ゴミのポイ捨

て一つで命を失う奴がいるんだぞ！　チクシヨウポイ捨てさえ無ければ！

ん？

あれ、俺を転ばせたあの球、どっかで見たことあるな……。あの、赤と白の二色のボール……。

「モンスターボールだっ！！」

誰かここに捨てたのか！？　前言撤回ポイ捨てありがとう！　でもポイ捨てしちゃだめだよ！

姿は見えないが、様子を見ればレベルは低そうだし、突進で体力も減ってるはず！

……いける！

最後の力を振り絞って、ごろんと転がる。案の定ポケモンは突進したまま、また近くの木にぶつかった。木がなぎ倒される。わーお、ダイナミック伐採。

「きゅう……」

お、そろそろ頭が辛くなってきたようだ。頭押えてる。まあ、あんなにぶつかってたらな。

よし、捕まってくれよっ……！

「いっけえ、モンスターボールッ！！」

.....
.....。
ポ、

ピ
コ
ー
ン

ピ
ッ

ピ
ッ

ピ
ッ

「ポケモン、ゲットだぜええええええつ!!!!!!」

とりあえず、ずっと言ってみたかったセリフを叫んだ。

縄張り。(後書き)

ポケモンゲットだぜ☆

ポケモンファンなら一回は言ったことあるはず。あるはず。

……ありますよね？

初ポケ。

ポケモンを無事にゲットできたのはいいけど、ぶっちゃけこいつがどんなポケモンかも分かん。

一応命狙われたしなあ……あんまり出たくないけど、そうも言っ
てられないか。

「でてこい、えーと、何か」

あんまりな言い方だが、しょうがない。

赤い光と共に、何かが出てくる。

「ホオオオーン！」

「元気いいオイ」

両手を広げて伸ばしている女の子がでてきた。こいつ、突進で弱ま
ってんじゃないかったのかよ。

さて、まあさっきの叫びでだいたい分かったな。出してくる技もひ
たすら突進だから、こいつなんじゃないかとも思ったが。

「サイホーンか？」

「そだよー」

サイホーンは短く答えた。ウインディと話してた時も言ったように、
ドサイドンは好きだ。もちろんその進化前であるサイドン、サイホ
ーンだって好きだ。ちょっと嬉しいな。

よく見てみると、頭の先には小さな角が生えていた。……うわあ、
突進当たったらマジでやばかったな。

「私、お兄さんに捕まっちゃったの？」

「捕まっちゃったの」

「ふーん？」

サイホーンはなんか不思議な顔で聞いている。まあ、今この瞬間から、さっきまで狙ってた奴のポケモンになったわけだからな。混乱するのも分からなくはない。

あれ、なんかこちらへ向かって突進の構えをし始めましたけど。

「どーん！」

「戻れサイホーン」

「あやっ？」

残念ながら、一度捕まえたならこんなこともできるんだよね。モンスタールール内に強制送還。

「……でてこいサイホーン」

「ホオオオーン！」

「いやいちいち叫ばなくていいから！」

こいつ、出てくるたびに叫ぶつもりか？

だとしたら、人前で出す

には迷惑になるんだが……。

「あれ？ お兄さん？ どこー？」

「いや、お前の後ろにいるだろ」

きよろきよると俺を探す姿は、可愛いと言えなくもない。馬鹿だけど。

「あはっ、お兄さんいた！」

ああ、笑顔が眩しい。素晴らしく馬鹿だけど。さすが、全てのポケモン図鑑に頭の悪さを書かれることだけはある。

ひよっとしたら、さっきまでの突進も、ただ遊んでるだけだったのかな？ まあ俺はその遊びで危うく死にかけたんですけど。

で。何でまた突進の構えをするんですかサイホーンさん!?

そんなわけで、五、六回モンスターボールに入れたり出したりして、ようやく突進して来なくなった。

「うー……突進できない」

「しなくていいから。君も痛いだろう？ 突進」

「ううん、私、石頭（※）だから。ちょっと痛いけど平気」

「……マジで？」

痛くてもダメージ量には入らないのか……痛いイコールダメージではないってことね。

「うー、お兄さんともっと遊びたいー!」

あ、やっぱただ遊んでるだけだったんですね。冗談じゃありません、命をかけた遊びなんてやってられるか。

「でもそれ喰らったらお兄さん死ぬから。お兄さんが死んだらどう責任とるつもりだったんだよ」

「えー？ でも、私の縄張りに入るお兄さんが悪いんじゃないのー？」

う、不可抗力とはいえ、正論だ。馬鹿なのに正論だ。自然の掟は厳しいな。

「と、とにかくだなー。俺はもうお前の飼い主なんだから、突進なんてしちやいけないの!」

「うー……」

そのうー言うのをやめなさい。

でも、こいつが馬鹿じゃなかったら危なかったな。……ポケモンを仲間にするのも、いろいろ苦労があるんだろうか。

「うー、分かった。よろしくね、お兄さん」

「ありがとな。それと、俺の名前はシグだ。シグって呼んでくれ」
「分かった! よろしくね、お兄さん!」

「……………」

うん、この子の性格は素直だな。馬鹿だけど。素直は特にどれもパラメータに影響が出ない性格だ。本当なら陽気かいじっぱりがよかったんだが、まあひかえめじゃなくて良かったよ。出会いがしらに突進してくるひかえめなんていないけど。

「……それで、サイホーン」

「なに？」

「……その、この山に思い残すことはないのか？」

とりあえずそれが気にかかっていたんだ。ゲームじゃ気にしていなかったが、本来ならここはサイホーンの住処だ。山から出たくないという気持ちも少なからずあるだろう。

「あは、ないよ。私、いつもみんなに仲間外れにされてたから」

「……え？」

「この山はね、サイホーンがすごく少ないの。それに、馬鹿だからって、群れに入れてもらえないの。だから、サイホーンはサイホーンだけで頑張ってる。私の友達なんて、もう他のサイホーンとコイちゃんだけ」

……なんだかポケモン世界もいろいろ大変なんだな。ポケモン社会の生生しさなんて感じたくなかったよチクショウ。そして、コイちゃんってのはコイキングだろうな……。馬鹿だってだけで仲間外れなんだから、ポケモン図鑑に「世界で一番弱くて情けないポケモン」とまで書かれてるコイキングもそりゃ仲間外れだろうなあ。

「じゃ、友達に別れの挨拶でもしてきたらどうだ？ いきなりいなくなったら、みんなだって寂しがるだろ」

「そんなことないよ。トレーナーに捕まっちゃって会えなくなった友達なんて、たくさんいるもん。だからね、友達に別れはいらないの」

……おい、なんだか俺が悪役みたいじゃないか。すっごく居心地悪いぞ。

「あつ、お兄さんが悪いって言うてるんじゃないよ？ 私、お兄さんと追いかけてっここできてすごく楽しかったもん！」
あれは追いかけてっここですか、そうですか。俺はリアル鬼ごっこしてる感覚でしたが。

「それにね、私、いつか世界中を走り回るのが夢なんだ！ だから私も、お兄さんについていきたい！」

「ん、ああ、そうか、そりゃ大きい夢だな」

うーん、無理してるな。分かりやすいやつだ。これがポケモン世界ってやつなのか……いちいちこんなこと気にしてたらポケモンなんて捕まえられないし、割り切るしかないのか？

まあ、今はとりあえず。

「サイホーン」

「何？」

「麓はどこだ」

「……ひよつとして、迷ってここまで来たの？」

「まあ、似たようなもんだ」

サイホーンに呆れ顔されるのは癪だが、なにせ追いかけてまわされて川沿いも何もあったもんじゃないのだ。彼女に案内してもらおうほかない。

「じゃあ麓まで案内してあげるよ。お兄さん、しっかりついてきてね！ 遅れちゃ駄目だよ」

「こやつめハハハ」

頼られていい気になってるサイホーンだが、まあ他に頼るものもないから仕方ない。と、そこに手を握られる感触がした。ああ、走るのね。

……ってまさか、サイホーンさん？ あの実進のスピードで走るとかやめ

「どーんっ！」

「うおおおおおっ!? は、腹につ、Gが! Gがかかってる!」

やめろよおおっ!?

ものすごい重力に耐えながらも、ついていく——もとい、振り回される。時速100キロくらい出てね?

「もうすぐだよっ!」

まあ、そんなこんなで、なんだかよく分からない内に街が見えていた。でも必死にGに耐えてるんで感動とかする暇がありません。あ、川が見える。

「あ、水飲もつと!」

ええっ!?

「急ブレーキかけんなああああ……!」

やっぱり、馬鹿だこいつつ……! 俺はサイホーンを恨みながら、水切りの要領で川を何バウンドもしながら沈んだ。

初ポケ。(後書き)

石頭…ダメージの反動を受けない。

別れは、いらない。

「お、お兄さん……大丈夫？」

「中学の時水泳部やってなかったら死んでた」

「ご、ごめんね」

幸い川の流れが穏やかだったのと、俺が水泳得意だったおかげで助かった。こいつと一緒にいると何度命を危険にさらすことになるか分からん。

「くそう一人だけ悠々と川の水飲みやがって」

「お兄さんも飲む？」

確かに喉が渴いたな。……誰かさんに振り回されたから、思いつきり喉が渴いたわ。……少し飲むか。手ですくって、と。

「キンキンに冷えてやがるっ……！」

「ど、どしたのお兄さん？」

「……いや。うん、川の水はおいしいな」

「そだね！」

……まあ、ポケモンにネタを分かってもらうつもりはないけどね。

「さて、じゃあ行きますか。ありがとなサイホーン。街ももうすぐだ」

「……そだね、行こうか」

やっぱりもうすぐ山を出るとだけあって、少し寂しさを隠せないでいるようだ。うーん、どうにかならないかな。そう思っているけど、足は進む。ちやくちやくと街への道のりが縮まっていく。その時だった。

「……ちゃん」

「ん？」

誰かの声が聞こえた。

「サイホーン、何か言った？」

「いや、なんにも？」

「サイ………ちゃん！」

「あ、この声っ！」

「ど、どうした？」

様子からしてサイホーンの友達かな？

声の主も、どうやらサイホーンを呼んでるみたいだし。

「コイちゃん!？」

「サイちゃん！」

コイキングだったようです。三人目のポケモンになるのかな。彼女は川の中で、小さな王冠を頭に乘せ、綺麗な金色のドレスを着ていた。さすがキング、絢爛豪華だな。

ん？

金色？ 驚いた、色違いのコイキングだったのか！

「コイちゃん！」

サイホーンが川へ走りだす。

「おい、お前水タイプ四倍なんだから気をつけろよ！」

「来ちゃ駄目だよ、サイちゃん」

「ええっ!？」

「ほら、言わんこっちゃない。そりゃ止めるよ、危ないもん」

「……こっちに来たら、きっとサイちゃんはもっと寂しくなっちゃ

うよ」

「あ、そっちか」

というか雰囲気ぶち壊しだな俺。ちょっと黙って見てよう。

「でもっ……!」

「駄目だよ。あのお兄さんについてくんでしょう? サイちゃん、いつか世界中を走り回りたいって言ってたじゃない。なら、夢を叶えてきなよ」

「でもっ……そうだ、コイちゃんもついて来てよ!」

「私は駄目だよ。弱いし、色違いだからすぐ狙われちゃうし。だからね、私は人の来ないここが一番の場所なの。だけどサイちゃんは違う。サイちゃんにこの山は狭すぎるんだよ。だから、ね? いてらっしゃい、サイちゃん」

「……………うん」

会話だけ見てると、サイとコイが主人公の絵本を見ているようだ。それにしても、本当はモンスターボールがあったら一緒に連れて行きたいくらいなんだが……ないんだな、これが。それに、コイキング自身ここがいいって言ってるんだから、連れてくことは出来ないよな。

サイホーンは、ただ黙っていた。ここで俺が言葉をかけるのは邪推だろう

言葉をかけるのは、あの子だけで充分、ってな。

「ね、サイちゃん。やっぱり、ちょっとだけこっちに来て」
「う、うん」

サイホーンは、たどたどしく走っていく。
コイキングの目の前にサイホーンがしゃがみ込むと、彼女はそっと

サイホーンを抱きしめた。

「私は、いつでもサイちゃんと一緒だよ」

「え……？」

「私は、ここにいます」

コイキングが、彼女の頼りない胸に手を置く。

「私たちは友達。会えなくても、心はつながってる。ね、いつだって一緒だよ、私たち」

サイホーンは、ただ黙って抱きしめられていた。コイキングも、ただ黙って抱きしめている。

「――友達に、別れはいらない」

『トレーナーに捕まっちゃって会えなくなった友達なんて、たくさんいるもん。だからね、友達に別れはいらないの』

同じ言葉でも、こんなに違うもんなんだな。

サイホーンの手は、ただの強がりだった。本当は別れを言いたかったから、こんなに別れを惜しんでいるのだ。だけど彼女の言葉は、ただの強がりなんかじゃない。きちんとした『強さ』が、彼女の中にある。自然とこっちまで元気づけられるような、そんな雰囲気がある。

彼女にはある。

……将来大物になるな、このコイキング。なおさら欲しくなった。

サイホーンがこちらへ歩いてきた。話が終わったのだろう。

「お兄さん、行こ」

「ん」

俯きながら、彼女は歩き出した。

肩が小刻みに震えているのが分かる。……まったく、変なところで強がりなんだからこいつは。

「あのさ、サイホーン」

「……何？」

「泣きたいときは、思いっきり泣いていいんだぞ」

彼女は、俯きながら泣いていた。

俺は、サイホーンとコイキングがどれほどの付き合いかは分からないが、相当仲が良いということはすぐに分かったさ。

だけど、これからは俺がこいつのトレーナーで、こいつの仲間であり、こいつの家族だ。

まだ出会って数時間とはいえ、さ。

「少しくらい、俺に頼れよ」

「うっ、ひっく……っく」

嗚咽を漏らすのが聞こえる。そして、静かに俺に抱きついた。彼女は俺の胸辺りまでしかないから、自然と腰に手が回される。俺を恐怖させたポケモンの姿はどこにもなく、そこにいるのは、儚く、今にも消えてしまいそうな弱い女の子でしかなかった。

コイキングがしたように、今度は俺が、彼女の頭をそっと撫でる。

「うああああ……！」

それで今までの我慢が切れたのか、弱弱しく彼女は泣いた。

「……落ちついたか？ サイホーン」

「うん……ありがとう」

しばらくして、ようやく彼女は泣きやんだ。

「よし、麓までもう少しだ。街に着いたら、ポケモンセンターでゆっくり休もうな！」

「うん！」

……といっても、ポケモンセンターが実在するかどうかも本当は分らないんだけどな。ま、サイホーンの元気な声がまた聞けたから、いっか。

「それじゃ行こっか、シグ！」

へ？

「お、おいちよつとサイホーン。もう一回！ もう一回言ってみて今の！」

「えへへー。ほら早く行こうよー！」
ちよつと意地悪に、サイホーンが笑う。

なんだ、単なる馬鹿じゃなかったんだなあいつ。

……それにしても、誰かに認められるってのは、こんなに嬉しいものなんだな。

心の奥で喜びながら、今はサイホーンと一緒に走ることにした。

別れは、いらない。(後書き)

コイキングって、なんか優しそうですね。

キングというより、シンデレラといいますか。

だから、最後にはギャラドスになって、報われるわけですね。

いやまあ、登竜門伝説が元ネタですけど。

初めての街。

「んーっ、やっと街についた！」

「おつかれさまー」

「サイホーンもありがとな。おっと、そうだ。街に着いたから、一旦ボールの中に入っててくれ」

「はい」

あれからしばらくして、やっと街に着いた。ウインディめ、何が近いだよ。まあ、無事に着いたからいいけどね。それと、下りる途中で気付いたんだが、モンスターボールから出たり入ったりするのはポケモン自身もある程度自由がきくようだ。

「さて、どうしたもんかね……まずは、ここがどこだか聞いてみるか」

この街にはコンクリートが敷き詰めてあったので、マサラタウンとかそういう始まりの町ではないと思う。でも、別に都会という訳じゃないからトバリシティやヒウンシティとも違う。ま、聞くが早いな。

「すいませーん」

「はい？」

俺が話しかけたのは、ピンク色の髪をした女の人だった。

「えっと、ここってどこですか？　ちょっと道に迷っちゃったんですけど……」

こう言っておけば、変には思われないだろう。

「まあ、それは大変ですね。ここは三丁目ですよ」

そこじゃネエエエー！　限定的すぎる！　限定的すぎる

よ!?

「いや、あのっ! 何タウン、もしくは何シティですか?」

「え、あつ、すいません。ここはニビシティです」

ニビシティ。ジムリーダーのタケシがいる街か。

ふむ。でもやっぱりゲームとは違うな。道路で舗装されてるし、電信柱もある。パッと見現実世界とあまり変わらない。

「……遠いところから来たのですか?」

「ええまあ、かなり遠いところから」

次元を超えてきました。

「なら、一度ポケモンセンターには寄るべきですよ。案内しましょうか?」

「あ、お願いします」

いやあ……これはもう、いよいよポケモンの世界って感じだな。ポケモンかあ、たくさんポケモンがいるんだろうな。テンション上がってきたぜ!

……かしまあ。

「随分と、ポケモンが外に出てるんですね……?」

さっきから、結構明らかにポケモンの姿が見える。あれは、明らかにイワークだ。髪が灰色だし、ごつごつした岩で髪を括っている。んで、あれはなんだろう。あ、ヒトデマンだ。胸に綺麗な赤い石があるし、全体的に（服とか髪とか）茶色いし。

……現実だと、ポケモンは危ないから街中では出してはいけないみたいなの決まりがあるのだろうと思っていたんだがな。

「おや、都会ではポケモンが出ていないんですか？ 私はこの街から出たことが無いので分からないのですが」

「あ、いや、そういうわけではないんです」

「はあ……。まあ、でもそんな地域があるとしたら、ずっとボールの中でじつとしているのでしょうか？ だとしたら、私たちポケモンにとっては酷く窮屈ですわね」

「はは、まあ確かに」

え？

私たち？

「えっ！？ あなたポケモンなんですか！？」

「え、ええっ！？ ど、どこからどう見ても私、プクリンじゃないですか！」

「分かり辛っ！」

でも、確かに服とかまでピンク色だから、おかしいなーとは思ったけど。それにしても、今後はこんなことがないようにしたい……。いやむしろ、人間に「君はなんていうポケモン？」って聞かないようにしよう……。

「あ、ほら。ポケモンセンターはあそこです」

「どうもすいません、わざわざ案内してもらって」

「いえいえ、私もちょうどあそこに用があったので」
につこりとプクリンは笑った。……おっとりか。

その時、いきなりポケットに入れておいたモンスターボールからサイホーンが出てきた。

「うおっ、どしたサイホーン」

「たいくつつっ！」

ドーン、という効果音がつきそうなくらい堂々とサイホーンは言った。

「あらあら、可愛い。その子があなたのポケモンですか？」

「え、ええまあ」

「元気いっぱいですけど、ところどころ擦り傷切り傷がありますね。早めに治療してあげてください」

「はい、そうします……というわけで、もう一度戻れサイホーン」

「やーだー！ もっと外にいたー」

はい強制送還。ちなみにこれも山の中で気付いたことだけど、どうやら自分自身でボールを握ってる間は出ようとしても出られないらしい。

ウィーンと、自動ドアが開く。いよいよポケモンセンターの中だ。

クーラーがきいていて涼しい。

「マスター、お客様を連れてきましたよ」

「ご苦労さまプクリン」

プクリンは、ジョーイさん……でいいのかな？ の、横についた。

「お願いしまーす」

まさかリアルでポケモンセンターに来るとは思っていなかったのですが、どうすればいいか全く分からなかったが、ジョーイさんは快くモンスターボールを受け取ってくれた。よかった。

治療は、ホントにゲームみたいにあつという間だった。テンテンテケテン♪みたいな軽快な効果音が終わると同時に、

「お預かりしたポケモンは元気になりましたよ！」

これだもん。どんだけポケモンの治癒力早いんだよ。それともポケモンセンターの医学が凄い進んでるだけなのか？

まあ、いいか。これでサイホーンも元気になったことだし。

「よーし、出てこいサイホーン」

「ッホオオオオンッ!!!」

「あっははー元気いっぱいだなサイホーン。ちょっと黙ろうな」
後でここはちゃんとしつけておかないとな……。可愛らしいっちゃ可愛らしいけどさ。

それで、改めてサイホーンと一緒にポケモンセンターの中を見てみると、本当にポケモンが多いんだ。

パツと見で分かるのは……。ヘルガー、カクレオン、シャワーズ、あれは、ミカルゲかな？ とにかく強そう弱そうたくさんいる。
んで、我がサイホーンは……

「ねえねえ、一緒に遊ぼうよー」

「いやだよ。サイホーンとは相性が悪いし」

「ねえねえ、一緒に遊ぼうー」

「いやよ。サイホーンなんて、私の水ちよっとかかるだけでふらふらになっちゃうじゃない」

「ねー、誰か一緒に遊ぼうよーっ!」

ああ……。すごく子供だ……。目を押さえたくなるくらい純粋な子供だ。それで弱いのは目に見えてるし。たぶんあのヘルガーのかえんほうしゃだって確一だろう。

「あんまりポケモンセンターで騒ぐなよ、サイホーン」

「えー、だって」

「だってじゃない。遊びなら俺が後で好きなだけ遊んでやるから」
「ホント!? じゃあ我慢する!」

ふう……。なんとか収まってくれた。

「ふふっ」

誰かが笑った。俺の隣に座ってる人だ。この人は……うん、この人はポケモンじゃない。金髪、背が高い普通の女の人だ。

「いや、なんかうちのサイホーンがすみません」

「いえ、いいのよ。ただ、あなたにすっごく懐いてるなって」

「えっ？　そうですか？」

ことあるごとに突進をしてくるあの様子は、とうてい懐いてるようには見えないけど……。まあ、本当に遊んでるだけだろうけど。余計にタチが悪いわ。それに、出会ってからたった数時間なのに、そこまで懐くはずがない。

「私にはすごく懐いているように見える。長年あの子と一緒に？」

「いえ、数時間前捕まえたばかりですよ」

「そうなの？　じゃあ、あなたの才能かもね」

「才能、ね。そんな大層なものがあるとは思えないですけど」

「いいえ、ポケモンに懷かれやすいのは立派な才能よ」

ふーん？　そんなもんなのか？　でも、ただあのサイホーンが人懷つこいだけだと思っただけ。

「……あなた、強くなりそうね。また会うかもしれないわ」

「は、はあ。ありがとうございます」

「じゃ、私は行くわ。おいで、ミカルゲ」

「おおんみよおん！」

ミカルゲが笑いながらついていった。……ふむ、あの人どっかで見たことある気が

「って、思いつきシロナさんじゃん！」

シロナさんがいなくなった後で叫んだ。そうだよあの金髪！　ズボンが似合う高い身長！　おまけにミカルゲ！　シロナさんじゃん！

「シグ、どうしたの？」

「ん、ああいや、なんでもないよ」

くそ、今すぐにも勝負したかったけど、さすがにサイホーン一人じゃ無理だよな……。

って、そうか。これから、何回もバトルしなきゃいけないんだ。サイホーンのこと、よく知っておかなきゃ。

「サイホーンってさ、どれくらい技使える？ 突進以外で」

「えっとねー。お母さんに教えてもらったのがね、ストーンエッジと、じしんだよ！」

「地震？ そうか、お前のお母さんって、結構な強さだったんだな」

「そうだよ！ 今はもうトレーナーさんと一緒にいるけど、すごく強かったんだよ！ 水ポケモンにだって勝てたんだから！」

へえー。サイホーン系は特防低いし、岩・地面タイプで水技が四倍だから、水なんて正に天敵だ。それに勝てるとは凄い。

本来の目的とは違うが、ジムに挑むのも悪くないかもしれない。ニビジムのタケシなら相性もいい。

……となると。

やっぱり必要なのが、『努力値』だな。

ニビジムの近くだったら、ポップで素早さを上げ、ニドラン♂で攻撃を上げるのがいいな。

「よし、そうとくれば修行だ！ サイホーン、ちよつとついてこい！」

「えっ、えっ？ あ、ちよつとシグ、待ってよ！」

これぞポケモン、って感じだな！

これからのことに胸を躍らせながら、俺はポケモンセンターを後にした。

初めての街。(後書き)

ゲームだと何もありませんよね、街って。

ポケセンとフレンドリイショップとポケモンジムと民家だけでどうやって生活するつもりなんでしょう、と考えた結果、あまりこちらの世界と変わらない風景になりました。

1 1. 1 1. 1

すみません、ストーンエッジと書くところをロックブラストと書いていました。全然違う技です。

努力値。(前書き)

いきなりポケモンの法則について触れていきます。説明回です。

努力値。

「よしっ、そこポッポ！」

「はいさっ！」

「そっちのニドラン！」

「ていや！」

そんな感じで、今俺達はニビシティ周辺の草むらで努力値を振ってる。

でもそれだけじゃない。俺とサイホーンの修行でもある。

サイホーンは、見て分かる通りまだまだレベルが低い。経験値を上げるため、そして経験を積むため。

俺も、ゲームとの違いを少しずつ見つけようとしてる。

おっと、もちろん修行三昧じゃないぞ。これはゲームじゃなく、現実なんだね。ただひたすら修行なんて愛のないことは絶対にしない。自慢じゃないが、俺は某魔物の牧場ゲームでも、表記が「元気みたい」になると必ず休ませてたもんだ。

サイホーンには、次の指示を出している。

ポッポとニドラン♂以外は、絶対に倒してはならない。

ポッポが出たらストーンエッジ。ニドランがでたらじしん。

そして、両方とも『相手が倒れるギリギリの力』に調整して出す。

これは、ここのポケモン世界での発見だが、どうやらレベルが低いと操るのが難しい技もあるようだ。地震はゲームの方ではかなりポピュラーな技で、かなり強力。サイホンなんて、本来56レベルでやっと使えるようになる技なのだ。今のレベルでうまく使えないのも自明の理。

……まあ、本当はゲームとはちよつと覚える技やレベルが違うし、曖昧なんだけどな。ほら、アニメでだって、戦闘中に進化したりするくらい曖昧だし。まあ、それは後にしよう。

とにかく、最初なんて地震で自分がダメージ受けたりしてたんだが、使い続けることでだいぶ精度も上がってきたみたいだ。かなり威力も範囲も調整できるようになった。

威力の調整は、相手を見極める能力を身につける為だ。これは当たり前なんだが、当然相手のレベルやパラメータなんて会っただけじゃ分からない。だから、この能力を早々に身につける必要があるんだ。

「っ、そこポップ！」

「ってーい！」

「ぴあー！」

岩の雨を受けて、ど、っと倒れるポップ。あ、当然人型。

「そこまで！」

「だあーっ、またあんたらに負けた!」

「はは、ごめんな」

「もう、いいからほら! 早くいつもの!」

「あーはいはい。ほら、すごいきずぐすり」

ホント、ポケモンのアイテムって安直なネーミングだな。と思いな
がら、ポップにすごいきずぐすりを渡した。

さて、どういふことかというのだ。

さすがにここはゲームの世界じゃないから、日々ポップとニドラン
♂を苛めるのも忍びない。

それで、ポケセン出た後に気付いたんだが、財布はどうやらポケッ
トに入ってたままだったんだ。入ってたお金は20000円(残して
いたおとしだま)程度。そのお金を使って、フレンドリイショッ
プですごいきずぐすりを買い、修行がひと段落ついたらポップたち
に渡しているのだ。

ここで、またゲームとは違うルールが二つ。

まず、フレンドリイショッブはどこも共通で同じものを売っている
らしく、きずぐすりからかいふくのくすりまで、ニビシテイでも売
っている。

そして次に、きずぐすりの使い方。これは、数値にすると全て使っ
て200回復ということらしく、みんなで分け合うことができる。
そして、これまた便利なことに、ガソリンスタンドよろしく体力が
満タンになるとそのポケモンはそれ以上使えなくなる。だから、一
人が使いすぎることは無いわけだ。

さっきも言ったように、相手が倒れるギリギリの力でやってるから、そこまで深い傷を負うことは無い。

まあ、最初の内は苦勞したけどな……。めっちゃみんなに謝りながら、修行続けたっけ……。

でも、次第にポケモン達の方も火がついたようで、今では皆で戦ってサイホーンをどこまで追いつめられるか競ってるようだ。

ちなみに、一日のノルマは両方20匹。少ないように思えるだろうけど、あんまりやりすぎるのも悪いからさ。今日で八日目だから、あと五日くらいか。

一日一往復。それが終われば、あとは自由時間。サイホーンはニドランやポツポたちと戯れている。

……こうすれば、俺がわざわざ命を張る必要もないからな。

「よーっし、いっくぞー！」

「ツシヤアこいやオラアアアアッ！！！」

……ほら、今もゆうかなニドラン♂がサイホーンの突進を受け止めようと無謀な挑戦をしている。

「つどーん！」

「ぶっへえーっ!？」

弧を描き……ニドラン♂は飛んだ。まあ、レベルに差も出てきてるから当たり前だろう。

ちなみに、今のサイホーンに俺が当たったら多分確実に死ぬ。

「ヒューッ……ひゅーっ……おい、シグ……き、きずぐすり」

「呼吸困難はきずぐすりじゃ直せねえよ。ったく、お前も学習しな

いな」

今じゃすっかり「シグ」なんて呼び捨てされている。

そして、更にゲームとは違うところ、というか、発見したところ。ポケモンは、その性格によって着ている服が違う。

例えば、おっとりとしたニドラン♂はやたらふわふわした服を着ているが、今のゆうかなんなニドラン♂は妙に刺々しくて、重そうな半分鎧みたいな服を着ている。

せいかく厳選が楽だろうなあ……と思ったり。ま、せっかくのリアルポケモン世界。細かいこと……个体値とか、出会ってからが変わらないものは気にしないでおこう。

「サイホーン、ちょっとこっち来て」

「ん？ どしたの？」

「いやなに。特にどうということはないよ」

サイホーンが俺の前に立つ。彼女を、俺はじっと見つめた。

サイホーンと同じように、俺も、そこそならレベルの判定がつくようになつてきた。

……ふむ。

「……あ、ちょっと、おい！ 何で目をそらすんだよ！」

「だ、だって！ じっと見つめられたらそりゃそらすよ！」

「お前は犬か！」

「サイだよ！」

仕切り直し。

再度サイホーンにこちらを向かせ、レベル判定。

「……うーん」

「~~~~っ」

「うーん？」

「ま、まだ？」

「いや、よく考えたら、ニビシティ周辺のポケモンしか見てないから……お前のレベルまでは、分からん」

「……もーっ」

ぷくつと頬を膨らませるサイホーン。

やべえ、もしゲーム世界でのポケモンだったらとか考えたら気持ち悪くなった。

ゲームのサイホーンが頬を膨らませて怒ったら……うん、考えるのは毒だ。

「……なんで人の顔見て顔色をみるみる悪くさせるの？」

「いや、お前のことを見てたわけじゃないんだが」

「じゃあ誰のこと見てたっていうのさ!？」

いや、まあ気持ち悪くなる直前までお前の顔見てたけどさ。

「ま、まあでも、今のところ15レベル以上25レベル以下ってとこかな。何となくだけど」

「そっか……。ちなみに、ポップ達は？」

「ん？ 大体五、六レベルって感じかな」

「そっかそっか。えへへ、いつの間にか強くなってたんだね」

「そりゃーな」

そういえば、この世界に経験値の概念はない。つまり、レベルというものが存在しないのだ。だけど、実際レベルはあると思う。よく見ていると、一定数戦うたびに、段階的に攻撃や素早さ、防御などが上がっているのが分かる。まあ、戦闘中にも経験値は少しずつ入っているのだろう、だから戦闘中に進化していることがあるんだ。

「ねえシグ。その、『ジムリーダー』っていうのと戦うのはいつなの？」

サイホーンには、もう修行の目的を伝えてある。目的は向上心を生むからね。まあ、相手がサイホーンなだけに、『ジムリーダー』って

いうすごーい強いトレーナーと戦う』ということしか伝えてないけど。

「ん……五日後、この修行が終わってからすぐ後だな」

「そっか。五日後か……その時には、みんなともさよならか」

若干、寂しげなサイホーン。まあ、しょうがないか。

「さて、サイホーン。そろそろポケセンへ戻るぞー」

「はーい！」

今の寝床は、ポケセンのジョーイさんに提供してもらっている。

ニビシティには、ゲームと違ってちゃんと宿屋とかレストランとかあるのだが、いかんせん金がない。すごいきずぐすり一つで1200円だ、あと五日、つまり6000円の出費がある。宿屋とか利用できる訳がない。

ホント、ジョーイさんには感謝だ。感謝っ……！ 圧倒的感謝っ……！

ポケセン使わせてもらえなかったら、今頃このニドランやポツポたちと野宿だよ……あれ？ それも結構いいかも？ いや、よくない。

「ただいまですジョーイさん」

「あら、おかえりなさいシグさん。今日は早いですね」

「ええ、最近ようやく慣れてきたって感じです。いつもすみませんね」

「シグさんのように、ポケモンとの特訓で野生のポケモンまで気にかける人は滅多にいません。だから、ポケモンセンターを秘密で提供しているんですよ」

そうなのか……。まあ、ゲームだと気にかけれない、というか気にかけるシステムがないし、不思議ではないか。

ちなみに、どこで寝るかというとポケモンセンターのソファの上。サイホーンはその下で丸まって寝る。猫かよ、とツツコみたくなるが、サイです。

「シグは、このあとどうするの？」

「ん、まあ今日はすごいきずぐすり買ったら特に何もすることないかな」

「じゃ、先に寝てるねー」

「おう、おやすみ」

……ふう。

ここでの生活も、あと五日。

それが終わったらジムリーダーへの挑戦か。上手くいくといいな。

……ポケモンを個体値厳選したり、努力値振ったりする人の事を、ひたすら強いポケモンを求める人達を、俺達は『廃人』という。

俺は、その廃人にはなりきれない。

もちろん俺は誰よりもポケモンが好きで、バトルはそれなりに強い。だけどあくまで、俺が使うのは『強いポケモン』ではなく、『好きなポケモン』。

ポケモンってのは、強いポケモンを見つけるゲームじゃない。自分の好きなポケモンを、自分が持てる力の限り強く育てるゲームだと思ってる。

だから、いつもドサイドンやウインディを使って戦った。

だけど、ドサイドンは得意不得意がはっきりしすぎだし、しかもウインディをセットにしてもあまりメリットはない。だけど、使ったポケモンが、そいつらが好きだから。

俺ほど愛情を込めてポケモンを育てる奴は、現実世界にはあまりいないだろう。現実逃避と言われれば、それは、そうなのだが。

だから、俺はここに来て本当に良かった。サイホーンを、俺が持

てる限り最大限の愛情で育てよう。

……でも。元の世界に帰って、やらなきゃいけないことがあるのも、確かだ。

誰か一人が持っている、16枚のプレートをアルセウスに返さなきゃいけないのも確か。

……別れの事は、出会ったときに考えるもんじゃないよな。
さっさとすごいきずぐすりを買いに行こう。

努力値。(後書き)

ドサイドンはやはりようきAS極振りロツカ型もしくは鉄火バトン型ですよね。シグも同じことをしているようですが、そもそもドサイドンへの進化方法ってなんでしょう。

ニビジムリーダー。

「そおい！」

「いだあっ!!」

「はい、そこまで！」

「えっ、もう終わり？」

十三日目。

ニドラン♂に地震を当てて——ついに、攻撃、素早さ、どちらも極振りにできた。

サイホーンはかなり強くなっているのだが、頭は変わらない。最後の日なのに倒した数の計算もできなかった。

「あー、また負けちゃったか。次こそは！」

「次はないぞーポップ。昨日言ったら、今日が最後の日になるって。はい、さいごのきずぐすり」

「あ、あぁー……そういえばそっか」

若干寂しそうなポップ。まあ、十三日間是一緒にいた仲だ、無理もない。俺も寂しいし。

「ええ……？　そ、そうなの？」

「お前は人の話を聞かないな、ホントに」

昨日、実は全員に言ったんだぞ。今までお世話になった、約五十匹ずつのポップとニドラン♂達、それからここで遊んだニドラン♀にも。無論、今困惑してるサイホーンにもだ。

「そっか……もう、会えないのか。寂しいな」

まあ、こいつが一番寂しそうになるよな。そりゃ。こいつ、やっぱりさみしがりじゃねえの？　それだと防御は下がるが攻撃が上がるし、いいかも、なんて。

「ほら、とつとと行くぞー。別れを惜しんでる暇はない」

「え、えっ？ どこへ？」

「バカモノ。何のために今まで戦ってきたと思ってんだ？ ジムリーダーを倒すためだろうが。まずはポケセンで傷を治して、それからジム戦だ。気い張っとけよ」

「あ、そっか」

こいつは……。

「じゃーね、みんな！」

「おう、負けんなよ！」 「頑張って来てねー！」 「応援してるよー！」

百匹以上の野生ポケモンの声援を背に、俺達はまずポケセンへと向かった。なんかしまらん。

そんな皆を寂しそうに見つめる、サイホーン。こいつは……この寂しがりな性格、厄介だな。

……ふむ。

「……ジムリーダーに負けたら、またここで修行するかもな」
「えっ？」

わざと聞こえるように、ちよつと意地悪なことを言った。

ポケモンジムへ入ると、パーンパカパーンパカ♪みたいな、ゲームで聞いたことのあるポケモンジムの音楽が流れ出した。きちんとBGMはあるんですね。

「なんか、きんちょーしてきたねー」

「その言い方全然緊張してねえよ」

あたりを興味深そうにキョロキョロと見回すサイホーン。

……目の前に仁王立ちしてる人いるし、多分あれだろ。一直線に――

「オッス！ 未来のチャンピオンッ！！」

「うわあびっくりしたぁー!?」

そ、そうだ、ジムリーダーといえば、このやたら元氣のいいお兄さんがいたんだった！

「ちょ、ちよつと！ そういうのやめてくださいよ！」

「びっ、びっくりした……」

「はっはっは、まあいいじゃないか！ 頑張って来いよ！」

あいつ……ゲーム内でも思ってたが何がしたいんだよマジで。まあ、とりあえず歩こう。殴るのは後だ。

そういえば、ゲームだとこのジム、ジムリーダーとこいつと……あと一人いたような。

「おいそこの！」

いたようなじゃなくて、いたね。

「なんですかー？」

「お前がタケシさんに挑むなんて、百万光年早いんだよ！ いけっ、

イシツブテ！」

「よっしゃあ！ かかってこい！」

出た、光年少年。確かイシツブテとサンドだっけな。イシツブテはともかく、サンドは相性悪いし、やばいかも？ なーんて。

「きゅう〜…」

「しまった…百万光年は時間じゃない、距離だっ…！」

「やったー♪」

十三日間修行を続けたサイホーンの敵じゃないけどね。サンドを軽々と突破。ちなみに今のは負けセリフのようです。

「さてサイホーン。……連チャンいけるよな？」

「もち！」

いい返事だ。これなら問題なくいけるか？

「ほお、君が挑戦者か」

出たなタケシ。相変わらず偉そうだな。その仁王立ちやめろ。

「そうですね、何か？」

「いや、サイホーン一匹で挑戦するのは、いささか無謀なんじゃないかな、と思ってるね」

「余計なお世話です」

なんでジムリーダーなのに小物役なんだよこいつ。その仁王立ちやめろ。

「俺の使うポケモンは、俺のこの硬い意志のような——」

「ポケモンバトルに、御託はいらない。さあ始めましょうか」

こいつはあんまり好きじゃないからセリフを飛ばす。やや残念そうだけど関係無い。

「……いけつ、イシツブテ！」

「よっしゃこいやあ！」

「サイホーン、じしんで落とせ！」

「はいさっ！」

ニビジム、タケシ。持っているポケモンは、確かイシツブテとイワーク。イワークは確か、70族（素早さの種族値70のポケモンのこと）。イシツブテは問題にならないが、イワークがやっぱりきつかな。サイホーンは攻撃型。しかしイワークの防御は並大抵じゃない。それに加えて、あの地味な素早さ……普通のサイホーンなら、イワークを抜くことはできない。
だが。

こっちは、性格補正は無くても素早さ極振りしてんだ。それにレベルならこちらの方が上のはず。これなら、いけるはずっ！

「……何やら、先ばかり見てるようだな？」

え？

「イシツブテ、耐えろ！」

「うゝうゝ、なんとか」

んなっ!?

耐えただと!?

「言っただろう。俺のポケモンは俺の意志のように硬いんだ」
「言わせてないけどねー……なんて言っている場合じゃない! 反撃される!」

「イシツブテ、地ならしだっ!」

「ほいさっ! くらいな!」

地ならしっ!?!? 地面タイプだから効果抜群、いやそれはこの際関係無い、レベル差はある。

問題は、素早さが一段階下がるってことだ!

「サイホーン、避けろっ!」

「ふええっ!?!? 避けろったって、どうやってえ! むぎやあーっ!?!?」

結局、地ならしはクリーンヒットした。サイホーンの素早さが下がる。

くうっ……悔しいが、タケシの言うとおり、俺はイシツブテの先、イワークしか見ていなかった。その結果がこれ。俺もまだまだ新米トレーナーってことか。

イシツブテによってダメージを受け、素早さも下がり、おそらくはイワークに先手を取られ、今度こそサイホーンが耐えられない一撃を受けるだろう。

「……っ」

しかし、俺はあえて、ここで何も言わなかった。

『サイホーン。……今のお前が負けることはないかもしれないが、万が一ということもある』

『万が一の時っていうのは？』

『地ならしとか、素早さを下げられたらまずい。そういうときは、あの技を使い』

『分かった！』

こういう時、やるべきことはサイホーンに教えた。それを、実行するかどうか。

あいつも、それを分かってる。顔を見れば分かる。あの顔は、どうすればいいか迷ってるんじゃないくて、あれを実行するかどうかで悩んでいる顔だ。

何故、そんなことをしたか？ 何故、サイホーンが実行するのをためらっているか？

『……ジムリーダーに負けたら、またここで修行するかもな』

俺が、そう言ったからだ。

だが、実際は違う。

俺は、ここでサイホーンが迷ってイシツブテに倒されたりしたら……俺は、ここにサイホーンを置いて行く。

そんな言葉に惑わされるようなら、この先々で旅なんてできないからな。

「シ、シグッ……」

助けを求められるが、俺は何も言わない。彼女自身が決めることだから。

「おいおい、思考停止か？」

タケシの挑発にも乗らない。

俺は、サイホーンを信じてるからな。

『……ジムリーダーに負けたら、またここで修行するかな』

シグは、そう言った。

ここで負ければ、またみんなに会えるのかな。

でも、この修行はそもそもこの人たちに勝つためにやったことだし……。でも、皆には、会いたいし。

シグの考えてることは分かる。

それは、この前修行してた時。

『うりゃあ、喰らえ二度蹴り!』

『むぎゃっ!』

ある程度レベルが上がったニドランに、二度蹴りをされた時だ。危ないと思った。

『よっしゃどうよ! 初ダウン? サイホーン初KO!?』

『うつく……そんなにうまく、いくもんかつ!』

『おい、大丈夫かサイホーン!? ……って、ええっ!?』

シグは私のこと心配してくれた。でも、その時に、すごい技を覚えてんだ。

シグは、その技をすごく便利な技だと説明してくれた。万が一の時の為に、ジム戦で使えるように特訓しておこうとも言ってて、しばらくその技の練習をしたっけ。

シグは、今その技を使えって言ってるんだ。
でも、この技を使ったら、多分勝つ。
でも勝てばみんなには会えない。

私……どうすれば――

『おう、負けんなよ！』 『頑張って来てねー！』 『応援してるよー！』

あつ、

なんだ、

簡単なことじゃないか！

そのみんなが、応援してくれたんだもん！ 修行に付き合ってくれたんだもん！

勝たなきゃ、会えたとしてもみんなに合わせる顔がないよ！

勝つんだ！ 負けるなら、それは私の力を全部出し切った時しかない！

「う……ううっ……」

「ん？ どうした、君のサイホーン、様子が変だぞ」
「……いや」

様子がおかしいなんてこと、一片も無い。

「こいつは、俺が信じてる最っ高のサイホーンだよ」

「ううううううおおおおあああああつ!!!!」

覚悟の咆哮が、びりびりと腹に響く。

サイホーンの足や肩、腕や胸をまとう岩がみるみる内に削れていく。

「な、なんだこれは!？」

「んー、見てのとおりだよ。岩のジムリーダーであるタケシさんなら知ってるだろう？」

「……まさか、ロックカット!？」

「そのとおり」

ロックカット。岩を可能な限り削り、素早さを二段階アップさせる技。

ゲーム内でのロックカットのイメージならば、そこまで大げさな技では無いと思うだろう。しかし、この世界でのロックカットは、サイホーンにとって強烈なアドバンテージを得られる。

「し、しかし、ロックカットしたからなんだ。素早さが上がったって、今更どうしようもないぞ!」

「そうじゃねえんだなー」

「な、なんだか分からないけど、もう一回かかってきなよ! また耐えて、今度こそとどめさしてやる!」

サイホーンの咆哮に気圧されながらも、イシツブテは声を上げた。

まあ、気圧された時点で……負けてるんだけどね。

——びゅんっ、と風の通る音が聞こえたかと思うと、

その瞬間、イシツブテがサイホーンと共に消えた。

「げっほお……っ!？」

そして、思いつきり場外、壁の中心辺りに激突していた。むしろ、よく壊れなかったなああの壁。

戦闘不能なのは言うまでも無い。

「い、イシツブテエ!？ お、おいなんだあの技は!？」

「何って、ただの突進じゃないですか」

「あれが突進って……そんな威力じゃないだろ！」

……あの時は、ニドラン死んだんじゃないかってくらい凄い威力だった。あの突進は、ノーマル技にもなるし、岩技にもなるし、格闘技にもなる。

突進。

サイホーンという、突進に向いた種族。
石頭という特性。

そこに、ロックカットが加わることで、ゲームではありえない、凄まじい威力が生まれる。

「くそっ……戻れ、イシツブテ。そして、出て来いイワーク！」

「……今の試合見てただけでめっちゃくちゃ心配なんですけど」

「やれるだけやってくれ、頼んだイワーク」

「はい、はい」

イワークは、どっかでみたな。髪をどういう原理か岩で括ってて、全体的にごつごつしてる。

「サイホーンッ、最後のポケモンだ！ 油断せず頑張れ！」

「分かった！」

「イワーク！ 岩石落として、なんとかしてスピードを下げる！もちろん、避けるのが最優先だ！」

「了解！」

そこからは、多分実際の時間だと30秒も無かっただろう。だが、それは体感して見ると実に長い時間のように感じた。

サイホーンのこの突進攻撃。威力は今のこいつにしたらあり得ないくらいの破壊力なんだが、直線運動だからいかんせん読まれやすいのが弱点。気をつければ、割と当たらない。だが、あの速さで岩石落としが当たるはずもなく、しばらくは避け合いが続いた。

「イワーク、頑張れ！ なんとか当てろ！」

「む、無茶言うなあまったくっ……！」

「――サイホーン、岩石落としをよけようとするな！ 岩石落としじゃ決定的なダメージは与えられないから、恐れることない！」

「頑張るっ！」

イワークを守ろうと、サイホーンを潰そうと十、二十の岩石落としが展開される。

だが、それを敢えて無視し――イワークへ、必殺の一撃を当てることにのみ集中させ、

「そこだあっ！」

「しまっ……！」

サイホーンの一撃が、ついにイワークにヒットした。

「戻れ、イワーク」

赤い光に包まれ、イワークがモンスターボールの中に戻っていく。

「……参ったな。まさか同じ岩ポケモンとの戦いで負けるなんて」

タケシは細目なので表情の変化が分かりにくいけど、まあ多分悔しいのだろう。

「そのサイホーン、一体何年間育ててきたんだ？　そして、君は何年間ポケモントレーナーをやっている？」

「へ？　いや、出会ってたった十三日ですけど。それにこいつが俺の初ポケモンです」

タケシが驚く。シロナさんといい、よく分かんないな……俺がそんなベテランに見えるか？

「でも、君の顔は……なんというか、幼いながらベテラントレーナーのような顔をしている」

……どういう顔？

まあ、ゲームでのポケモン歴は十年超えてますからね。この世界だったら世界一のブリーダーになれる自信があるよ。

「それは、君がすごいのか、君のサイホーンがすごいのか……」

「どっちもすごいんだよ！」

サイホーンが割って入って来る。

「あー、まあ、そんな感じですね。ほらサイホーン、疲れたろ？
ボールの中に入ってな」

「やだ！ シグと一緒にいる！」

「ははは、随分懐かれてるね」

「あ、あはは……」

よく恥ずかしげもなくそんなことと言えるよこの子は……まあ、子供だし仕方ないか。

「おっと、話し過ぎたようだ。ジムリーダーとしての仕事をしなきゃね」

お、待ってました。

ジムリーダーとしての仕事、つまりバッジ授与だろう。

「これが、グレーバッジだ。受け取ってくれ」

バッジを受け取る。ちなみに、この世界ではバッジに特別な力があるわけではないそうです。アニメと同じだね。

まずは、一つか。

次の相手は、恐らくハナダジムリーダーのカスミだろう。となると、さすがのサイホーンでもあのデススターに勝てるかは分からない。いや、それ以前に、ジムのトレーナーに勝てるかどうかも怪しい。……次のジム戦までに、新しいポケモンが仲間に出るといいけど。

まあとりあえずは、

「おめでとうサイホーン！
さすがだな！」

「えへへ、ありがとう！」

サイホーンとお祝いな！

ニビジムリーダー。(後書き)

せいかくは、長い間一緒にいないとそりや分かりませんよね。
それにしても、ゲームのタケシって何か嫌なキャラしてますよね。

お風呂。

「あのね、シグ」

ポケセンで休んでいると、サイホーンが話しかけてきた。なにやらとてもむずむずしている。ちなみに、俺は新聞を見てこの世界について勉強中です。あ、『ニビタイムズ』にはジムリーダーに勝った人が載るんだな。じゃあ明日は俺も新聞に載るのかな？ 『ポケモン新聞』……3番道路に危険なポケモンが逃げこんだ、ねえ。伝説のポケモンか何かか？ いや、

——もしかして、あのウインディか？

何か思いつめた様子だったけど……あの賢そうなウインディが、『危険なポケモン』と呼ばれるような騒ぎを起こすとも思えない。違うよな、うん。違うと、信じたい。

でもどちらにしろ、こころないトレーナーがポケモンを捨てたという可能性が高いな。三番道路って、ちょうどニビシティを出たらすぐじゃないか。出る時は、充分注意しないとな……。

「ねえ、ちよつとシグ聞してる!？」

「ん、あ、ああすまん。新聞見た。んで、何だ？」

「ちよつとお願いがあるの」

「ふーん。言ってみ？」

そう言うのと、サイホーンは思いっきり息を吸って――

「お風呂入りたいっ!!」

「おおそうか、俺も入りたい!」

「じゃあ入ろう!」

「だが断るっ!」

「えええええっ!？」

「シグさん、もうちよつと静かにお願いします」

「はいしません」

……俺も、実はずっと考えてたことなんだよ。

この十三日間、一切お風呂入らず。体がかゆいし、髪なんて言わずもがなぼろぼろだ。このままじゃ衛生面とか精神面とかいろんな意味でやばい。

金銭面では何の問題も無い。ジムリーダーを倒すと、ゲームと違って副賞が貰えるとのことで、副賞の500000円を貰った。500000円なんて持ったことないぜうえへ。

ま、まあこの街は銭湯もあるんだが……いかんせん、『サイホーンと別々に入る』というのが心配でならない。こいつとはたった十三

日間のつきあいで、人間社会の常識はあまりない。だから、あんまりそういう公共の場にいきなり放りだすなんてこと、できないんだが……。

「ねえ、シグだつて入りたいでしょ？」

できないんだが……。

「ねえー、きちんと大人しくしてるから！　ね、ね！」

できないんだが……。

「もう十三日間も入ってないんだよ？　この先進んだらまたいつになるか分かんないし……」
何事もチャレンジだよな……。

そんなわけで、今はポケセンを出て銭湯へ向かっている。

「そういえば、サイホーンは野生だった時もお風呂に入っていたのか？」

「そうだよー。人間さんがたまにドラム缶を捨てたりしてたからね、いつの間にかお風呂スペースができちゃって」

「ドラム缶風呂かよ！？」

「うん。基本早い者勝ちでね、ドラム缶を見つけたら持って帰って、使う時だけお風呂スペースで使うの。お母さんは強かったから、すぐごく早い内からドラム缶を手に入れたんだよ！」

「結局のところドラム缶風呂じゃねえか」

ひょっとして、あの誰かが住んでいたような整ったスペース、あれがお風呂スペースだったのか？　そういえば、ミステリーサークルみたいなのがあちこちにあったけど……あれドラム缶？

「ドラム缶風呂しか入ってないんじゃ、銭湯なんて天国に感じるかもな」

「へえー、そんなにすごいのか？」

「おう、すごいぞー」

ドラム缶風呂よりはな。

数分くらい歩いて、銭湯についた。この銭湯、別にぼろくもないが、立派でもない。だが広さは充分なので、サイホーンにとっては充分すぎるお風呂だろう。俺はもう何でもいいからお湯の中に入りたい。銭湯には、まあ当たり前だが『男』、『女』のれんが垂れている。

「なあ、サイホーン」

「なに？」

「一応聞くけどさ、お前、女だよな？」

「……シグには、私が男に見えるのか？」

「いや見えない」

いやー、ここまで一緒にいて、「実は男の娘でした」なんて展開、あるかなーなんて……ないか。

俺が気にしているのは……やっぱりサイホーンが面倒事起こさないかどうかだ。どうにかして、サイホーンを監視できないものか……。

「もう、時々シグって変だよ。じゃあ、私先に入るよ。こっちの『女』って書いてある方に入ればいいんでしょ？ シグとは一旦別れちゃうけど、大丈夫だよ！」

大丈夫じゃないから心配なんだよ。

「サイホーン」

「何？」

「俺実は女なんだ」

「……嘘でしょ」

「ああ嘘だ」

駄目だった。いやまあ、信じてもらえたところでどうだって話だけど。

「サイホーン」

「今度は何？」

「多分タオルまけば、男の娘ってことで許されると思うんだ」

「シグ、私の胸を馬鹿にしないで」

「すいません」

馬鹿にするな、ねえ……胸があるようには見えないけど

「シグッ!!」

「すいません!」

つい謝ってしまった……。だって、一瞬だけすごいドスのきいた声になったんだもん……これが、母の面影なのか？

……結局、別れることになった。心配でならん。
まあ、信じてみるか、うん。

なんていって、銭湯の中に入った瞬間壁に耳を当てて女風呂の様子をチェック。

「……」「……」「……」「……」

ものすごい量の白い目が突き刺さるが、人命優先だ。

……何も起きないな。おかしい。いや、起きない方がいいんだけどね。

ま、まあ、普通にお風呂を楽しむか。おっと、まずはシャワーを浴びてから、と。

いやあー、シャワーのお湯だけでも身にしみる……さて、お風呂入るか。

ちなみに、お風呂に入ってるからって『いやーん○び太さんのエッチ！』みたいな展開があるわけじゃないのであしからず。

こんな白い目線の中で、更にそんな変態行為できたら勇者です。

「んーっ、すっきりした！ シグはどうだった？」

「……まあ、体はすっきりした」

ちくしょう、普通にお風呂満喫してんじゃねえか。

「……暴れたりしなかったのか？」

「だからー、心配いらないうって言ったでしょ？ 昔ね、お母さんに『お風呂の中で騒いじゃいけないよ』って教えてもらったの！ だから大人しく入ってたよ！」

そりゃ、ドラム缶風呂の中で騒いだらドラム缶倒れるからな！

……まあ、そのおかげで騒ぎがおこらなかったんだから、お母さんに感謝だな。

「まあ、それだったらこれから行く先々でも大丈夫だな」

「うん！」

ハナダシティ……完全な想像だけど、プール施設があると思うんだ。あ、ちなみに現実世界とポケモン世界の季節は同じらしく、今の季節は夏。プールもこの調子なら大丈夫かな？ あ、でも水ポケモンがいたら駄目かな……。

ちなみに、この世界での基準、普通の水とポケモンの水技について。

ポケモンが繰り出す技は、普通の水とは違うらしい。例えばうちのサイホーンは、お風呂もプールも平気だけど、ポケモンのなみのりはもちろん、みずでっぼうも駄目。このところは俺はもちろん、科学的にもよくわかってないらしい。

ふむ、ハナダシティか……。ジム挑戦までに、もう一匹くらい捕まえておきたいな。

「じゃあ、明日は目指せハナダシティ、だな！」
「そうだね！」

とりあえず今日は、最後のニビシティポケセンを噛みしめながら寝るかな、なんて！

……『危険なポケモン』の記事。

それだけが、気がかりだった。

お風呂。(後書き)

読者サービスなんて初心な私には書けませんでした。

危険なポケモン。

俺達は今、お月見山前のポケセンにいる。

しかし地震はさすがに強いな。道中のポケモンを軽く捻って来てやりましたよ。ポップやオニスズメはストーンエッジで倒せるしね。まあ、やったのはサイホーンだけだよ。

……しかし、だ。一応、モンスターボールを買ってきたんだけど、どうもポケモンを捕まえる気にならない。人の姿だからさ、どうもボールを投げつけるのを躊躇って。

それにしても気になるのが、

しばらく新聞の記事に載っている『危険なポケモン』のことと、

それと、『ロケット団』。

この記事に載ってるのはハナダシティの民家が荒らされたことについてだけだが、お月見山にもロケット団はいたはず。ゲームじゃないんだ、捕まったらどんなことされるか分からない。殺されるかもしれない。

……はつきりいって、こっちの方がよっぽど怖い。

この世界に、都合よくレッド君はいないらしいしな……。俺がロケット団とぶち当たるのかもしれない。

「ねえシグ。難しい顔して何見てるの？」

「ん？ あー、特に何も」

そう、何にしてもこいつを守ってやらなきゃな。ポケモン一人救えない奴が、ポケモントレーナーなんて言ってるかっつての。

「さてと、サイホーン。そろそろ――」

「うわあああああっ!？」

「何だ!？」

お月見山に行こうと思ったのだが……外から男の人の声が聞こえた。

「だ、大丈夫ですか？」

「う、腕がっ!」

男性が腕を押さえて苦しんでいる。

……といっても、そんなに大したことは無い。猫に引っかかれたような傷だ。まあ、あれくらいならポケセンも近いし、大丈夫だろう。まったく情けないな、あんな傷で。……じゃないか。一体誰に？

「新聞に載ってた、『危険なポケモン』が……」

「危険な、ポケモン……気になってたんですけど、その危険なポケモンというのは一体どんなポケモンなんですか？」

「そんなの知らないよ! 見たこと無いんだ、あんなポケモン!」

見たこと無い……カントー地方のポケモンじゃないってことか。

「ほ、ほらあそこだ！」

「え、どこ！？」

男の人が指をさす。……いた。そのポケモンは、数人の男に囲まれていた。

「き、危険なポケモンがいたから、殺そうとして……そしたら引つかかれたんだ！」

「……切り裂かれなかっただけ、よかったでしょ？　ほら早くポケセンに行ったらどうですか」

「あ、ああ……。くそ、畜生が」

とりあえず、情けない男を退場させてポケモンのいる方へ向かう。『殺す』というのは穏やかじゃない。助けられるなら、助けないと。

もう、あのポケモンが何なのか、俺には分かったんだよ。

「シグー、あのポケモン、悪いポケモンなの？」

「さあな。それをこれから確かめに行くんだ。サイホーンはそこにいな」

「……………」

「くそ、よくも人間様を引っかいてくれたな！」

「……………」

「こっちには、銃があるんだぞ！　銃がなんなのかくらい分かるだろ！　大人しく捕まれ！」

「……………いやだ」

「チッ、だったら撃ってやるよ！」

「はい、そこまでにしときな」
銃を持った男の腕を掴む。

囲んでいるのは、3，4人の男たち。その全員が銃を持っていた。
この世界に銃刀法違反はないのな。まあポケモンが危険なのは否定
できないし、しょうがないか。

……怖くなかった？ 怖いに決まってるだろ銃なんて物騒なもん
持ってる奴ら。
だけど、怖がってちゃポケモン助けられないしな。

「誰だ、お前!？」

「誰だと聞かれてもな。ポケモントレーナーだよ」

「今からな、危険なポケモンの処分をするんだ！ 邪魔すんじゃない
えよ！」

「そうはいかないな。トレーナーはポケモンを守るもんだ」

「ああ？ そりゃ逆だろ！ ポケモンがトレーナーを守るんだ！
だから、人に危害を加えるこのポケモンを、今から射殺してやるん
だよ！」

「お前の価値観なんて知ったこっちゃない。……あの男の傷、ちゃ
んと見たか？」

「見たから、今こうやって射殺しようとしてるんだろ！」

「そうじゃねえだろ。あの男の傷、本当に浅かった。飼い猫とじゃ
れあってる内にできたような傷だ。あの男が大げさに騒ぎたててい
ただけだ」

「……おいおい、力が弱けりゃ、問題ないとも思ってたのか？」
「お前、頭悪いな」

「ああ!？」

あまりの小物臭に、敬語を使う気すら失せた。最初から使っていない？
気にするな。

「あの子、ちゃんと人が傷つかないように手加減してるんだよ」

「……なんだと？」

そのポケモンは、自分が殺されそうになりながらも、自分は人が傷つかないように手加減してたんだ。たいしたポケモンだと思う。

「お前らが勝手に騒ぎたてるから……すっかり怯えてる。おおかたあいつがいきなり近づいたから、びっくりしてすこし引っかいてしまった、って感じだろ」

「……しかしだな」

「お前らの、『危険なポケモンだから処分する』なんていう大義名分、もう使えねえよ」

まだ大上際の悪い言い訳を続けようとするが、バツサリ切り捨てる。こいつら、多分このポケモンを撃ちたいだけだ。最初に銃を構えてた時、顔が笑ってたしな。

「だって、こいつは危険なんかじゃない。すっごく優しい子だよ。なあ、アブソル」

彼女に近づきながら、そつと言った。白い髪、黒い角と尻尾。アブソルしかない。

最初は構えていたアブソルも、名前を言うとしこし構えを緩めた。怖かったんだろう、人間が。わざわざポケモンとして、何度も理不尽な目に遭ってきたんだろう。

「もう、安心だ。俺がお前の誤解を解いたからな」

「……あん、しん」

ようやく、少ししゃべってくれた。アブソルの警戒も、徐々に解けていくのがいくのが分かる。

なんてことはない、優しい普通のポケモンだ。誰が、こんな優しいポケモンを危険なんて言ったんだよ。

アブソルとの距離が縮まってく。アブソルは、サイホーンより少し背が高いくらいだった。自然と、俺はアブソルの頭を撫でようと近づいた。そのとき。

パン。

「——ッ!!」

「アブソルっ!?!」

何か、乾いた音が聞こえた。

アブソルが、苦痛に顔をゆがめる。赤い水が、血が、彼女の腕から流れ出した。ちょうど、あの男が引つかかれた箇所——

「まさかっ……!!」

「へっ……俺を引っかいた仕返しだ、屑め」

「テツメェッ……!!」

やっぱり、あのビビリも銃を持ってたんだ! あのだ乾いた音は発砲音か!

「どんな御託を並べようがなあ! 人間様に害を及ぼすのは悪なんだ——」

「はい、どーんっ!!」

「――はっ？」

台詞の途中で、ビビリが吹っ飛んだ。
いいきみだ。

「ナイス、サイホーン！」

「えっへへ、大丈夫！ 手加減はできるようになったから！」
手加減なしでやっても良かった気がするけどな。

「畜生、何しやがる！」

パン、パン、と続けざまに、鉛の玉がサイホーンへ向かって飛んでいく。

一瞬ヤバいと思ったが――サイホーンは、まったくの無傷。むしろ、余裕の表情だ。

「あはは、何やってるの？ バカだなあ」

「な、なっ……！？」

「私は、『岩』ポケモンだよ？ 本格的な猟銃ならともかく、そんな拳銃で私を狙うなんて……なめてるとしか思えないね」

……銃で撃たれても無傷とか、ポケモンってすごいな。

なんか、サイホーンがすごく賢く見えるぞ。猟銃と拳銃って、そんなに違うもんなんだ。……って、俺が馬鹿なのか？

やっぱり野生ってのは、いろいろ狙われたりするんだろうかな。

「シグ、こいつら完全に素人。持ってる銃も狩猟用かと思ったら、ただの護身用で売っているような普通の拳銃。狩猟自体には慣れてないみたいだし、これなら大丈夫だよ。早くその子をポケモンセンターまで連れてってあげて」

「お、おう！ ……アブソル、ボールの中に入れてくれるか」

ポケモンセンターに行ったとしても、ボールの中に入れてなければ深刻な傷までは治せないんだ。だけど、ここまで怯えているアブソルを説得できるかどうか……。

「……………うん」

「よし、じゃあ中に入れてくれ」

だけど、アブソルは素直に受け入れてくれた。

モンスターボールを投げる、というか、アブソルにそっと当てる。

お馴染みのピコーンという音と共に、アブソルは無事にボールの中に入った。

「に、逃がすか！」

「それは——」

サイホーンが、身を低くかがめる。

……あ、やばい、この子。

殺る気だ。

「こっちのセリフでしようがっ!!」

「げえっ!？」

さっきの突進と比べてかなり強力な突進が、再びビビリの腹にクリンヒット。今度こそ、持っていた拳銃がビビリの手から落ちる。

「さ、早く行って! こいつらの相手は私に任せてさ!」

俺のサイホンがこんなにかっこいいわけがない。

なんて言ってる場合では無く、急いでポケセンへ直行。

「すみません! こいつの治療お願いできますか!」

「あ、はい! さっきの発砲音と何か関係が?」

「そういうことです! できれば警察呼んで頂けるとありがたいです!」

「それはもう、発砲音が聞こえたので、とっくのとうに呼びました」
「ありがたいな、さすがジョーイさんはどこのジョーイさんも頼りになる。」

「……ほら、もう来たようですよ」

——お前たちそこで何してるんだ！
外からそんな声が聞こえてきた。

「しかし、災難でしたね」

無事、警察はあいづらをお縄につかせたそうで。

「まあ、誰も死ななくて良かったです」

「あはは、まったくだね！」

「言っとくけど、お前が半殺しにしてたあいづらのことも言ってるだぞ」

「あ、あはは……」

あの男たち、タチの悪い狩猟グループだったらしい。全員、許可なし、免許なしで勝手にポケモンを殺すものだから、問題になっていたとか。

まあ、俺は様子を見てなかったんだが、本当にサイホン無双だったとか。警察が来た時には、全員ボコボコで拳銃も全部取り上げら

れていたらしい。

「一時期問題になっていた『危険なポケモン』も解決できたそうで、本当によかったです」

「おっとそうだ。アブソル、でてこい」

「……」

うーん、無口なのは、元からだっただな。今は全く警戒してないし、怯えてもいないからいいけどね。

「ふむ、確かに、騒ぎになっていたあのポケモンと同じだが、本当に大人しくなっているな。君ということで落ちついているようだ」

「はぁ……」

警察官にじっと見られると、アブソルは無言でキュッと俺の服を掴んできた。うーん、ポケモンに懷かれやすいってのは、意外と間違いない、のか……？

「まあこちらとしても、できるだけ野生のポケモンを傷つけない。君がそのポケモンを捕まえてくれて、本当によかったよ」

「はは、まあ無我夢中だったもので……。でも、捕まえたからには責任を持ってこいつを育てますよ！　ってなわけで、よろしくなアブソル！」

「……………」

「あ、あは、あはは……」

やっぱり、懷かれてるわけじゃないかあ……。

「……………よろしく」

どこか明後日の向こうを向きながら、アブソルが呟いた。
可愛いな、こいつめー！

「……………むー」

ついつい抱きしめてしまう。とくに拒絶されてる様子もなく、アブソルは抱きしめられ続けている。

ただ、

「……………私でも、シグから抱きしめてもらったことなんてないのに」

何て言ってるかいまいち聞こえないけど、サイホーンがすごく面白くない顔をしてるのは……………なんでだろう……………。

危険なポケモン。(後書き)

アブソルって伝説のポケモンみたいな雰囲気出してますよね。
でもかつこよさだけでなく可愛さも備えてますよね。
そんなアブソルが大好きです時雨豊です。

アブソル。

「……うー」

「み、みんな……いや、なんか、本当ゴメン」

「……………心折れそうだよー」

ニドラン♂とポツポの言葉に耳が痛くなる。

今、俺はサイホーンと同じくアブソルの努力値を振りに、再びニビシティ前の草むらに来た。

条件はサイホーンの時と同じだ。相手にするのはニドラン♂とポツポのみ、両方とも、倒せるギリギリの力で倒す。しかし使う技は自由だ。

しかし、なにしろアブソルは無言で延々とバツバツ倒していくし……それに

「ってかさ、何で一回も攻撃できないワケ!？」

「なーんか納得いかない! 攻撃できないんじゃ勝てる訳ないじゃん!」

「だ、だからさ、そういう技なんだって……」

「……………不意打ち」

問題が、このアブソルの「ふいうち」。何しろ威力が高い上に、攻撃技を当てようとした瞬間に発動する先制技だから、一切の攻撃を許さない。

サイホーンの時、まだ攻撃を仕掛けられたし、サイホーンも何度か倒れそうになった。しかし、アブソルは先制技があるので今までで攻撃されたことすらない。

「じゃ、じゃあアブソル。次は不意打ち以外の技を使ってみて。何でもいいから」

「……分かった」

「よし、じゃあ行くぞー！」

そうして、今日のノルマ『50匹』を倒すことができた。50匹も倒したもんだから、もうすでに辺りは暗い。本当は20匹ずつにしようと思ったのだが……ニドラン達から言われたんだ。

『俺達は全員でだいたい50匹ずついるし、一気にかかってこいよ！』

……まあ、アブソルの相手を何日もするのは辛かったんだろう。一日50匹ずつなら三日だ。

初日の結果。

アブソルの覚えている技は、『ふいうち』『サイコカッター』『かまいたち』『しっぺ返し』『追い打ち』『ちょうはつ』。
いまのところ分かったのはこれくらいだ。さすがに豊富なレパートリー。

……特に、挑発した時はびっくりした。

『ああつ、もう！ 少しくらい攻撃させろっての！』

ニドランが、アブソルをにらみつけたときだ。

『……………ぷっ』

『な、なななっ！？ わ、笑うなコノヤローっ！！』

その後見事に不意打ちでKOされたのは言うまでも無い。

「それにしても、いつもごめんな、ニドラン♂も、ポップも」

「いいよいいよ。シグみたいにわざわざきすぐすりをくれるお人よしも中々いないからね。最後までつきあったげるよ」

良い奴だなあ…………。

「……………疲れた」

「お、アブソルもお疲れ様。あと二日、頑張ってな」

「……………うん」

「ニードーランッ！」

「おお？ 何だ俺の名前を呼ぶ奴は——」

「っどーん！」

「ウボアーッ！！？」

サイホーンの声と共に、ニドラン♂は吹き飛んだ。

ニドラン♂（ゆうかん）よ……お前はホントに不運な奴だな……。

「ごほっ……おまつ、突進の威力、また、上がったな……」

「えへへー、そう？ そうかな？」

「サイホーン。お前が笑ってる間にニドランは死にそうだぞ」

サイホーンも、久々（といっても実は二、三日しかたっていない）の再会を喜んでいる。

「それより、お前ジムリーダーに勝ったんだってな！ すごいじゃん！」

「でしょ？ これもみんなのおかげだよー！」

「……ジムリーダー」

「ん？ アブソルはジムリーダー知ってるのか？」

「私、ハナダのジムリーダーに捕まりそうになった」

っ！

ハナダのジムリーダー……カスミか。

「だから、山のこっち側まで逃げてきた」

「そう、なのか」

……アブソル。そういえば気になっていた。何故アブソルがこんなところにいたのか。

「なあ、教えてくれないか？　なんでアブソルがこんなところに来たのか」

「……うん」

——山のぬしさまがトレーナーに捕まったの。

ぬしさまのお世継ぎもまだいなかったから、当然山のポケモンたちはバラバラになった。

まとめる人がいなくなったから、山の「ちあん」が悪くなった。

ぬしさまの側近だったお母さんも、立場を追われて、

さらに、みんなの怒りの矛先は、私たちアブソル族に向けられた。

アブソルが災いを呼んだんだって。みんなみんな、アブソルのせいだって。

みんながみんな、アブソルのせいにして、私たちは山を追い出された。

私たちには行くばしよがなかった。だって、私たちはわざわいポケモン。

にんげんは、私たちを見るとすごくこわくなる。災いをよぶと思い込んでるから。

だから、にんげんが知らないばしよを探そうとがんばった。

だけど、同じアブソルが、にんげんに捕まって危ない目にあってたから。

わたしは、にんげんたちをやっつけて、アブソルを助けた。

そのせいで、きづけばアブソルは危険なポケモンになったた。

みんなが私をさがした。

みんなが私たちをころした。

みんな、私のせいだ。

わたしは、とんでもないことをしちゃったの。

でも、しにたくなかった。だから逃げた。

ジムリーダーが、私を捕まえようと追いかけてきたから、

ころされちゃうと思って、おつきみやまにかくれた。

でも私は『危険なポケモン』になってたから。にんげんがたくさんいる、山のなかにはいられなかった。

だから、外からこっちがわへ逃げた。

そしたら、銃をもったにんげんがこっちに来て――

「あとは、シグも知っているとおり。私のこと、シグが助けてくれた」

「なるほど……」

ポケモン社会も、難しいんだな。気楽なもんじゃないんだ。

「ありがとな、アブソル。話してくれて」

「んーん。……シグは、命のおんじん。これくらい、あたりまえ」

命の恩人、か。

その言葉は、今後も重くのしかかってくるんだろうか。

命を救ったことを、「気にするな」なんて、言えないよな。

「……そっか。これからもよろしくな、アブソル」

「ん」

頭を撫でると、少し安心するみたいだ。顔が少しだけ綻ぶ。……アブソルの母親も、こんな風に彼女の頭を撫でてたのかな。

「……少し、話しすぎてつかれた。……むね、借りていい？」

「おお、大歓迎だ。少し眠ってな」

トン、と、胸の横にアブソルの頭が当たる。

周りの喧騒がまだ続く中――彼女の頭に手を置きながら、俺自身も眠くなってきて。

結局、二人寄り添う形で寝ることになった。

アフソル。(後書き)

『危険』というのは、結局人間のエゴなんではないか。
それにしても、シグくんがどんどん一人歩きしてしまいます。

ロケット団。前編（前書き）

長くなったので前編後編に分けました、

ロケット団。前編

「よし……みんな準備はいいか？」

「ばんたん！」

「……うん」

「じゃあレッツゴーお月見山！」

俺達はアブソルの努力値を振り終え、再びお月見山に来ていた。

「さて、と……お月見山に入るのは初めてだな」

「そうだねえ。山の中だから、やっぱりポケモンもたくさんかな？」

「だろうな。まあ、気をつけてな」

お月見山の中……まあ、分かってたけど、ゲームと違って暗い。

「これじゃ、ちょっと厳しいな……」

「……私、フラッシュ使えるよ」

「お、本当か？ 助かるよ」

アブソルが手をかざすと、辺りが明るくなる。

……まあ、ゲームと違って、ポケモンとか集まってくるかもだけど。

「あ、ちょっとその君!」

そしてトレーナーも集まって来るわけだな。

「よし、勝負だ!」

これまでで、数人のトレーナーに出くわした。

サイホーンの強さは健在だ。アブソルもそれなりに強いが、やっぱりサイホーンの方が一枚上手。

まあ、出会って数日のアブソルに負けたら、サイホーンの立つ瀬がなくなるってな。

「みんな大丈夫か? どっか怪我したんなら遠慮なく言えよ」

「大丈夫だよー」 「だいじょうぶ」

「本当かよ?」

こいつら、怪我したって自分で気付かないもんなー……特に、サイホーン。

まあ、この辺のポケモンくらいこいつらだったら充分勝てるし、問題ないかな。

……この辺の、ポケモン？

待てよ？ この辺のポケモンって……よく考えたら、山に入ってから野生のポケモンに遭ったか？

『この辺のポケモンくらい』と思ったのは、あくまでゲーム内の話、だよな？

実際のところ、野生のポケモンなんか見てない。……どうしてだ？

「なあ……アブソル。お前、この山の中にしばらくいたんだよね？」

「いちおう」

「……そのころ、野生のポケモンっていた？」

「たくさんいた。でも、にんげんがたくさん入ってきてから、いなくなっただけ」

「っ！！」

ロケット団……。それしか考えられない。やっぱ、いるんだ。この山に。そして、まだいる可能性が充分にある。

だって、入口付近でしかトレーナーを見かけていないんだ。つまり、ロケット団がまだ占拠してることだろう。……となると、ここらへんもロケット団の活動範囲ってことか？

「――！ ……！」

「……隠れて！ アブソルはフラッシュを消してくれ！」

人の声が聞こえる。大人の声だ。

ロケット団と決まったわけではないが、そのことを考えていたため、一応。

「……おかしいな。こっちに子供の声が聞こえたと思ったんだが」

「ほっとけほっとけ。ボスが言ってたろ？ 来るもの拒んで去る者追わず、ってな。ここはボスの言うとおりに仕事してようぜ」

「つってもよ、『野生のポケモンを見つけ次第捕まえろ』だぜ？

もうどこにも野生のポケモンなんていやしねえよ。ボスはボスで、一心不乱に月の石を探してるしさ」

「いいから黙って仕事だ。実験対象は多いに越したことないしな。」

ボスの言うことはよく分かんが、それで失敗したことは無いしな」
「それもそうだ」

無駄話をしてくれたおかげで、いろいろ分かったな。

やっぱりロケット団である可能性が非常に高い。そして、違ったとしても野生のポケモンが見当たらないのは奴らの仕業だ。

そして、奴らの言う『ボス』が、このお月見山にいるということ。

ボスってことは、サカキか？ おいおいマジかよ。お月見山にサカキが来るなんてイベントはないぞ？

ゲームの世界どおりに物事は進まないってことか……。

……これは、危険だ。

「戻ろう、二人共」

「えっ？ 何で？」

「今は危険だ。ほとぼりが冷めるまで、お月見山には入らないでおう」

「……危険って、どういうこと？」

「ロケット団がまだ中にいる可能性が高い。……あー、ロケット団

つてのは、要するに悪い奴らだ」

「悪い奴らが、まだ中にいるの？」

「そう。ポケモンに酷いことをする、いつも悪いことを考えている人間だ」

「そ、そーなの？ それなら、あいつらみたいに私が――」

「駄目。悪い奴はあんな素人ばっかじゃない。岩ポケモンの対処くらいできてる」

あくまで、推測だが。推測だからと、ロケット団に突っ込むのはいささか危険すぎる。

ポケモンの漫画では、主人公がロケット団に何度も殺されかけたしな。

「さ、戻るぞ。今来た道を引き返そう」

「うん、そうだね」

「……ポケモンは」

「え？」

「その、ひどいことされたポケモンはどうなっちゃうの？」
「——っ！」

アブソルが、ぽそりと言った一言。

いつものように、明後日の方向を向いたまま呟いた小さな一言にすぎない。

「……そんなの、決まってんだろ」

だが、その一言は、大きな力で俺を突き動かした。

「今から、俺に助けられるんだよ」

俺は何をびびってたんだ？

言ってたじゃないか、『野生のポケモンを見つけ次第捕まえる』って！

そして、悪用されるのは目に見えてるんだ。ポケモントレーナーとして見過ごすわけにはいかない！

「いくぞ、アブソル、サイホーン！」

Rocket団と思われる奴らが引き返した道を走る。

見つかるとかそういうことをまったく考えずに走る。
あえてフラッシュをつけないまま、とにかく走る。

——いた。

「お、おい！ やっぱ誰がいるぞ!？」

「まあ落ちつけよ。子供の声が聞こえるって言ったのはお前だろ。
子供だ、子供。ちよつと脅してやりゃあ逃げらつて」

「いっけえええええええつ!!」

「……は？」

「っどーん！」

「ぐべえつ!？」

「な、なんだなんだ!？」

「アブソル！」

「……えいや」

「ぐえつ!？」

「……さてアブソル、フラッシュつけてくれ」
「はい」

……状況がよく分からなかったけど。
多分、サイホーンは突進したんだろうな。それはもう分かる。
アブソルは……殴ったのか？ こいつの顔、めっちゃ腫れてるんだ
が。

さて、まあどうやって倒したかはいい。

こいつらの服には、でっかく『R』と書いてある。ロケット団で決定だ。

そして、こいつらが持ってた袋。中にモンスターボールが大量に入っている。

おそらく、これに入ってるのが野生ポケモンたちなんだろう。袋に入っているから、中から出て来れないんだ。

よし、

「でてきてくれ、みんな！」

袋を逆さにして、ボールを全部ドサドサ出す。

ポポポポポポポポポポポポポポポポポーン。ポポポポポポーン。ポポポポーン。

とにかく、イシツブテ、パラス、ズバット、大量にいた。全員で200匹程いた。乱獲にも程がある。

「あ、あれれ？」 「あれ？ ここはお月見山？」 「戻ってきたの？」
「ここどこ？」 「一時はどうなるかと思った！」 「怖いよー！」 「」

「どうやら戻ってきたみたいだ」「お月見山でいいの？　どこか他の山じゃないの？」「ここは間違いなくお月見山だね！」「ふう、どうやら一安心だ」「うわっ、ロケット団が倒れてる！」「わ、本当だ！」「ぼこっとく？」「いや、もうぼこられてるよ」「それにしても誰が助けてくれたんだろう？」「とにかくみんな無事みたいだね！」「他の奴らに捕まったポケモンたちが心配だな……」「あれ？　どうなったの？」「あーもうごちゃごちゃしてて分かり辛いよ！」「しよがないでしょ？」「まあロケット団の実験体になるよりよかったじゃない」「ピッピ達は？」「そういえば月の石も探してるって言ってたね」「眠い……」「月の石と深くかわってるピッピが心配だな」「月の石が取りつくされてないといいけど」「ちよっとズバット！　あんまり押さないでよ！」「だってえー」「こいつらはボスじゃないのかな？」「まだまだたくさんいそうだね」「じゃあ早めに逃げちゃおうよ！」「待って、混雑してて何がなんだか分かんない！」

「わあ……たくさんだね」

「……よかった」

「ああ、そうだな。よかった」

「みんな、みんなが入ってたボール、壊していいよな？」

「もちろん！」「粉々にしちゃって！」

これもこの世界のルールだが、持ち主のボールが壊れると、ポケモンは自由になり、再び野生に戻る。

……だが、これはロケット団にも利用されていることだ。持ち主のボールを破壊し、その人のポケモンを無理やり捕まえる、という使

い方もできるから。ここは、充分に注意しないと危険だ。ボールは相手に見せないようにしよう。

だから、袋に入っていたボールを全部踏みつぶした。そして、ポケモンたちはそれを合図に散り散りに逃げていった。

「……さて、次だな」

こいつらは二人で行動していたから、アブソルとサイホーンで何とかなった。けど、3人以上の場合、すぐには倒しきれないから危ない。

……どうするかな。さすがに、いきなりロケット団のボスとやらにぶち当たったら一旦引くしかない。

とりあえず、進むしかないか。

ロケット団。後編

「……こっから先は、走っちゃだめだ。慎重に行くぞ」

サイホーンが「えー」とか言ってたけど、聞こえなかったふりをしておく。こいつが暴走したら、きちんと止めてやらないとな。

サイホーンを見ながら、地下へのはしごを下っていく。

そしてはしごを下りきった時、変化は起きた。

「……アブソル、大丈夫？ 顔色、悪いよ」

「……サイホーンこそ」

「え？ ……本当だ。アブソル、サイホーンも。どうしたんだ？」

「アブソル、もしかして」

「サイホーンも、もしかして？」

「お、おいおい。なんなんだ？」

「とっても、嫌なかんじがする」

「そう、そんな感じ。なんか……吐きそうなくらい、嫌な感じ。なんかね……体験したことあるんだよ。そんな昔じゃない、1年か、2年前に」

「……私も、それくらい」

嫌な、感じ？

俺は感じないけどな。ポケモンだけが感じる何か？

「ボスが放つ邪悪なオーラを感じる……みたいなの？」

「シグ、冗談なんか言ってる場合じゃ……いや、あながち間違っ

ないかも」

「え？　つまりボスが近くに――」

「静かに」

アブソルの指が、口を押さえる。ちよつとドキつとした――なんて言ってる場合じゃないな。俺も聞こえる。

「……出雲様、そろそろ出ませんか？　いい加減怪しまれますよ」

「いいんだよ。月の石、今何個か覚えてるか？」

「えっと……5個ですね」

「だろ？　最低条件の六個すら取れてねえんだぞ。ほら黙って仕事しろ」

「は、はい」

「……出雲様？　サカキじゃないのか？　じゃあ、幹部か？　いや、

でも月の石を探しているのはボスって言うってたしな……」。

それに、フラッシュで辺りを照らしているポケモン。

あれは、ジバコイル……かなり強力なポケモンだ。そこらのトレーナーが持つてるとは思えない。

何か、この世界でイレギュラーが起きてるのか？　何にしろもう少し聞いてみる価値はありそうだ。

「……たくよお、やっぱゲームとは少しずつ出現確率も違うんだよなー。ピッピを捕まえたって連絡も入って来ないし？ 見かけたポケモンも個体値低いし？ ここで帰ったら何のためにこの山に入ってきたんだって話だよ。せめてどれか1Vくらいいてもいいんだがな。なあ？」

「は、はい？」

「あ、スマン。お前に話しても分からんよなー。はあ……」

「……出現確率？ ゲーム？ 個体値っ！？」

まさか、この出雲って奴……俺と同じ、ポケモン世界に紛れこんできた人間世界の人間？ しかも、こいつは俗に言う廃人じゃないか……？

というか、見かけたポケモンの個体値って……どうやって調べてんだ？ スペクタクルズでも持ってるのかあいつは。

「月の石さ、もしかしてこれ以上無いとか言わないかな？ ま、ピッピが見つからないなら5個でも足りるけど……。実際、ニドリーナとニドリーノの二匹分あれば一応問題ないし」

「じゃあ、これで帰るんですか？」

「バーカ、ぎりぎりまで粘れよ。あ、あの実験体のイーブイ出してくれ」

「あ、はい」

イーブイ……。実験体？ ということだ？

ポン、と音がして、イーブイが出てくる。

——傷だらけの状態で。

「……………」

よく見たら、手足も縄で縛られている。

……。酷い。自分でボールの出入りが出来ないようになってるんだ。

「よお、お前さあ。月の石で進化とかできない？」

「……出雲様、イーブイには、月の石で進化するというデータはありませんが」

「分かってるよ、んなこと。だが、イーブイはしんかポケモンだ。ゲームでも、この世界でも知られていない未知の可能性があるんじゃないかってさあ。ほら、懐き度が最低の時だけ進化できるー、とかさ。で、どうよ？」

「……………」

「まただんまりかよ。ったく、お前、本当にどういう状況か分かってる？ お前の代わりはまだいるんだよ。いいか、お前は『どの石で進化するか』を研究する係だ。炎の石、雷の石、水の石でイーブイが進化するのとは分かってる。だからお前は、『太陽の石』『月の石』『目覚め石』『光の石』『闇の石』『リーフの石』で進化しないかどうか調べる係だ。言うこと聞かないなら殺すよ？」

「……」

「ごめん、嘘。実際のところイーブイなんて数十匹しかいないんだよ。貴重な被検体なんだよ。だから大人しく言うこと聞いてくれなかな？ 石で進化するかどうかは、ポケモン自身の意思で決まる。サトシのピカチュウとかがいい例だ。だからさあ、お前が言うこと聞いてくれないと実験結果が分からないんだよ」

「……………」

「はあ……………」

ガスッ！！ と鈍い音がした。

あいつが、イーブイを、蹴り飛ばす音。

「~~~~っ！」

「そんなに我慢しててもさあ、別に拷問してるわけじゃねえんだぞ？ 泣き声出すことも出来ねえのか？ お前は俺を苛立たせる機械か？ ああ？ 月の石が見つからない、下っ端の役立たず共はピッピもろくに探し出せねえ。イライラしてんだよ。さらにお前が俺を無視するからさらにイラつくんだよ。無視されんのが一番イラつくんだよ」

「~~~~っ！」

何度も蹴られる音が響く。イーブイが必死に耐えて漏れた声が響く。洞窟に響く。

そして、俺にも響く。

サイホーン、アブソル、ごめん。

「ちょ、シグっ……!?!」

「はあ、なあ何でずっと黙ってるわけ？ 俺がお前を捕まえてからさあ、お前の声なんて、俺がお前を蹴った時の喘ぎ声でしか聞いたことないんだけど」

「……っ」

「なあ、死んでみる？ 一応数十匹はいるからさ、お前が死んでも別にそこまで困らないんだよ。なあ死んでみる？」

「出雲様っ!」

「あ？ 何だよ？」

「後ろ、後ろ!!」

「ああ？ 後ろがどうか——」

ガスッ。

全力で頬を殴った確かな感触が、腕から伝わってくる。

俺は、見てられなかった。イーブイが、無抵抗のポケモンが蹴られる姿を。

いつの間にか、足と手が出て。

そして、気付いたらこいつを殴っていた。

……しかし、件の出雲は微動だにしていなかった。

殴られながらも、何もしない。ただ、こちらを睨みつけてくる。

こいつは近くで見ると、そんなに歳は離れていない。20歳くらいだ。

しかし、今まで俺が見てきたどんな人間よりも、こいつは迫力があつた。

「……痛えな、ガキ」

殺気の対象が、イーブイから俺に移る。

怖い。

けど、怖がってちゃイーブイを守れない、よな。

「イーブイより、痛いかな？」

「あ？」

「お前がイーブイに与えた痛みより、痛いかって聞いてんだよ！」

「……ハッ」

ガシッ、と、俺の手が掴まれて、出雲の頬を離れる。不敵に笑ってやがるが、とんでもなく力が強い。……おいおい。

こいつ、本当に人間か？

「——そりゃ、イーブイじゃねえから分かんねえわ」
「そうかよ」

言いながら、出雲の腹にひざ蹴りを当てる。

「……っ!？」

が、やはり微動だにしない。

「なってねえなあ。ひざ蹴りってのは——」

ぐいっと、掴まれた腕を引っ張られる。

——ヤバッ、

ドスッ! と、鋭い一撃が腹に響く。

「げほっ……!」

「こういうのだろ?」

出雲が何か言ってるが、そんなの気にしている暇は無い。気持ち悪い。内臓がぐちゃぐちゃに潰されたかのような、受けたことのないひざ蹴り。

「っだあああああっ!!」

「ん？」

「ば……バカ、サイホーン！ 出てくんな！」

「あ、お前の手持ちか」

パシ、と音がする。

それは、サイホーンがぶつかった音なんかじゃない。

サイホーンの突進が、手で受け止められた音。

「サイホーンっ！」

「なっ、なっ……!!？」

「俺をそこらの人間と同じと思ってんのか？ お前のサイホーンは」

ギリギリ、とサイホーンの頭を握る音がする。

「……お前、本当に人間じゃないみたいだな」

「鍛えてんだよ、ポケモンにも負けないようにな」

出雲は、サイホーンの頭を掴んだまま、こちらへ寄せる。
そして彼女を舐めるように見ると、

「ふーん……H30, A31, B30, C17, D28, S31…
…2V2Uか、へえー、まあなかなか良個体じゃないか？」
「はっ…!？」

こいつ、一瞬で個体値を調べた？ どうやって？

「あ、分かんねえよな個体値なんて。スマンスマン」

「なん……で」

「？」

「なんで、個体値を、一瞬で見抜けたんだ……？」

その言葉で、出雲が目丸くして、サイホーンを落とした。

「サイホーンっ！ 大丈夫か!？」

「う、うん……ちょっとクラクラするけど、だいじょぶ……」

「……仲間」

「出雲様、どうしたんですか？」

「どうしたって、仲間だよ仲間！ 俺と同じ！ 人間世界の住人だ
っ！ 二人目だよ二人目！」

「……？」

「なあ、そうだろう？ 人間世界の住人なんだろう？ アハハッ、俺の仲間だ！」

「……黙れよ」

「そういうなよー、ひざ蹴りしたのは悪かったからさあ、な、俺と同じ、人間世界から迷い込んだ仲間だろう？」

「ポケモンを平気で傷つけるお前と、俺と一緒にすんじゃねえって言ってるだよ！」

「…………ハッ。本当だ、やっぱり仲間じゃねえな」

また、出雲は鼻で笑う。

「ポケモンのゲームやってんなら、ポケモンの都合なんて考えないもんなあ。だから俺はロケット団に入って、ザコのサカキをぶっ潰して、ロケット団の新たなボスになったんだ」

「この世界のポケモンは、生きてんだろがっ！！ ゲームに組み込まれたコンピュータじゃない、この世界でしっかりと生きてる生きものだろうが！ ゲームで厳選作業とかタブンネ狩りとかすんなとは言わねえよ、だけどな、ここはポケモンが生きてる世界だ！ それをゲーム感覚でやってんじゃねえよ！」

「ハッ、分かんねえなあ。ゲーム感覚でやるな？ 生きてるか、生きてないか、それだけの違いだろ。あ、まあついでに擬人化されてるけどさー。つかさあ、そういうお前もそのサイホーンの個体値、

厳選したんだろ？」

「はあっ！？ お前と一緒にすんな！ 偶然だよ偶然！」

「ふん、偶然、ね……」

俺は、こいつの考えとは一生相容れないだろう。
こんな奴と一緒にいたくない。

なら、早めに終わらせるべきだよな。

「アブソルっ！」

「……っ！」

「お、もう一匹いたのか。だが何匹来ようと、そこらへんのポケモンに負けは——」

「誰がお前を狙うって言った？」

「……え、こっち？ え、ちょっと待って無理無理助けて出雲さ——」

「——えいっ！」

「まっ」

アブソルの空中かかと落としが、ロケット団下っ端の脳天に直撃。
……死んで、ないよな？

「アブソル、袋の中の物出せっ！」
「しまっ——」

ドサドサドサ、と音がして、袋からボールが溢れる。

そして、凄まじい量のボールからポケモンが飛び出した。

「くっそ、してやられた！」

「アブソル、分かっているとと思うけど！」

「うん、イーブイのボールは、ちゃんと持ってる」

「ナイス！」

「イーブイ、ボールのなかに、入って」

その一言で、イーブイが赤い光になって、ボールの中に入っていた。
……ポケモンでもボールの中の出し入れを命令できるんだな。

「アブソルはそのまま先へ進んでくれ！」

「わかった」

「ハッ、逃がすと思って……？ 何だ？」

今さっきまで獲物を狙う目をしていたのに、何故か今は困惑している。

よく分からないが、これはチャンスだ。

「サイホーン！」

「はいっ！」

サイホーンに手を引っ張ってもらい、走る。

言動からして、あいつもかなり強力なポケモンを持っているそうだが……出してこないな。

まあ、追ってこないに越したことはない。今は、逃げることをだけを考えてよう！

「行こう、二人とも！」

それにしても、あいつは一体何を考えて――

「……ドサイドン。バンギラス。出て来いよ」

振り向くと、ポケモンが二人、出雲の前にいた。

ドサイドンは、硬そうなプロテクターで身を包んだ20代後半くらいの女性。

バンギラスは、緑色の硬そうな鎧を纏った40代くらいの長身の男。

哀しそうな、顔をして。

そして、その瞬間、

「――お母さんっ!?!」

「ぬしさま!?!」

「え、何だって!?!」

サイホーンだけでなくアブソルまで声を荒げ、急ブレーキをかけた。

「なるほどねえ。だから『逃がしてやれ』なんて言ったんだ?」

「……はい、そうです」

「お前ら二人は優しいからなあ。ま、この程度のわがままなら許してもいいけどさ。可愛いお前たちの言うこと、だからな?」

明らかに面倒くさそうに言う。

……さっきから、こいつは謎が多い。個体値を見抜いたのもそうだが、何でボールの中のポケモンの言葉が分かるんだ?

いや、そんなことよりだ。

こいつのドサイドンがサイホーンの『お母さん』?

こいつのバンギラスがアブソルのいう『ぬしさま』?

どういう巡りあわせだよ……。よりによって、こんなトレーナーに使われてるなんて……。

「そ、そんな、お母さん……?」

「……行きなさい。今の私では、あなたに何も言えないから」

「……ぬし、さま」

「あの時の、アブソル一家か……すまないことをした」

言葉を交わすも、四人は近づかない。近づけない。

それは、イーブイという命、そして俺という命を預かっているからだろう。

四人とも分かっている。

今は、感動の再会を喜ぶ状況では、ない。

サイホーンの、実の母親。そして、あのアブソルが声を荒げるほど大事な山の主。

本当は、四人とも抱き合って喜びたいだろう。だけどそれは許されない。

「ほら、早く行きな。俺の気が変わらない内にな」

こいつが、邪魔をするから。

「……アブソル、サイホーン。走るぞ」

二人は、無言で走る。
微かに二つの嗚咽が聞こえたけど、何も言わずに俺も走った。

ロケット団。後編（後書き）

出雲は、最初はシグのライバルで熱血なキャラでした。
いつの間にか黒幕みたいになっちゃいましたねえ…（他人事

ハナダシティ。

あれから走り続け、何とかお月見山を抜けた。

「ふう、やっと出られたね……」

「おいおい、まだ安心するところじゃないぞ」

「え？」

「……イーブイ」

「あ、そっか！　じゃあもうちょっと急がないと！　さ、シグ、手をとって！」

はつきり言って、もうスピードが速すぎて内臓辺りが限界なんだが……そんなこと言ってられない。今はイーブイを何とかしないと。

「つ、ついた！　ハナダシティだハナダシティ！　止まって止まって！」

「あ、はい！」

ズザザザザザザザ、と、凄い量の砂煙が上がる。

……今度からは、少しずつスピードを落としていくようにさせないとな。

「ポケモンセンターはこっちだ、急ごう！　あー……つと、アブソル、イーブイが入っているボール渡してくれ。それで、アブソルもサイホーンもボールの中に入れてくれ！」

「分かった！」　「……いや」

「よし、じゃあ入って、えええっ!？」

アブソルの、予想外すぎる拒否。

「な、何で!？」

「……この子のこと、心配。見ていたい」

……抱えて走っている内に、母性みたいなのが目覚めた、のか？
イーブイが心配になるのは分かるけど。

「大丈夫だって。お前を治してくれたのも、ポケモンセンターなんだからさ。お前も連戦で疲れたろ？ イーブイと一緒に休みな」

「……うー」

どういう反応なのかまいち分からなかったが、ボールの中に入ってくれた。まあ納得してくれたってことだろう、うん。

タンタンタララン♪

「はい！ お預かりしたポケモンはみんな元気になりましたよ！」

「ありがとうございますー」

相変わらず回復が早い。

「さて、でてこいみんなー」

ボールを放って、外に出す。

出てきたポケモンは、当たり前だが、サイホーン、アブソル、手足を縛られたイーブイ。

……って。

「イーブイごめん！　せめて縄を解いてからにすればよかったな！」
慌てて縄を解く。

「……………」

縄を解いても、何の反応もない。……よっぽど酷いことをされたんだろう。怯えきってる。

「……………」

「あ、あのさ、イーブイ。もうロケット団はいない。安心していいんだぞ？」

「っ！　……！」

俺が声をかけると、怯えて無言で後ずさった。……なんか、キツいよ今の。

「……」

そして。アブソルが、それを無言で抱きしめた。ちょっと驚いたようだが、別に拒絶するでもない。

「シグに抱きしめられた時、すごくうれしくて、すごく安心した。だから、だいじょうぶ」

「アブソル……」

そうか、うれしかったんだなお前。だから、イーブイに同じことをしてあげよう、と。アブソルは本当に優しいな。なんか軽く泣きそう。

「わ、私は修行の時にシグと一緒に寝れてすごくうれしかったよ！」

サイホーン、いや、うれしいけど、張り合う必要は無いんだぞ？

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

二人は、抱き合ってて無言で動かない。

俺が何かするとイーブイが怯えるから無言で動かない。

サイホーンは、何かノリで無言で動かない。

四人が無言で固まっているという状況です。周りからの奇異の目が刺さります。ポケモンセンターのど真中です。

……いつまでもこうしてる訳にはいかないな。イーブイに本意を聞かないと。このまま俺達についてくるか、それとも野生に戻るか。

「イーブイ。ちょっといいかな？」

「……………」

今度は、目をつぶってキュッとアブソルを強く抱きしめた。

あ、あはは……イーブイも、すっかりアブソルに懐いちゃったな。別に羨ましくなんかないぞ？ イーブイズ大好きだけど、別に羨ましくなんかないぞ？

「……イーブイ。シグは聞きたいことがあるの。このまま私たちと一緒に行くか、それとも、野生に戻るか」

アブソル……ありがとう。ホントにお前は優しいな。最近は慣れてくれて、ちよつとずつ饒舌になってきてるし。

それを聞いたイーブイは……俺ではなくアブソルを見つめ、口を開いた。

「……アブソルお姉ちゃんと一緒なら、行ってもいい」

「お、お、お姉ちゃんっ？」

お、珍しい。アブソルが照れてる。可愛い。

「だめ？」

「だめなんかじゃない。……むしろ呼んで」

ぶっ……おま、口には出さないけど、「むしろ呼んで」って！　なんか、セリフのあとに「キリッ」とかつきそうだよその顔！

……なんか、イーブイのおかげでアブソルの面白いところが次々と見られて面白いな。

「……じゃ、じゃあ、私がお姉ちゃんだから、イーブイは妹？」

「うん」

「……っ！」

イーブイをひしと抱きしめるアブソル。何を感じ極まっているんだろう。妹キャラが好きなの？……と言ったら、なんかアブソルが変なキャラになってしまいうからやめておこう。

「……よろしくね、イーブイ」

「よろしく、お姉ちゃん」

「……っ！」

いちいち感極まっていたらきりないぞー、アブソル。

「あはは、よろしくねイーブイ」

「……よろしく、えっと、サイホーン」

「……私はお姉ちゃんじゃないのか……」

一応アブソルよりお姉ちゃんだと思っただけだなー、とか呟いてる。お前もお姉ちゃんって呼んでほしかったんかい。でもまあ、確かに妹キャラって感じは分かる。ちなみに俺はシスコンではありませんしロリコンでもありません。

「よろしくな、イーブイ」

「……」

「あ、あはは………はあ」

そろそろ心が折れますよイーブイさん。まあ、人間が怖いのは分かるけどね。

でも、同じポケモンのみんなには怯えてなくて、助かったよ。これ

なら少しずつ人間に慣れさせていけばいいし……。それにしても、アブソルとイーブイは出会ってまだもないのに、本当に仲良くなつたな。しばらくは、イーブイはアブソルに任せるか。……。羨ましくなんかないよ？

そう思っていたら、アブソルがこっちを見てきた。

「……ひょっとして、シグも抱きしめてもらいたいのか？」

「ちげえよ！ 俺に構わずイーブイをちゃんと抱きしめてやってくれ！」

むしろイーブイ役じゃなくてアブソル役希望だよ！ だけどイーブイはアブソルを御所望だよ！

はあ……。どうにかして、イーブイに懐いてもらいたいもんだけど……。ま、言っても仕方ないか。旅をしていれば、その内慣れてくれるよな。

「さて、この街にもポケモンジムがある。だから今日から、打倒ハナダジムリーダーを掲げて頑張っていこうと……。あ」

つい、アブソルの方を見る。

そうだ、アブソルはハナダジムリーダーに追われてたんだ。今は問題が解決したから問題はないと思うけど、それでも、彼女の恐怖は拭いきれてないだろう。心ないこと言っちゃったかな……。

「心配してくれて、ありがとう。でも、だいじょうぶ」

「あ、そ、そうか」

な、なんだかなあ……。俺って顔に出やすいタイプなのかな。

「――むしろ、お礼を言いたい。あなたのおかげでシグに出会えた、ありがとう、って」

「アブソル……」

いかん、俺は涙腺緩いんだ。なんか泣きたい。

「うわあもうアブソルーツ！」

感極まってギュッとアブソルを抱きしめる。なんかアブソルのこと言えないな俺。アブソルは微動だにしないけど、やっぱりちょっと嬉しそうなのが感じ取れる。

「……うわーもうシグーツ！」

ノリでサイホーンも俺に抱きついてくる。こやつめハハハ。

……えーと、つまり。

イーブイ↑アブソル↑俺↑サイホーン

電車ごっこかい！

再び奇異の目が集まるポケモンセンター。

「……えっと、とりあえず出ようかみんな」

ひよこひよこひよこ。

ひよこひよこひよこひよこひよこ。

ひよこひよこひよこひよこひよこひよこひよこひよこひよこ。

「とりあえず抱きしめながら歩くのはやめよう！ なっ！」

そんな感じで、若干変人扱いされながらもポケセンから出てきた。

……さて、こっからどうするか、だよな。

改めて方針をまとめておこう。

俺は、元の世界に戻る必要がある。そしてそのためには、16種のプレートを集める必要がある。そして、それはアルセウスの主が全て持っているという。要するに、俺はそのアルセウスを持つトレーナーを倒せばいいわけだ。

そして、プレートを集めるついでに、せっかくこの世界に来たのだからリーグには挑戦しておきたい。だから、ジムを回ってバッジを集めたい。

こんなもんだろう。

常識的に考えて、秘伝マシンの「いあいぎり」をとる必要はない。道が通れないほどの木とか、普通すぐに伐採するだろ。だから、サントアンヌ号イベントは不要だ。

そうすると、ハナダジムが先か、この先のクチバジムが先か。

現実的に考えてそうだろうなあとは思っていたけど、この世界では、バッジ数に合わせてジムリーダーの使うポケモンも変わってくるらしい。

クチバジムは……サイホーンもいるし、攻略は幾分楽だろう。

となると、やっぱり先にハナダジムかな……。

となると、一転サイホーンは活躍できない。なんたって水タイプ技四倍だ。

でも実際のゲームとは都合が違うし、頑張ってもらおうかな。

次に、アブソル。スターミーを使ってくるとすれば、スターミーはフルアタッカー。ふいうちを使えばアブソルが圧倒的に有利だ。：

…あ、でも、確か道具も使ってきたな。相手が人間なら、読みあい
は得意だ。アブソルとの連携を大事にしないと。

イーブイは……まだ、バトルは早いかな。でも、ある程度能力を知っておかないと。

というか、まずはイーブイと仲良くなることから始めなきゃ……トレーナーとポケモンの息が合っていないと、到底バトルなんかできないし。

……うーん。

「よしみんな！ 山へ出かけよう！ 修行という名のキャンプだあーっ！」

声高らかに、宣言した。

ハナダシテイ。(後書き)

アブソルとイーブイは、波長でも合ったんでしょうか。
とっても百合百合して…ゲフンゲフン、とっても仲が良いですね。

※ハイキング↓キャンプ
どういう間違え方だよと。

キャンプ。

水よし、タオルよし、テントよし、バーベキュー用食材よし。うん、何かいろいろ抜かしてる気がするけど、ポケモンいるから大丈夫だろ。特にサイホーンとアブソルは山育ちだし、まあなんとかなると思うんだ。

……驚くほどの見切り発車。

「さて！ さっそく登山を始めようか！」

「はい」「……うん」「……………」

朝早く起きたから、みんなテンションが低いな。

まあ、登山するならこれくらい朝早くないと。

とりあえずハナダシティの人に聞いて、「イワヤマ」にやってきた。イワヤマトンネルがある山だね。この山は標高2052メートルで、危険も少ないからハイキングに来る人も結構いるらしい。ちなみに、この山の向こう側はシオンタウンらしいな。

……ということは、別にどこのポケモンジムからでも行けるってことかな？ まあ、当面は打倒ハナダジムで進めていこうか。

ま！ とりあえずはこのキャンプ！ 親交を深めあうのが一番の目的だ！ わー、なんかワクワクしてきた！ みんなはポケモンと言っても子供だし、かるく先生気分だね！

「はい、何か質問ある人ー！」

「シグ」

「はいアブソルさん」

「イーブイを抱えながら歩いてもいい？」

「ダメ」

こういうのは自分で歩かなきゃつまないんだよ。

「……だめ？」

「上目遣いしてもダメなものはダメ」

「むー」

まったく、どこでそんなテクニック学んだんだか……。動揺を隠すのもやっただわ。

「……て、つなご」

「うん」

いつもテンション低いアブソルだが、一段とテンションが下がったな……。

ま、手を繋ぐくらいなら問題ないな。……いや待てよ？ むしろ親交を深めるにはちょうどいいじゃないか！

「よし、みんなで手を繋ごうか！ 手を繋いで歩こう！」

「おお、いいね！」

そうして、俺がイーブイと、サイホーンがアブソルと手をつないだ。

うん、やっぱりサイホーンとアブソルは仲良くなってるようで嬉しい。少しずつ会話するし、二人とも嬉しそうだ。

んで、俺とイーブイ。
最悪手を握ってくれないかと思ったけど、それは問題なかった。素直に手を握ってくれたよ。

小指だけ。

って、俺は嫌われてる男子かあああああつ!!
叫びたいけど、叫んだらまたイーブイが怯えちゃうしやめる。

いや、何だよコレ。何で小指だけ？ 悪意すら感じるよ。手をつなぐのを拒否されるよりある意味傷つくよ。
……これは、慣れるのが思った以上に大変そうだな。

二時間ほど歩いただろうか。

「わー、見て見てみんな！　大きい滝だよ！」

「……きれいだね」

「は、はは。そうだなー、綺麗だな」

サイホーンは元気だなあ……。って、元々山に住んでたんだから、これくらいはなんともないか。

俺は、山道なんて久々だからそろそろ足が痛いよ……。

「……つかれた」

「だいじょうぶ？」

「もうすぐ目的地に着くから、あとちょっとの我慢だぞー」

確か俺達が目指している目的地は、キャンプ場だ。今日は、そこでみんなとキャンプする。

「あ、ほら！　あそこだ！」

「え、どこどこ？」

もうすでに何個かのテントが張ってあったので、すぐに分かった。

「おゝ……三角のがたくさんあるね」

「まあな。俺達もあれの中に入るんだぞー」

「へえー！」

まさか三角テントしか売ってないとは思ってなかったよ……。文明が遅れてるのか進んでるのか分かんねえ。あ、価格は4000円くらいで済んだ。テントもピンからキリまであるんだね。

サイホーンの住む山には、あんまりキャンプに来る人とかはいなかったのかな。さっきから興味深そうにテントを見回している。

「じゃあ早速中に入ろうよ！」

「おうそうだな……って待て待て待ていっ！」

「キャーッ！ 誰あなた！？」

「うわっ、ポケモン！？ しっし、入ってくんない！」

「わわわっ、ご、ごめんなさいいっ！」

ああ、手遅れだった……。

「……中に入ったら、怒られた」

「いや、俺の説明が悪かった」

あれの中に入る、ってのは言い方が悪かったな、うん。

「……中に誰かいたのなら、追いだせばいい」

「アブソルさーんっ!？」

「おお、そういうもんだったんだね!」

「違うっ! それは違う!」

アブソルが壊れた!？ 何、疲れ!？ 暑さ!？

「キヤーッ! またあなた!？」

「いい加減にしろコノヤロウ!」

「わわっ、ごめんなさい!」

……もう何も言うまい。

「……つい、謝って出てきちゃった」

「うん、それでいい。……アブソルー」

「ごめんなさい。信じるとはおもってなかった」

「サイホーンはバカなんだから、すぐ信じちゃうんだよ」
「そっか。たしかに」

「そんな本人の前で堂々と!？」

「さーで、俺達も自分のテント張るぞー」

「……おー」

「ちよっ!？ 流さないでよ! おーい! 悪いのアブソルでしょ!？」

こういう三角テントだと、だいたい30分くらいかな。こいつらに手伝ってもらうのは若干心配だけど、ペグを打ってもらくくらいはしてもらおうかな。

「みんな、テントの設営手伝ってもらっていいか？」

「……はーい」「いいよ」

「イーブイも、いいか？」

「………うん」

やっぱりこういうのは、一人だけ慣れてないから、ってのは駄目だよな。でも、イーブイが手伝えること、か………うーん、下にレジャーシートを敷いてもらおうかな。

「よし、できたな！」

「おー、周りにあるのと一緒にだね！」

「つかれた」

30分くらいでなんとか作れた。まあ、ここで時間食ってちゃ何にもならないしな。

先に、中に荷物を入れておくか。バーベキューの荷物、かさばるし。そう！ここからがキャンプの始まり！ザ・キャンプ・ワズ・スタート！

「さ、みんなそろそろ疲れたろ？ 川に行こうぜ」

川の間所とかも、もう調べてある。魚獲りもキャンプの楽しみだしね。

「……つかれたし、ここにいる」

「そういうなよ。川は気持ちいいぞ。疲れが吹っ飛ぶぞ」

「……うーん」

「私、行きたい」

「えっ？」「お？」

「……イーブイ？」

イーブイはいつもアブソルの後ろにくっついてしゃべるから聞きとり辛いんだけど、その声だけはよく聞こえた。イーブイが自ら意思表示するとは……初めてじゃないかな。

……人間に怯えてるだけで、本当はこの子、明るいポケモンなのかな。

「ほらほら、イーブイも行きたいって言ってるし。さ、行こうぜ」
「う、うん」

ずっとイーブイに付きつきりだったからだろうな、アブソルは驚きを隠せない。

といっても、イーブイを除いた全員を驚かせたんだ。どのくらい彼女が無口だったのかは分かるだろう。

……もう口を閉じているけど。しっかりと聞いたぜ、お前の言葉。

「ふわー、久しぶりの川だー！」

川に着いた途端、元気いっぱいサイホーンが開口一番に感想を漏らした。

おー、魚もたくさんいるいる。こりゃ今夜はごちそうだな。……俺が獲れれば、の話だが。

「わふーい、冷たいっ！ 爽やかっ！」

「……ひんやり」

「来てよかっただろ？」

「うん」

とりあえず、アブソルも満足そうで何よりだ。イーブイも楽しそう。

「いーぶいーっ！」

「なに？」

「それっ！」

「ひあっ!？」

「にははは、かかったかかった！」

サイホーンなんかはしゃいで水かけてる。はしゃぎすぎ。

「……む」

「うわわわわっ!？　な、なんでアブソルが水かけてくるのさ！
不意打ちずるいよ！」

「ていつ」

「うわわっ、イーブイまで！　ううー、二体一は卑怯だよ！　そう
でなくても私水をかけられると弱いんだから！」

「……じゃあ水かけるなよ」

思いつきり自業自得だなあ。もうサイホーン涙目だし。

「くっそー、だったらこっちだって本気出してやる！　山出身の私
を舐めないでよ！」

「ていていていていていていてい」　「それぞれそれぞれそれ
れ」

「にゅわーっ!？　なんでそんなムキになるのさー！」

「あっはっは、魚が逃げていく」

みんなテンション高いな、おい。まあいいことだけどね。

ただどまあ、魚がみるみる内になくなっちゃったし……上流に行
きますか。

「シーグー、どーこ行ーくのー。私を一人にしないでよー！ 二対二！ 二対二でしようよお！」

「上流に魚獲り行くんだよ」

「おー、それなら私も行く！」

「お前が来たら魚が逃げるだろ……。ここで遊んでな」

「ちょ、これでも私は山出身だからね！？ 魚獲りなんかお手のものよ！」

「へえー……そーういやそーうだったな」

「そ！ だから……ひうつ！？ もう、話してる途中なんだから水かけないでよ！ ほらさっさと上流行こう！」

アブソルとイーブイから逃げたかっただけじゃねえの……？ つか、お前ら少しくらい攻撃の手を緩めろよ。

まあ、何にしても山育ちなら期待できるな。水苦手だけど。

「……行っちゃったね」

「二人で水かけする？」

「……………ていつ」

「……それっ！」

「ていていていていていてい」 「それぞれそれぞれそれぞれ
あいつら……「てい」 「それ」 しか言っていないけど、あれは楽しんでいるのか？ なんだろう……女の子同士の水かけ合いつこって、もうちょっと見てて楽しいもんじゃなかったかなあ……。

「お、こちらへんがいいね。魚いっぱい！」

「おお、ほんとだ」

少し移動するだけで、だいぶ違うもんだな。結構上の方まで行くと思ってたが。ここからなら、まだアブソルとイーブイも見えてるし、安心だな。あいつら、まだ水かけ合ってるよ。よく飽きないな。

「じゃあ、もう獲っていいよね？」

「おお、獲るぶんには全く構わないけど、具体的にどうやるんだ？」

「それはもちろん……えーと」

サイホーンがキョロキョロと何かを探し始める。なんだろう、木の枝で簡単な釣り竿でも作るつもりなのか？

「あ、こんくらいならちょうどいいね」

と、高さも幅もサイホーンの身長くらいある岩を持ち出してきた。すげえ、あんなもん持てるのか。

……って、サイホーン、さん？

その大きな岩で何するつもりですか？

「そおいやつさあーっ!!」

バッシヤーン!

おお、すごい。岩を落としたら、気絶した魚がたくさん浮いてきた……って

「ガッチン漁おーっ!」

「ふうー、たくさん魚が浮いてきたねえ。大量大量」

「お、おまつ……ガッチン漁て! それ禁止されて……いや、この世界ってどうなの? 禁止されてないのか?」

「え? どゆこと?」

ですよねーっ!

よく考えたらそんなことサイホーンの知ったこっちゃないよ! 最近まで野生だったんだもん!

……まあ。

誰も見てないし、いいか、うん。

「じゃ、じゃあ四匹持つてくか」

「え? 全部持つていけないの?」

「ふざけんな。誰が食べるんだこんな大量の魚」

一人一匹として四匹が妥当だろう……。バーベキューもあるし。

「むう、燻製とか氷締めとか、いろいろ方法はあると思うけどなー」
「お持ち帰りして食べるわけじゃないしな……。ほら、アブソルと
イーブイも待ってるし、早く行こ……。あいつらまだ水かけ合ってる
よ」

水のかけ合いっことは結局俺が止めるまで続いた。

「なあ、水かけ合ってて楽しかったのか？」

「うん」「うん」

なら、もう何も言わないけどね……。

「ま、そろそろ帰るか。キャンプの醍醐味といったら何と言っても
バーベキュー！ ほら見てみ、魚！」

「……おなかへった」

あはは、まあ結構歩いたしな。

「今、食べていい？」

「生で！？ いやいや、これからキャンプ場に戻って、焼いて食べ
るんだよ！」

「ふーん」

ポケモンは凄まじいな……。生魚なんて食べたら腹壊すどころの騒
ぎじゃなくなるって。

「私、この魚がいい」

「ん？ この一番大きいのか？ はは、意外に食い意地はってんな、
アブソル」

「……はってないもん。その魚、私に持たせて」

奪う様にして俺の手から魚を取る。

って、

「その魚、咥えながら歩くのか……？」

「もふ」

返事なのそれ？　　というか、歯を使わないで生魚咥えるとか器用だな。

咥えるってのも少々心配だけど、言い方からして生魚も食べたことがあるんだろう。咥えるくらいで病気にはならないか。

……それに、魚を咥えて歩いてるの、なんというか、可愛いし。いつか。

「四匹しか持ってきてないんだから、勢い余って食べるなよー？」

「もふ」

お前の体をもふってやろうかコノヤロー。もふじゃ分かんねーよ。

——お、あのテントの群れは、キャンプ場だな。よく見ると、すでにバーベキューをして楽しんでる連中もいる。いかん、俺まで腹が減ってきた。まだ4時くらいなんだけどな。

……どうしようかな。アブソルもおなかへったって言うてるし、早めにバーベキューしちゃうか？

キャンプ。(後書き)

アブソルの声がいつのまにか花澤香菜さんで再生される…

シグのいないところ。**(前書き)**

※アブソル視点です。

シグのいないところ。

私たちは今、テントの中で休憩してる。

外からシグの鼻歌が聞こえてくる。バーベキューのじゅんびだそう
だ。

「よおーしみんな！ レッツ・バーベキューウツ！」

「うおうっ、びっくりさせないでよシグ！」

相変わらず、シグは唐突にテンションがおかしくなる。

バーベキュー。聞いたことは、なんかいがある。お肉を焼いたり、
私が今啜えている魚を焼いたりして食べるイベントだ。野菜も食べ
るらしいけど、きらいだから食べたくない。

でも私もこの魚を啜えているのに飽きてきたところだし、ちょうど
いい。だってこの魚、もうピチピチしてないし。垂れてるし。

「もう火の準備はバッチリだからな。思い思いに肉やら野菜やら焼
いてけー」

「もふ」

ベツ、と魚を金網に移す。

「……アブソルはずっと口に啜えてたもんな。」

「ほしいの？」

「いらねえよ!？」

「これは私のだから、いくらシグでもあげないよ」

「だからいらねえって!？」

シグはからかうと面白いって、最近きづいた。だから最近はよくか
らかってみる。シグは怒るかなって思ったたら、「よくしゃべるよう
になってくれて嬉しいよ俺は」って褒めてくれた。でも、目をそら

していたのはなぜだろう。

「つか、魚なら串に通した方がいいんじゃないか？ 串もこのバッグの中に入ってるし。……あ、お前が串扱うのはちと不安だし、俺がさしてやるよ」

「っ！！」

「ん？ どした？」

それ、私がいまさっきまで啜えてただけだな……。その、唾液とか、ついてると思うんだけど、さわっちゃうのか。……シグはほんとうに、そういうのに鈍感。へびーきゅー。

「あ、もしかしてアブソル、意外と潔癖だった？ そっかー、年頃だもんな」

違うよ。「年頃だから」は合ってるのに肝心なところが合っていないよ。

「……違うのか？ あ、あれか？ 元々野生のポケモンだから、串は駆使できません……なんつつて」

「すみませんでした」

なんだろう、目のまえで魚のいい匂いをするのに、いまのひとことで完全にわくわくしたかんじがなくなっちゃった。なんでだろう。シグはまほうつかいなのかな。

「さ、さあさあさあ！ 魚焼けてきたぜ！ あ、そうだそうだ！

塩！ 塩が必要だったな！ 今持ってくるよ！」

もういつかい、シグはテントのなかへ入っていった。

「……なんか、こころなしが火が弱まってきたね」

「ほんとだね」

「お姉ちゃん。お肉焼いていいかな」

「いいよ」

分かんないけど。

「じゃあ私はこのピーマンでも焼いてよっかなー」

「？ 野菜を先に食べるの？」

「ふっふっふー。私は意外とベジタリアンなのですよ」

自分で意外と言ってってる。でも、サイだし意外でも何でもないよな。

「そういえば、お肉の焼き加減ってどんなかんじだろ」

「五秒くらいでいいかな」

「いいんじゃないかな」

「じゃあ、いただきます」

「待て待て待て！ 何食べようとしてんの！？ 生肉！？ 豚の生

肉はまずいよお前！」

「あ……ご、ごめんなさい」

「いや、あの……謝ることないんだけどな……。豚肉はさ、ほら、ちゃんとピンク色が無くなったら、食べていいんだよ」

「わ、わかりました。ありがとうございます」

「はは、敬語なんか使わなくていいって」

「え、えと、でも、あの、私、あなたのポケモンですから」

ん？

イーブイとシグが、会話してる。はじめてだ。ぎこちないけど。よかった……。ちよつとずつだけど、イーブイもなれてきてくれる。

「……うん、これくらいだろ」

と言って、シグが焼き肉を、たれが入ったお皿にうつした。みてみると、たしかにお肉はきれいなきつね色になっている。あ、私の魚、そろそろかな。

「はい、召し上がれ」

「あ、ありがとうございます」

イーブイは、うれしそうに焼き肉をうけとる。ふーっ、ふーっ、と息を吹きかけて、でもちよつと熱そうにしながら、お肉を口のなかにほおぼった。

「……おいしい」

「そっか、それはよかった」

イーブイは、シグはもちろん私も見たことがないくらいに顔をほころばせていた。いっかい噛むたびに、今にも泣きそうな、それでいてとっても幸せそうな顔をした。

……いままで、きつとまともなごはんなんて食べさせてくれなかったんだ。すごく幸せそうな顔を見ながら、それでもシグと私は、この子の境遇を思うとすなおに喜べなかった。

……魚、すこしこげちゃったな。パリパリとした、こげたところの苦い味が、今日は特に苦くかんじる。

「アブソル、ずっとお前が啜えてた魚はどうだ？」

「……ん。おいしいよ」

「そっかそっか」

「ひーはんほほいひーよー」

うわっ、サイホーン、いつのまにピーマン食べてたんだろ。しかも、まるごとほおぼってるし。……えっと、『ピーマンもおいしーよー』かな？

「それはよかったな。でもお前、普通ピーマンをまるごと口にほおばるか？」

「ふっふっふー、はんはっへははひはひははへ。ほうひよくほうふふほひへ、ほへふはいははへひはえはほは」

「うん、とりあえずピーマン食べきってから話そうな？」

「ははっはー」

もっさもっさと、サイホーンはピーマンを食べはじめた。

「あ、あの……」

「ん？ どした、イーブイ？」

「あの、も、もう一枚、お肉、食べていいですか？」

「……へ？」

「いや、あの、とっても、おいしかったので」

「あ……ああ、ああ！ じゃんじゃん焼いていいさ！ まだまだ肉はたくさんあるからな！」

「ありがとうございます……」

イーブイは、また顔をほころばせた。あの焼き肉の味を、おもいだしたんだとおもう。

イーブイは怯えているだけで、もともと無口なわけじゃないそれは、イーブイがいちばん心を許してくれる、私がいちばん知っている。

だから、シグと会ったときの態度のかわりようが、ぎゃくに不安だった。イーブイが、ずっとにんげんに怯えたまま、シグにも心をひ

られないままなんじゃないかって。

私は、イーブイが大好き。だけど、シグも大好き。ついでに、サイホーンも大好きだから。

「……どうした、サイホーン？」

「いや、なんか……誰かにおまけ扱いされた気がして」

「へ？」

だから、私はイーブイがすこしずつ慣れてくれてうれしい。

きっとこの子は、ロケット団に捕まるまえ、とっても明るい、だれにでも心をひらく子だったんだと思う。あくまで、勘だけ。

だから、いつかこの子が、そんな心にもどってくれたら、私はそれがいちばんうれしい。

私は、この子のお姉ちゃんというより……むしろ、お母さんかな。

そう思いながら、おいしいお魚をまたかじった。

イーブイの、幸せそうな顔を見ながら。

お肉も野菜も、ぜんぶなくなって、バーベキューはお開きになった。とってもおいしかった。私も、あんなにたくさん食べたのは久しぶりかも。……シグが、野菜も食べなきゃダメって言ったから、ちょっとだけ食べた。もう野菜は食べたくない。

今は、テントの下でみんな寝てる。

シグは、「早めに寝ろ」って言ってたけど……。

「シグ」

「……………すー」

シグがいちばん早く寝たみたい。

「……………イーブイ」

「なに？ お姉ちゃん」

イーブイは起きてるみたい。

「サイホーナー？」

「……………もー、たべれない……………」

幸せそうに寝てる。よしよし、やっとふたりきり。

「ねえ、イーブイ。今日は楽しかった？」

「……………うん。とっても」

「……ねえ、イーブイ。シグのこと、どう思ってる？」

「……えーと」

やっぱり、イーブイは迷ってる。シグが、すごく優しくて、私たちのことを想ってくれるいいにんげんだっていうことは、イーブイもわかってる。

……ぬしさまからきいたことだけど、一度にんげんのおそろしさを知ってしまったポケモンは、もうよほどのことがないかぎりにはにんげんに心を許すことがない、らしい。だから、迷うのもむりはない。

「優しい人だと思う。だけど……やっぱり、人間が怖くて」

「シグは、いいひと？」

「……？ うん、とってもいい人だと思う」

「じゃあ、迷うことないよ。シグは、いいひとで、わるいひとじゃないんだから」

「……そういう問題かなあ？」

「そういうもんだいだよ。私たちのトレーナーは、他のだれでもない、シグだもん。にんげんが怖いとか怖くないなんて、かんけいない。シグは優しくて、いいひとだから」

「まあ、そうだけど……うーん」

やっぱり、ぬしさまが言ってたことはほんとうみたいだ。どう思っている、体がきよぜつしてしまうんだ。トラウマ、っていったかな。

でも、私が言うべきことはみんな言った。あとは、イーブイしだいだ。

「じゃあ、おやすみイーブイ」

「……うん。おやすみ、お姉ちゃん」

そう、私は、イーブイのトラウマを治すことなんてできない。あくまで、治せるのはイーブイ。私は、この子を信じて、見守ることし

かできない。

でも、なんだろう。……シグとイーブイが仲よくなれる日は、そうとおくじゃない気が――

「皆の者ー、朝だぞー！ 起きろー！」

「ふおおっ、もう朝か！」

パンパン、と、軽く手を叩く音が聞こえる。……シグだ。いちばん早く寝て、いちばん早く起きたみたい。あいかわらず早起きでもシグは元気だ。

「いやー、清々しいね！ 久しぶりに、朝の山の空気を吸ったよ！」
サイホーンも元気だ。

でも、私は元気じゃない。

「……ねむい」

「はは、なら川で顔洗ってこい。場所は覚えてるか？」

「……わかんない」

「まあ、そんな眠気眼で川まで行って溺れられたら困るしな……俺もついてくよ」

「……ありがと」

「おお、私も行くよー。朝の冷たい川の水って、気持ちいいよね！」

「……あ、私も行きます」

「イーブイも行くのか？ じゃあ四人でまた川へ行くとするか」

「そうですね」

朝によわいのは、私だけかあ……。

「――そうと決まったら早く行きましょう、マスター」

「おう、そうだな……あれ？」

「ん？」 「え？」

「ほ、ほら、ねぼけてないで、川に行きましょう？　早くしないと、一人で行っちゃいますよ！」

そう言って、イーブイは、恥ずかしさを隠すようにテントの外に出てしまった。

「……？」

のこる三人は、交互に顔を見あわせて、

そして、三人で笑いあった。

シグのいないところ。 (後書き)

三日目でイーブイも慣れてくれました。
次はハナダジムですね。

カスミ。

「ん〜っ……とうとうハナダシティに戻ってきたか」

特に何事もなく俺達はキャンプから戻ってきた。

でも、このキャンプで得られたものは大きいな。

何があったのかは知らないけど、イーブイが自然に俺と接してくれるようになった。夜、何かやったのかな？ まったく、保護者は俺だっけのに、情けなくも一番先に寝てしまったらしい。

いやでも、そのおかげで、イーブイの特性や技、いろいろわかった。……思わぬ収穫もあったし。

それと、やっぱりゲームみたいにわんさか野生のポケモンがいるというわけではないらしい。キャンプを通して、見かけたポケモンは数十匹といったところ。戦ったのはその中でも十数匹。……ニビシテイのくさむらと変わんないってのは、あんまり納得がいかない。

「マスター、このままポケモンジムまで行くんですか？」

「ん、いやとりあえずは回復しないと。お前らも疲れたろ？」

「ふむ……そうですね」

「つてか、その口ぶりだと、お前も戦う気満々なわけか」

「えっ？ 何か戦わない道理が？」

ははは……。お前さん、もう別人みたいだな。こんなに闘争心強いやつだったかなあ。あれか、適応力があるから、こんなすぐに切り替えられるのか？

「サイホーンはどうする？」

「へ？ なんて？」

「ここのジムは水タイプ使い。サイホーンとは超絶相性の悪い奴ば

かりだ」

「ふっふーん、そんなの避ければ問題ないよ！ 心配ない心配ない！」

言ってることはまあ正しいが、こいつが避けるなんて大層なことできるのか甚だ疑問だ。

「さて、アブソル。お前が今回の戦いの要となりそうだ。頑張ってくれ」

「わかった」

「——よくきたわね」

しばらくして、ここはポケモンジムのカスミ前。いや、まさかアブソルの不意打ちだけでカスミまでたどり着くとは思わなかったよ。

「わかってると思うけど、私は他のみんなみたいに簡単には倒せないわよ——でてきて、ヒトデマン！」

「さてどうかな！ でてこいサイホーン！」

出てきたのは、赤くてくりつとした目が印象的な女の子。まちがいにヒトデマンだ。

「あら、アブソルじゃないの？」

「すぐに試合を終わらせちゃ、つまらないでしょ？」

「……言うわね」

「あーっ、シグ！ その言い方、まるで私がかませ役みたいじゃない！」

「あ、はは、悪い悪い」

もちろんサイホーンを信頼していないわけではないが、おそらくデススター……スターミーは倒せない。だが、ヒトデマンなら、あるいは。

軽口を言っているが、実際のところアブソルに負担をかけたくないただけだ。アブソルは、高い攻撃力を持つ反面、デリケートという特徴もある。俗に言う紙耐久だ。不意打ちを読まれ、ヒトデマンにもやられかねない。そうなると、スターミーを倒しづらくなる。ハイルスク・ハイリターン。これがアブソルの特徴だ。

スターミーの特徴は、素早さと特攻。サイホーンにとっては、何よりの天敵だ。そして、イーブイでもスターミー攻略は難しい。……それは、あとで説明する。

だから、扱いの難しいアブソルが戦いの要を握っている、ってこと。

——しかし、だ。

忘れてるかもしれないが、俺は元の世界でもポケモン大好き人間だった。当然、知識も戦略も、この世界の住人の誰よりもある。

もちろん、トレーナー同士の読みあいなんてお手の物。タケシのときは油断したけど……そろそろ、この知識と戦略を思う存分使わせてもらいますか。

「サイホーン、ロックカットしたあとに突進だ！」

「わかった！ この技、難しいんだよね……」

そうは言うが、サイホーンはけっこう技をものにしてる。成功率はかなり高い。

「ロックカット……？ 意図はわからないけど、ヒトデマン、避けて——」

「反応が遅いね！ サイホーン、そのままストーンエッジ！」

「はーいっ！」

「げふうっ!？」

「ひ、ヒトデマン!？」

悲鳴はすれど、姿は見えず。それも当然、場外まで吹っ飛ばす威力だからな。

ロックカットからの、突進からの、ストーンエッジ。もちろん、その威力は突進とは比較にならない。

「ふっ、所詮私は、かませ役っ……!」

「おいおい……」

なんともいたたまれないセリフを残して、ヒトデマン戦闘不能。

「くっ、だったらでてきなさい、ギャラドス!」

「え、ギャラドス?」

そしてでてきたのは、人魚みたいに下半身が魚みたいで、気が強そうな女の子。……あの長さは、人魚というよりラミアって気がするけど。

いやそんなことより、俺の記憶では、初代のカスミはヒトデマンとスターミーしか出してこなかったような……? でも、コミックスのカスミはギャラドスを使うし、確かにギャラドスがいるイメージはあるな。

……やることは同じだな。サイホーンはロックカット状態の時、直線でどこにだって跳べる。弾丸みたいにな。相手が飛行タイプだろうと、関係無い。

「サイホーン、もう一度今の攻撃! ただし突進に集中するな、ストーンエッジに集中しろ! 攻撃は一つ一つが強力なんだから、なるべく拡散して使え!」

「う、うんっ!」

突進するサイホーン。ストーンエッジはギャラドスに効果抜群だ。これはサイホーン2タテできるか?

……まあ、そううまくいくとは思えないけど。

ふわっ、と、ギャラドスが空を舞った。

「ふん、モンスターボールから試合を見てたよ。二度も同じ攻撃が聞くと思わないでよね!」

ギャラドスが空中で誇らしげに胸を張る。やっぱり、二度目は当てられないか……。さて、一度避けられると、一転サイホーンは圧倒的不利な状況に陥ったな……。

「サイホーン、一旦退いて――」

「くっそう、もいっかい!」

「おいコラ!」

って、聞いちゃいねえ! おい、突進するなって! 一旦退けって!

「――甘い」

「えっ?」

また、ふわりとギャラドスが舞う。当然、熱くなってるサイホーンの突進なんて当たるはずがない。

「ギャラドス、ヒトデマンの分までやっちゃって!」

「言われなくても！」

ギャラドスがいきなりサイホーンに近づき、その尾を思いっきり振りあげる。近くで見るギャラドスの尾は、筋肉で引き締まっている。……要は、かなり危険な武器になり得るってことだ。

「——でりゃあっ!!」

「はぴい!？」

バツシャーン!!

水みたいなのがぶつかる轟音が響く。同時に、サイホーンの悲鳴も響く。

「……アクアテールか」

「そのとおり。ギャラドスの攻撃から生まれる威力はすごいわよ！」

「ふっ……ふらふらん……」

当然、サイホーンは戦闘不能。そのまま前に倒れた。

「戻れ、サイホーン。次からはもちっと落ちついてな」

「さあ、次のポケモンはアブソルかしら？」

「まあそう急ぎなさんな。次は……イーブイ、君に決めた！」

「頑張りますっ……!」

やっぱりイーブイは緊張気味だ。サイホーンのように熱くなりすぎることは無いだろうが……心配だな。まあ、イーブイとは事前に打ち合わせもしてあるし、大丈夫だろう。俺は信じる。

「ギャラドス、もう一度アクアテールをお見舞いしてやりなさい！」
「りょうかい！」

「……………」

ギャラドスがイーブイの眼前に迫る。……が、イーブイは動かない。

「ちよっ……避けようともしないのか？ カウンターをしてくる様子もないし……」

「……来てください。受け止めてあげます」

「ふん、生意気言うじゃん！ 受け止めるもんなら受け止めてみなっ！」

イーブイは、全く動かない。ただ、ギャラドスの攻撃を待つ。

……まあ当然、指示通りだ。

イーブイのセオリーな戦いかた……ある程度ポケモンに詳しい人なら、誰でも知っている型。

この世界で実践するのは初めてだが……いや、できる。できるはず！

バッシャン、と、ギャラドスのアクアテールが振り下ろされた。

「……なっ、耐えた、だって!？」

「受け止めると言ったじゃないですか……」

よっし、耐えた!

「ナイス、イーブイ!」

「な、何で……あっ、こらえるか!」

「そのとーり」

さてさて……もう、何をするか分かったよね。

「くっ……だけど、こらえてからすぐの攻撃は無理でしょ? イーブイはギャラドスより遅いし、ギャラドスを倒せるだけの攻撃力もない! イーブイなんかじゃ、うちのギャラドスは倒せないわよ!」

甘い。

甘いなあ、ジムリーダー。

まさか、イーブイの真骨頂がその程度だと思ってるのか?

「くっ、しぶといな、もう一回アクアテール……何食ってんだアンタ?」

「んむ、んむ……うわっ、甘苦っ、それに酸っぱいし、硬いし……美味しくないなあ」

「……?」

「地味に大きいなあ、これ……ん、なんとか食べきれた」

「……ハッ、ちょ、何食べてんのさ！　よく分かんないけど、もう
いっかいアクアテールくらえ！」

バsshャーン、とまた凄まじい音がする。

今度は凄まじい音だけだ。

「あれれ？　ギャラドスさん、動きが鈍いですよ？」

「な、なあっ!？」

いつの間にか、イーブイはギャラドスの後ろに立っていた。素早く
なったからって、粹なことするなあ、あいつ。

『そういえばイーブイ。そのポーチの中には、何が入ってるんだ？』
『え、これですか？ ……えーっと、確か、カムラの実、っていいましたかね』

『カ、カムラの実！？ そんな貴重なものどこで？』
『わかりません……あの、出雲とかいう人が持たせたものですから
……』

ハナダに戻る途中で、イーブイがカムラの実持っていることに気付いたんだ。

そう、察しのとおり、イーブイが食べたのはカムラの実。
ゲームでは、HPが4分の1以下になった時に発動する、素早さを一段階上げる道具。この世界で調べてみたところ、ある程度傷ついた時に食べると、一時的に素早くなれる食べ物、らしい。

仮にもあの出雲の力を借りるというのは、癪だ。
だが、使えるものは使っとかないとね。

「くっそ、もういっかい！」

バシャーン、と音がする。今のアクアテールは、狙いも定まってな

いし、威力も落ちている。

「く、くそっ……！」

「ギャラドス、落ちついて攻撃するのよ！」

「まったく、こらえていたとはいえ、痛かったことには変わらないんですよ、ギャラドスさん」

「……？」

「私、ちょっと怒りました。——マスター、いいですよね？」
もちろんだ。

「——イーブイ、『じたばた』」

「あはっ☆」

「も、もう……ダメ」

「あれ、もう戦闘不能ですか？」

「……………」

「……………」

ギャラドス、涙目で戦闘不能。

正直、圧巻……というか、絶対的、というか。

とにかくその威力は、カスミはもちろん、俺も絶句するほどだった。

つかアレは、『じたばた』じゃねえよ、『フルボッコ』っていうんだよ！

さ、さて、ここでイーブイの型について説明しておこう。

イーブイは、いわゆる『こらじた型』という戦い方をした。

『こらえる』は、瀕死になる攻撃を受けても体力を1だけ残して耐える技。そして、『じたばた』は体力が低ければ低いほど威力が高

くなる技。そして、イーブイの特性は『適応力』は、タイプ一致の技が2倍になる。数値にしてみれば、最高威力400。

さらに、カムラの実は素早さを上げる。イーブイは、実は努力値ぶりはしてないんだ。どれに進化するか分からんし、放置してた。だけど、ギャラドスと同じく努力値なんて振ってないだろうから、種族値で考えてみる。そうすると、ギャラドスの素早さ種族値は81、カムラの実を含めたイーブイの素早さ種族値はおよそ82。ギリギリ超える計算だったんだが……どうも、圧倒的な差がついてしまった。

「まっ……まだ、まだよ……スターミーがまだいるわ！　でてきてスターミー！」

「攻撃は強いようだけど、私の素早さなら先に攻撃できるもんね！」

「マスター、疲れたからお姉ちゃんと交代してください」

「あいよー」

「覚悟しなさい、ギャラドスの仇をつて、あれえええっ!？」

「……勝手に殺さないでよ」

勝手に驚いてる女の子は、ヒトデマンの双子みたいにそっくりな顔をしていた。あ、でも服は紫色だ。

さて、スターミーとギャラドスがコントしてる間にアブソルに交代。

「後一体、油断しないで頑張れよー」

「わかった」

「く、くっ……いいもん！　アブソルちゃっちゃと倒して、イーブイも倒すもんね！」

「イーブイにはゆびいっぽん触れさせない」

……アブソルは、若干お怒りのようだ。だが、熱くなつてはこの試合、絶対に勝てない。

「アブソルー、まずは……」

「わかつてる」

「ふ、ふん、アブソルなんてどうせ不意打ちしかできないんでしょ？ スターミー、まずはスペシャルアップで威力をあげるわよ！」

「わかった！ ……ん？」

「……………ぷっ……………くく」

アブソルが、ひたすら笑いをこらえるように、だけど確かに笑つてゐるって分かるようにこらえている。

「な、なによあんた！ なにがそんなおかしいの！？」

「……道具を使うの？ それに、威力を上げる道具？ 私のような耐久力の無いポケモンも道具なしじゃ倒せないってことでしょ？

どうなの？ それってどうなの？ そんなに自信ない？ 道具なしじゃ私を倒せないの？ 真っ直ぐ戦えないの？ 野生同士の戦いだったら、私には絶対勝てないってことでしょ？ 所詮トレーナーの力を借りてでしか力を発揮できないってことでしょ？ あ、でも道具を使つても私に勝てなかったら余計に恥ずかしいね。すごく恥ずかしくなるより、正々堂々戦つてみたら？ まあどうやっても私には勝てないだろうけど。ま、悪いけど早くポケモンセンターに行つてイーブイを治してあげたいから、さっさと勝っちゃうね」

「あああああっ！！　ウザっ！　ウザっ！　ウザあっ！！　なんかわかんないけど、なんだこの感情！？　すっごいこいつを殴りたい！　あああもう絶対こいつ倒す倒す殴るぶつとばす！」

「あ、ちょっとスターミー！　こんなやつ挑発に乗っちゃダメ！」
「わあ………すげえ挑発だな………」

正直、俺もうざかった。
挑発の間、口調も変わってなかったか？

さて、アブソルの得意技(?)の一つ、挑発。相手を補助技を使わせなくする技。……しかしこの技、この世界ではなんと、道具を使うことすら許さない技になってるんだ。
……つまり。

「うおおくらえハイドロポンっ——！」
「ってい」
「——ぷえっ」

不意打ちが、必ず当たるってことだね。

「負けたわ……はい、ブルーバッジ」

こうして、ジムリーダーカスミとの戦いは勝利に終わった。

「……大丈夫ですか。なんか顔色悪いですけど」

「そりゃそうよ。まったく、ポケモン一匹一匹は映えないポケモン達だけど、その全員が確固とした個性を持ってて、見事な戦略もある……。サイホーンはともかく、他の二匹のトリッキーな戦術は見たこと無かった。こんなこと初めてだわ」

「まあ、力押しだけがポケモンじゃないですしね」

「あ、それと！」

「な、なんですか？」

「あのアブソル、『危険なポケモン』のアブソルでしょ？」

「……………ええ」

そういえば、この人はアブソルを追ってたんだよね……。まさか、まだ処分する気にいるんじゃないや

「——助かったわ！ 私としても、野生のポケモンをむやみに処分するなんてこと避けたかったの。でも、リーグの命令には逆らえなかったからさ……。アンタが捕まえてくれて、ホントによかった！」

「え、あ、ああ……。いえいえ」

……よかった。まあ、この人がそんな人じゃないとは思ってたよ。

「アブソル、あの時はゴメンね」

「……………うん。そのおかげでシグに会えたから、もういいよ」

「そう、ならよかった。あなた、シグっていうのね。……覚えておくわ」

「は、はあ……」

「なんかね、また会える気がするのよ！ 大物になりそうな気がする！」

「さいですか……」

「そのときには、本気で戦いましょう、シグ！」
よくわかんないけど、ジムリーダーが大物になりそうとまでいうのだ。信じてみよう。

「さーて、アブソル。ポケモンセンターに戻るか！」
「うん」

二枚目のジムバッジ——俺も、それなりに強いトレーナーとしてみなされるってことだ。
これからは、もっと気を引き締めないとな。

カスミ。(後書き)

今回はちょっと戦略的になってみました。
といっても、基本的な戦法ですが…。

お昼寝スポット。

——何事も、相性がある。

例えば、悪タイプはエスパーに強いし、エスパーは格闘タイプに強い、格闘タイプは悪タイプに強い。

それはジャンケンのようなものかもしれない。だが、それは似て非なるものだ。

悪タイプだって格闘タイプに対応できる。エスパー技であるサイコキネシスだって覚えられる。

それに、耐久を鍛えれば格闘タイプの一撃に耐えられるし、先にさいみんじゅつ等で眠らせてしまえばこっちのものだ。

だから、ポケモンは奥深い。ただの力押しではないのだ。

「くっ……ミーの負けデース」

「「えっ!?!? もう!?!?」」

——ただ、もちろん相性も非常に重要なのだ。

「……まさか、オレンジバッジがこんなに簡単に手に入るとはな」
「自分に自信が無いわけじゃないけど、まさかここまで簡単に倒せるとは……」

「おつかれさま」「おつかれさまです」

「困ったことに、私全然疲れてないんだよねー……」

港町、クチバシティ。

クチバはオレンジ、夕焼けの色……というフレーズがあるが、確か

にこのポケモンジム前から見える夕焼けは、海も相まって綺麗だ。
……だが、そのポケモンジムでのバトルがあまりにアツサリだった
ので……あんまり爽やかな気分じゃない。

クチバのジムリーダー、マチスは、電気タイプの使い手。地面タイ
プを持つサイホーンにとって、最も相性のいい敵だ。
だが、相手はジムリーダー。サイホーンがいても一筋縄ではいかな
いだろう……と思っていた時期が私にもありました。

「まさか、サイホーンだけで完封できてしまうとは……」

「拍子抜けだよ、もー」

「私も戦いたかったです……」

「いやいや、あんな戦い方、二度もできるもんじゃないからな？」
イーブイはすっかり好戦的になったな……。ポケモントレーナーと
して喜ぶところなのか？

さて、次は……タマムシジム、か。草タイプのジムリーダーだ。一
転してサイホーンは不利だ。まあ、岩・地面タイプは相手によって
有利不利がはっきり分かれる癖のあるポケモンが多いからな。そこ
はしょうがない。

それと、ゲームだとカビゴンに塞がれている道。あそこは、「塞が
れている道」じゃなくて、「カビゴンのお昼寝スポット」という観
光スポットになっているらしい。カビゴンの寝ている姿を見たいが
ために、クチバシティに来る人もいるんだとか。

……正規ルートは、イワヤマトンネルだよな。あの、暗くて面倒な洞窟だ。
よし。

「みんな！ カビゴンのお昼寝スポットに行くぞ！」

「くー……すぴー……」

程なくして、カビゴンのお昼寝スポットについた。そこには、ちょっとぼっちゃりした女の子が気持ちよさそうに眠ってる。まあ、カビゴンだろう。みんなも（特にサイホーン）目を輝かせている。

「わぁ……可愛いねえ」

「おひるねしてる」

「ぐー……むにゃ……」

うん、確かに結構可愛い。……でも、観光スポットにもなってるんだから、ゲットできないよな。

「可愛いなあ……」

そんな中、うっとりした目でカビゴンを見つめる女性がいた。

紅い目、蒼髪、しなやかな肢体。それに、体のあちこちに入った黒いライン。

……きつとポケモンだ。

「可愛いなあ、あのカビゴン……。ああー、抱きしめたい！　ぎゅっと抱きしめて、この猛毒の爪で刺してあげたいっ！」

……大変だ、ポケモンな上に変人だこの人。変人ってか、危険思想だ。どうしよう。他の観光人に奇異の目で見られてるのに、まったく気にしてない。

「あ、あのー……」

「ん？　なにになに？　あなたもあのカビゴンが可愛くて見に来たの？」

「いやそうなんですけどね？　あの、猛毒の爪で刺すとか言うのと、追いだされますよ？」

「え？　ああ、あははー。やだなー比喻表現だよ！　私の中指にはね、猛毒の爪が仕込んであって、人間なんかだとかすり傷で致死量の毒が――」

「いいから！　説明はいいから！」

「「……」」

な、なんなんだこの人……。

この人が猛毒とかなんとかいうから、三人共怯えてるし。

まで、落ちつけ。青くて、黒いラインが入って、猛毒の爪をもつポケモン……。

あ。

「……あんた、ドクロッグか」

「おお、よく分かったね！ そのとおり、私はドクロッグ！ いやー、この地方だと中々知ってる人とめぐり合えなくてさ！」
まあ、シンオウ地方のポケモンだしな……。

「なんでドクロッグがこんなところにいるんだ？」

「あ、まあそう思うよね。いやー、私もよくわかんないんだよね。何かの飛行ポケモンに連れ去られたかと思ったら、アヤシゲな人たちに囲まれててさー。もう訳わかんないうちに逃げてきたんだよ」
「……怪しげな人たち？」

この人もロケット団に酷い目にあったのか？ それにしては、やけに軽いような。

「何か酷いこととかされなかったのか？」

「されかけたけど、逃げてきたよ？ 私は昔っから危険を察知するのが得意だからね！」

危険予知、か。ゲームだと、相手のポケモンが効果抜群の技を持っていると発動する特性なんだが、この世界だとさまざまな使い道がありそうだ。

「……でもさー、シンオウ地方まで戻る方法が分かんないし、私を知ってる人もいないし、困ってたところなんだよ」

「カビゴンをうっとり見入ってた人とは思えない言葉だな」

「いやー、まあついでだから観光しよっかなー、なんてずいぶんと余裕だな、おい。」

「そこでだっ!」

「うおお、な、なんだ?」

ドクロッグが、急にズイッと顔を寄せてきた。

「私と一緒に、この地方を見て回らない? 一人で観光するのは寂しいからさ」

「……は、はあ」

「見たところ、キミも観光中って感じだし……うんうん、これも何かの縁だね! これからよろしく!」

……おいおい。

「うえっ!? この人と一緒に旅するの?」

「まあ、そういうことになるねー。きみ、サイホーンでしょ? 少しの間よろしくね!」

「…………シグウ」

いや俺に助けを求められても。

「きみはー、アブソルかな? それにイーブイも、よろしくね!」

「……………」

「ちよっ、ガン無視!? 傷つくよそういうのお!」

テンション高いなこいつは!

……ていうか、

「なんでドクログはそんなにポケモンの名前を知ってるんだ？」
「ふふん、よくぞ聞いてくれたっ！ 私は、可愛いものが大好きなの！ ほら、ポケモンも可愛いでしょ？ 可愛いポケモンはあらかた網羅してるんだよ！」

……このテンションに慣れるには時間がかかりそうだ。
というか、あんたもポケモンだろうが。

「じゃ、決定だね！ よーしれっつらごー！」

「待て待て待て待て！ 勝手に決めるな！」

「えっ!？」

もうすでに了承を得た気になってたのか、すごく驚かれた。驚きたいのはこっちだよ。

「ええー……仲間に入れてくれないの？」

「いや、そういうわけじゃないけどさ。一応みんなの意見も聞こうぜ。んで、みんなはどうなんだ？」

「毒はやだ」「どくこわい」「なんか怖いです」

「う、うーん……毒が怖いかなぁ。まあそういうポケモンは珍しくないよね。でも大丈夫！ 毒ポケモンっていうのは、ちゃんと毒の制御ができてるものなの！ 出す出さないはもちろん、毒の殺傷力だって一滴で人間を殺せるようなものからお腹が痛くなる程度のもので変えられるんだから！ 大丈夫だよ、怖くないよーう！」

「いや毒とかじゃなくて、なんか怖いです」

「そこ強調しなくていいんじゃないイーブイちゃん!？」

お前容赦ねえな。いつからお前はそんな性格になっちゃったんだ。あれか、ギャラドスをフルボッコにした時か。俺が覚醒させちゃったのかコレ？

「ま、まあまあ。毒も安全だって言うし、いいんじゃないかみんな？」

「……シグ。私たちが反対しても、どうせ連れてく気でしょ」

「うっ」

「シグは、そういうせいかく」

「うぐっ……」

確かに、まあ、その通りだ。トレーナーとして、みんなの意見くらいきかなきゃとは思ったが、どっちみち協力する気でいた。アルセウスのトレーナーを探すにあたってシンオウだって行くと思うしな。何より、困ってるポケモンを見捨てるなんて俺のポケモントレーナーとしての魂が許さない。

「シグ——きみはシグっていうんだね。ありがと、シグはいい人だね!」

「いや、別に礼なんていいよ。困ってるポケモンを助けるのはトレーナーの義務だからな」

「ふーん? ……ふーん?」

「な、何だ?」

「……ふふ、近くで見るとシグも可愛いねえ」

一瞬ドキッとしてしまった自分が情けねえ。

そうだな、このリトルポケモントリオみたいに、みんながみんな子供なわけじゃない。俺は大人の女性が好みだから、今まで女の子と一緒に寝るなんて素敵なシチュエーションでも全くドキドキしなかったわけだ。だが……ぶっちゃけ、このドクロッグみたいなのはタイプなんだ（一番はウインディだがな！）。いかん、意識するな。意識したら顔が赤くなる！

「あはは、照れちゃってもー可愛いんだからシグは！」

「て、照れてねえよ別に！」

何？ この親戚のお姉さんと久しぶりに会ったみたいな感じ？ す
ごいデジャヴ。

っていかんいかん！ トレーナーは俺なのに、完全にドクロッグの
ペースだ！ ああもう頭を撫でるな！

「……シグう！ 何照れてんのさ！」

「だから照れてないって！」

「あらら、サイホーンはシグのことが好きなんだねー」

「——なっ、ななななななっ！ そ、そりゃ好きだけど、なんというか、その、好きだけど、そういうんじゃないって！」

「あっはは、いいねえ若いて！」

「お前は何歳のつもりだ！？」

「お姉ちゃんはいらないの？」

「……くちはわざわざいのもとだよ、イーブイ」
「それもそうだね」

……こうして。

これまた、一際濃いポケモンが仲間になった。

お昼寝スポット。(後書き)

ドクロッグは絶対擬人化したら可愛いと思います。
でも猛毒は勘弁してください。

シオンタウン。前編（前書き）

お待たせしました。遅めの更新です。

シオンタウン。前編

シオンタウン。

フジ老人が個人資産で建てたと言われているポケモンタワーは、この世界でも高くそびえている。

俺にとっては懐かしの町だ。

……トラウマ的な意味で。

ほら、シオンタウン通る時だけミュートにしてた奴は俺だけじゃないだろきつと。ゲームボーイでしか伝わらないよな、あの恐怖は……。ファイアレッドだかりーフグリーンだか知らんが、その程度じゃあの怖さは伝わらんって何歳だよ俺は。

「へえ、ここがシオンタウンかー」

ドクロッグが辺りを見回す。

「ドクロッグは、クチバの方から来たのか？」

「うん。最初の方は訳も分からずに走ってきたから、気づいたらクチバに居たって感じかなあ」

うーん、ロケット団のアジトまではわからないか……。まあ、わかったところで、今の俺にあいつ——出雲は、倒せないだろうけど。

「……ところでお前ら。いつまでそんな遠くにいるつもりだよ」

ドクロッグが仲間に入ってから、ずっとこの調子だ。ドクロッグから半径5 m以上近づこうとしない。

「だってえ……」

「だってじゃないだろ。これからしばらく旅する仲間なんだから、仲良くしろって」

「ほら、怖くないよってばー」

ドクロッグが両手を上げると、ささっ、とサイホンたちが隠れる。

「ううー、なんでだろ……」

「……お前両手を上げて怖くないって言ってるけどさ、そもそもあいつらはお前の指から出る毒を怖がってるんだからな？」

「ハッ、そうか！」

目からうろこといったように驚くドクロッグ。

「じゃあ頭に両手を回せば問題ないよね！」

ささっ。やっぱり隠れる。

「ふええー、何でえー？」

「俺に泣きつかれてもな……」

「うん……そうだね、挫けちゃいけない！ いつの日かあの子たちが振り向いてくれるまでガンバるよ私！」

「お前は恋でもしてんのか」

結局すぐに慣れてくれるというわけにはいかず、離れる半径が6mになったただだった。

落ち込んだドクロッグと並んで歩く。

「はあ……それにしても静かな町だね。人っ子ひとりいないよ」
「そうだな。まあ、シオンタウンは元々人も少ないし……」

あれ？ でも待てよ。

この地方最大のポケモンの墓があるんだ、静かなのは普通としても、もう少し人がいてもおかしくはない。ましてや今は、最も人が動く昼下がりだ。

いくらなんでも、人の姿が一切ないのは、おかしくないか？

「……感じる」

「アブソル？」

アブソルが、何かを感じ取ったようだった。わざわざポケモンの本能か？

「……自然ではなく、人為的にひきおこされた、異変、不調和」

そう言うとアブソルは、ポケモンタワーを指差した。

「ちょうど、あそこに念があつまってる」

「……念？」

よくわからんが、ポケモンタワーで何かが起こっているらしい。

「……だとしたら、放っておけないな。みんな、行こう」

「うえっ……あんな、見るからにゴーストタイプがうようよいそうな場所？」

あ、そういえばドクロッグは格闘タイプだからゴーストタイプは苦手か。これも危険予知のなせる業か。ほんと万能だな。

……って！

よく考えたら、うちのパーティみんなドクロッグに弱いじゃないか！ イーブイもアブソルもサイホーンもみんな格闘技に弱い！ だからあの三人はドクロッグに距離を置いているのか？

……まあ、それはおいとこう。今はポケモンタワーに行ってみないと。ポケモンタワーはここからでも見えるから、行ったことはなくとも迷いはしないだろう。

それにしても、寒いな。なんだろう、危険予知じゃないけど、かすかに嫌な感じがする。

歩いても、歩いても、人の姿は見えない。でも、気配はする。みんな家に隠れているんだ。ポケモンタワーにいる何かを怖がって。

……アブソルが言ってたな。人為的な異変だって。とすると、ポケモンタワー内部にいるのは……。

いろんなことを考えているうちに、ポケモンタワーについていた。外からでも、中にあるたくさんの墓が見える。そこからは、ただ一人、墓の前で祈っているのが見えた。

知っている顔だった。

「……ウインディ!？」

「っ! …………… ああ、誰かと思えば、山で会った子か。いつの間にか、ポケモントレーナーになっていたのか」

「まあ、成り行きで。それで、ウインディはここで何を？」

「ここに来る目的といったら一つだけ……と言いたいんだが、実はお参りだけではない」

「……?」

「上に、ロケット団がいるんだ」

「……そう、か。やっぱり」

だと思ったんだ。この地方で、あくどい事をするやつらといえばロケット団くらい。おのずと答えは出てくる。

それにしても、ウインディに怪我がないようであった。折れてた右腕も治ってるし、さすがポケモンだな。

「あれ？ でも、それとウインディがここにいることに何の関係が？」

「……私は、奴らを止めなければならない」

そういうと、おもむろにウインディは立ち上がった。

「だけど、結局私には止められなかった」

「……？」

どういうことだ？ ……ウインディだけでは、ロケット団に勝てなかったってことか？

「お前も、ロケット団を止めに来たのだろう？ ……頼んだよ」

「わ、わかった！」

ついオウム返しに答えてしまった……まあ、言われなくても止めに行くけどさ！

「よし、上にいくぞみんな！」

「……あんた、何しに行ってたの？」

「ドクロッグ？ ……どういう意味だ？」

「あーのーねーシグ。なんで悪い奴らを止めようとして、無傷で帰ってこれるのさ」

……あ、そういえば。

「……………」

「ふふっ。どこの誰さんだか知らないけど、なァーんか隠してる目をしてるよお？ 怪しいな」

「別に怪しいことはないよ。……君が思っているほどね」

「どうだかねー。どっちみち、私たちが素直につっこむには危険すぎると思うけど」

「お、おいドクロッグ。俺には何が何だかわからないんだが」

「簡単に言うと、ウインディがロケット団とグルかもしれないってことかな？」

「え、ええっ!？」

「……まあ、疑われるのも無理はない」

「お、おいおい、否定しろよ!」

無理はないって、違うなら違うって言えばいいだろ！

「私らがロケット団と一生懸命戦ってる間にこっそり後ろから……もしかして、ロケット団の目を盗んで何かくすねたり？」

「お、おいドクロッグ!」

「どっちみち!」

止めようとしたところを、手で遮られる。

「あんたがロケット団と戦ってなんかない、ってことは確定だね」
ビシッ、と逆転裁判よろしく指をさすドクロッグ。

「……あははは」

ウインディが、ここにきて初めて笑った。いやでも、正体がバレたから、とかそんな黒い笑みじゃなくて、普通に今のドクロッグのポーズが面白かったから笑った、って感じ。

「いや、間違っではないないよ。間違っではないない。確かに私はロケット団と戦ってなんかない」

「……およ？　なんか意外な反応だね」

「でも嘘はついてないよ。止めようとしたのも事実だ」

「それって、どういう意味だ？」

「怖かったんだ。ロケット団と……いや、あの出雲と対峙することが」

「なっ、出雲が来てるのか!？」

「ふみゅ？　なんか急に話についていけなくなっちゃったんだけど」

「え、出雲!？」 「……出雲？」 「っ、出雲、ですか」

「ええちよっ、何？　何でさっきまでタワーの中にすら入ってなかったのにさも当然のように会話の中に入り込んでるの？　いや君たちの声を久しぶりに聴けたのはうれしいけどさ」

「出雲……またあいつらと戦うことになるってことか」

「なんだ、お前たちもすでに出雲に会っていたのか？ それなのに
生きているなんて、運がいいな」

「ああ、まあ出雲とはいろいろあってな」

「おいてけぼりしょぼーん……」

あ、ついに体育座りしちゃったよ。出雲を連呼しすぎた。

「えーっと、簡単に言うと、出雲っていうのはロケット団……悪い
奴らの親玉だ。あいつは、サイホーンの母親、アブソルの主のトレ
ーナーで、イーブイに酷いことをした奴だ。どういうわけか、すご
い因縁がある」

「なるほどねえー。どーりでみんな食いつくわけだ。……それにし
ても、イーブイに酷いことするなんて、許せないね！ イーブイ一
体何されたの！？ キズモノにされたとか！？」

「き、キズ……もの？」

「おい、イーブイに変なこと吹き込むじゃねえ変態。それとその
妄想で生成されたよだれを隠せ変態。ド変態」

「ひどいいっ!？」

ドクログ涙目。……だってハアハアしながらそんな質問してたら
セクハラだろ。

「……コホン。まあ、だいたい状況は分かったと思う。出雲は最近、明らかな乱獲を始めている。どうやら今回は、ゴーストを乱獲をしているようだ。……出雲はどういうわけかポケモンの知識が豊富で、学会にも莫大な影響を及ぼしている。だから、ロケット団のボスも、そしてポケモンの乱獲すらも黙認されているんだ」

ゲームで培った知識を生かし、学会の権力を握っている、ってところか。

「世は味方になってなぐれない。だから出雲を止められるのは個人の力のみ。……とはいっても、私はこの様だ。一度やられたからといって、怖気づいて近づけない」

よく見ると、ウインディは震えていた。それほどまでに、出雲が怖いんだ。……俺も、その恐怖は身にしみているから、分かる。あのウインディでさえも恐れる理由が、分かる。

……待てよ？　山までウインディを吹っ飛ばしたのはドサイドン、って言ったよな。

「ひょっとしてウインディは、出雲のせいで山まで飛ばされたのか！？」

コクン、とウインディが頷く。

「奴のポケモン達は、尋常じゃなく強い。他とは明らかに実力が違うんだ。なんというか、出雲は、他と比べて群を抜いている……天才を見つける、天才のようだ」

そういえば、サイホーンの個体値も一瞬で見抜いたな。一体どうやったらあんなことが……？

「気をつけてくれ。そして、最も恐ろしいのは出雲自身……それを、くれぐれも頭に留めておいてくれ」

「分かった。それじゃ、いくぞみんな！」

やっぱりみんな乗り気ではないけど……でもその反面、今度こそ出雲を止めたいという気持ちもあるのだろう。だから、サイホーン、アブソル、イーブイの三人は、再び出雲と戦うことを決意できたんだ。

……でも、なんでドクログが来ないんだ？ ウインディの何か話してるようだけど、いったい何を？

「さっきの会話であんたが一個嘘ついたの発見したんだけどさ、言ってもいいかな？」

「……できることなら、言わないでほしいな。士気が下がったら出

雲との戦いにも支障を来す」

「またうまいこと口実つくっちゃって。ま、そのとおりだけどさ」

「おい、何話してるんだー？ 早く行くぞ！」

「はいはい」

何を話してるかは分からなかったが……今大事なのは、出雲をどうにかすることだよな。急がないと！

シオンタウン。中編

「……ゴースト、ゴースト、ゴーストオー。さっすがにもういねえかな」

「出雲様、ゴースだってゴーストに進化しますし、捕まえてみては？」

「進化させるなんてめんどくせえよ」

「お月見山じゃイシツブテ捕まえてたじゃないですか」

「ゴローン捕まえるためにわざわざチャンピオンロードまで行くとか、めんどくせえよ。あー、お月見山行くついでにハナダの洞窟でユンゲラーも捕まえときゃよかったな。……あ、よく考えたらゴリーキーもチャンピオンロードか。めんどくさいけど行った方が早いかなー」

「……そのポケモン達に、いったいどんな関係があるんですか」

「お前には関係無いよ」

「……いるな」「いるね」

お墓で身を隠しながら、様子をうかがう。ドクログは格闘タイプだし、いざという時に対応できるから出しているけど、他の三人は久しぶりにボールの中で待機してもらっている。三人を危険にさらすわけにはいかないし……それに、三人も本心では出雲に会いたくないだろうから。とはいっても、ボールの中から様子は見えるし、サイホーンあたりが興奮して出てこなきゃいいけど……。

「どうする？ 突っ込む？」

「馬鹿言うな、普通のトレーナーならまだしも、出雲はあいつ自身も規格外の強さだ。そんな無謀なことはできない」

「ふーん……まあ、確かに相手にとって不足なし、って感じかなあ」
「相手にとるな馬鹿者」

今もなおニヤニヤ笑っているが、相変わらずドクロッグの考えてることは分らない。今考えてみると、格闘・毒って、正反対なタイプだよな。格闘は、「陽」って感じるけど、毒は「陰」って感じがする。なるほどね、だからこんな清々しいくらいの変態が誕生するわけか。

「シグー、なんか失礼なこと考えてない？」

……しまった、顔に出ていたか。

っと、そんなことはどうでもいい。今はあいつらの様子を目を離さないようにはしなければ。

「お、お兄さんっ！ ゴーストお姉ちゃんたちを助けてっ！」

「ん な っ ……!？」 「おおっ ゴースちゃん可愛い！」

突然、背後から声がした。ゴースだ。身長は30cmくらいで、妖精みたいな感じ。

「……あ？ 誰かいるのか？ ポケモンタワーは今立ち入り禁止なんだがな」

「しまった……！」

「頑張ったねーゴースちゃん。もう大丈夫だよー、あのお兄さんが

なんとかしてくれるからねー」

「ホ、ホント……？」

馬鹿は放っておくとして、これはまずい状況だ。隙を突くつもりが、出雲に見つかってしまった。

「お前ら隠れる気ないのか、隠れてるつもりなのか、どっちなんだ？ 声が丸聞こえなんだがよ」

「……ひょっとして、ゴース、余計なことしちゃった？」

「いや、大丈夫だ。どうせ突っ込むつもりだったんだから。踏ん切りつけてくれて、ありがとな」

まあもちろん嘘だけどさ。ここでゴースを傷つけても、何も解決しないし。ここは、素直に姿を見せるのが得策かね。

「隠れる気なんてねえよ、ゴースト達を放せ！」

「おー、お月見山であつたあちら側の世界の住人か」

出雲は笑いながら言った。今のところ敵意は無い。まあ、出雲の様子だと俺と出雲以外には、人間世界の住人はいないのだろう。だから、わざわざ敵同士になることは無い、と。

だが何度も言うが、俺はポケモンを平気で傷つけるような奴と仲間になる気はない。

「出雲様、追ひ払いますか？」

「いや、いいよ。それに、お前ごときが敵う相手でもないし、下がってろ」

そう言うと、ロケット団の幹部っぽい人（この前アブソルに踵落としされた奴）は奥へ去っていった。

「……ゴースト、ウンゲラー、ゴローン、ゴリキー。通信交換で進化するポケモンが、この世界だどのように進化するのか、ってか？」

「ああ、まあ気付くよな。さっきべらべら独りでしゃべっちゃまったからなあ。そのとおりだ、この世界には通信交換って概念がないんでな。だけど、ゲンガーやフリーディン、ゴローニャカイリキーは、きっちり野生で出てくるんだよな」

「……お前も、ドサイドンを持ってるしな」

「いや、それはちと違う。あいつはプロテクターを持たせた瞬間に進化したんだ。同様に、エレキブル・ブーバーンとかもな。そんなわけで、道具が条件に入らない奴はどうなるか、という研究だ。ポケモンの研究の邪魔はしてくるな」

「乱獲する必要はどこにあるんだよ。それに、イーブイみたいに酷い目に遭わせるわけにはいかない！」

「はぁー……ホント、どうして同じ世界の住人なのに、ここまで考えが違うかね。お前は、お人よしというか、偽善者というか、潔さが無いというか」

「ポケモンの愛し方がお前とは違うんでね」

「ゴースちゃん、待ってよう！」

「だっ、だから、早くゴーストお姉ちゃんを助けてってば！ 私はいいからあ！ ……ひっ！？ ふ、服を脱がさないでえ！」

「うえへへ捕まえたっ！」

「んで、その愛した結果があのでフリーダムっぷりか」

「……………おいこらド変態っ！」

「ふおっ！？ い、いけないいけない、危うく本能のままにゴースちゃんを襲うところだった」

「お前帰れよう」

「俺ももう帰っていいのか？」

「ま、待て！ ゴースト達を放せ！」

くっそ、ドクロッグのせいで調子が狂う……。

「放せと言われてもな。確かに同じ世界の住人であるお前とは仲よくしていききたいが、何事にも限度がある。お月見山の時は結局イシツブテを数匹捕まえるだけで我慢してやったんだ。これ以上は譲れねえな」

「お前がポケモンに酷いことをするつもりなら、いくらでも邪魔してやるよ」

「……おいおい、力の差をわきまえろよ」

「とっくのとうにわきまえてるさ。懲りないけどね。——ほら、出番だドクロッグ！」

「あ、うんっ！」

「ドクロッグか、まーた厄介なポケモンを。……俺じゃちと危ないな、出て来い、グライオン！」

「あいよっ！」

出てきたのは、マントを羽織い、赤色スーツに青色のプロテクターを身に付けた男。目つきが悪い。

何故かドクロッグは、グライオンと聞いた瞬間嫌な顔をした。

「ドクロッグか……ちと嫌な思い出があるが、しょうがない」

「グライオンか……いろいろ恨みはあるけど、しょうがないか」

「え？」 「ん？」

お互いが、目を合わせて固まった。

「あぁっ！？ お前ロケット団アジトを脱走したドクロッグ！」

「あぁぁっ！ あんたは私を誘拐したグライオン！」

「え、えええええっ？」

「……………」

「おいお前！ お前が強引にアジトを脱走するから、俺の監督不行届ってことで叱られたんだからな！」

「ちょっとちょっと自分で誘拐した癖に何怒ってんのさ！ 私はあんたにシンオウからつれてかれたおかげで、家族も友達も可愛い子たちにも、全員会えないままなんだからね！」

「……ついでに観光させてくれなんて言ってた奴が、よく言うよ」

「それとこれとは別なのっ！」

「つうか、お前のおかげでポケモン研究科がズタボロなんだよ！」

何人もうちの研究員をフルボッコにしやがって！」

「正当防衛だよ！ どうせ無抵抗だったら捕まってたんだろうし！」

「ぐっ……まあ、いい。好都合と考えよう。ここで捕まえたら、俺の手柄だし」

「馬鹿野郎。俺が見つけたんだから、お前の手柄でも何でもねえよ」
出雲の言葉で、グライオンは少し黙る。

「……それにしてもお前は、俺に因縁のある奴らばかり集めてるのか？」

「それだけロケット団が悪事を働いているってことだろ」

「おいおい、ドサイドンやバンギラスはただ捕まえただけだし、当然の行為だろ」

「……『山海等のリーダー的ポケモンを私的理由で捕獲してはならない』、つてのは、この世界では先輩のお前が知らないはずはないだろ？」

「私的理由じゃない、ロケット団の意思だ」

「ロケット団は公的じゃねえよ。同人サークルみたいなもんだろ」

「……長いことロケット団のボスやってるけど、同人サークルに例えられたことは初めてだわ」

呆れたような顔されたが、まあ半分的を射ているんじゃないかな。

「とにかく、いけドクログ！ お前がただの変態じゃないってことを教えてやれ！」

「変態はもう確定しちゃったの！？」

「はあー……いけ、グライオン。強そうだから油断せずにな」

「何言ってるんだよ出雲！ 俺はシンオウからここまでドクロッグを運んできたんだぜ？ 倒すくらいいいとも簡単だったの！」

「あー、お前のそういう性格好きだぞ。だが、直した方がいいな……まあ、好きなようにやってくれ」

……？ 命令は出さないのか？

「というわけで、先制行くぜ！ 俺のアクロバットを見せてやるよ！」

途端に、グライオンが宙を舞った。……あれ、マントで飛んでるのか。ムササビみたいだな……っと、見てる場合じゃない。相手の言葉をもそのまま考えるなら、この攻撃はアクロバット。となると、こいつのばあい飛行ジュエル持ちの可能性が高いな。かわすことに専念した方がいい。

「ドクロッグ、敵の動きに注意してかわせ！」

「おっけー」

そう言っつて、ドクロッグは

動かなかった。

「えっ、ちょ、ドクロッグ？」

「はーい？」

呑気に返事してる場合じゃない……っつて！ もうグライオン間近に迫ってる！ やばい、このままじゃモロに激突——っ！

「てやっ」

するかと思ってたら、

「おあ——っ？」

パシッと受け止めて、流した。

グライオンが、床に叩きつけられる。

「……ドクログ、今のは？」

「対ポケモン用合気道、ってとこかな。飛行ポケモンにも対応できるようアレンジ。んでそのまま空手の応用で——」

そう言うと、ドクログは倒れたグライオンの近くに寄り、

「——せいっ!!」

思いっきり顔面を殴打。

……悲鳴を上げる間も与えない。

「中高一本拳♪」

えげつねえ。しかもお前の中指、猛毒の爪だし。硬いし。グライオン、ご愁傷様です。

「だから言ったらグライオン。気をつけろって。お前はもう少し油断する癖を直しな。……って、聞いてないか。戻れ、グライオン」
グライオンが赤い光に包まれ、ボールの中に入った。

「それにしても、何でドクログは連れて来られたときに抵抗しなかったんだよ？」

「いやー、何か、空を飛ぶ感覚が楽しくてさ」
本当に大丈夫かいっつ。

「……それにしても、参ったな。格闘ポケモンが格闘技使うとは」

「いやー、知り合いに格闘技の達人がいてさー」

「おまけに、毒タイプ。マンツーマンにおいて人間が最も戦いにくいポケモンだな。まあ、あくまで擬人化においてだけど」

「まあ、その気になればほんの一滴でも人殺せるからね。危ないから出さないけどッー！」

「お、おいドクログ！」

ドクログが、出雲に急接近した。そして、そのまま出雲の腹に向かって、突きの姿勢を見せた。……毒づきか。が、出雲はそれを手で掴み、そのまま手刀で持った手を砕こうとするが、その前にドクログが強引に手を振りほどいた。

出雲が顔へ追撃を加えるが、それを手で受け流し、反撃。しかしその隙に足をすくわれ、バランスを崩した。彼女は当然のように一瞬で立ち上がり、お互いに間合いを取る。

……何の漫画だよこれは。

というか、格闘タイプのドクログ相手に互角の人間って、一体ど

んなスペックしてんだ。

「ちょっとちよつと！ 躊躇なく女の子の顔に突き入れようとする
つて、どういう神経してんのさ！」

「戦場で男も女も関係ないだろう？」

「……………ふーん」

その言葉を聞いた瞬間、ドクロッグの目が細まった。でも、不機嫌
とかではなく、むしろすごく上機嫌そうだ。ニヤニヤと笑って、ゴ
ロゴロ喉を鳴らしている。

……猫かよ。

「……………んふふっ」

「なんだ？ かかってこないのか？ それならポケモン出しちまう
ぞ？」

「ククッ……………クククッ」

出雲の質問にも答えず、ドクロッグは笑い続ける。

ところで、これ、多分「悪だくみ」だよな……………？ 一体、何する気
なんだ？

それと、気のせいかドクロッグの笑い声と、中指の猛毒の爪が、シ
ンクロして脈打ってるような……………。

「……………まさか」

「ばっくだーんっ!!」

猛毒の爪から生成された毒々しい紫色の塊が、出雲へと飛んでいった。

シオンタウン。中編（後書き）

ポケモンリトルリオ空気。

一人称だと全員を目だたせるのはちょっときついな……。

シオンタウン。後編

ヘドロばくだん。

その名のとおり、ヘドロを爆弾のように投げつける技。

ドクロッグにとってはタイプ一致技。そして、先程までしていたのは恐らく悪だくみ。特殊攻撃を2段階上げる技だ。そして放った一撃、その威力は凄まじいものだろう。

だが、この前のマチス戦を思い出してほしい。

無効化されたら、それまでなのだ。

「――っだぁー！！ 俺を盾に使うんじゃないっての！」

「そういうなよ。どうせ効かないだろ？ ボスゴドラ」

「効かなくても、毒を全身に浴びていい気分になる訳ねえだろ！」

「……あるえ？」

出雲がとっさに出したポケモンは、重そうな鎧に身を包んだ男、ボスゴドラ。岩・鋼タイプのポケモン。

鋼は、毒を無効化する。……つまり、どれだけ強い一撃でも、意味がないのだ。まあ、精神面とか衛生面は置いといて。

「……それにしても、あんな人間が受けたら死ぬような一撃、躊躇

なく撃つか？」

「戦場では男も女も関係無いのに、人間とポケモンは関係あるの？」

「それが言いたかっただけかよ」

出雲は苦笑いだ。まあ、とっさの判断が無ければ死んでたかもしれないんだから、そりゃそうか。

しかし、ボスゴドラといえば、格闘と地面タイプにとっても弱いことで有名だ。格闘タイプを持つドクロッグ相手に出すと言うのは、一体どういうことだ……？

「疑問だろう？ だけどな、全てがゲームのシステム通りとは思わないことだ」

「……？」

「……と、とにかく、何で効かなかったのかは分からないけどもう一回！」

「馬鹿、鋼タイプを相手にしたこと無いのか！？ 鋼タイプに毒は効かない、格闘技で攻めろ！」

「わ、分かった！」

ドクロッグが再び動き出す。

……くそ、なんとか隙を見てゴースト達を逃がしてやれないかな。ゴースト達が入ってると思われる袋は、幹部が持っている。しかし、

いるのは出雲より奥の方で、出雲を抜かない限りには手を出すことができない。かといって、ゴースがこっそり近づいていって、気付かない出雲でもないだろう。ゴースには頼れない。とにかく、ボスゴドラを倒した瞬間の隙を狙うしか――

「きゃあっ!?!」

……え？

何かが床に叩きつけられる音が辺りに響く。しかし、それはボスゴドラのような鎧の音ではなく、生身の体の音だった。

「ドクログ!?!」

「……つく」

見れば、ドクログはボスゴドラに投げ飛ばされたようだった。

……しまった、考え事をしている場合なんかじゃ、なかったんだ。

今は、このポケモンバトルから目を放すべきではなかった――!

「ドクログ、大丈夫か!?!」

「……んー、あー、大丈夫。なんとかね」

手をひらひらさせて、元気なさげにドクログが答える。

「なアーんだ、割と大したことないじゃねえか。警戒して損したつての」

「っ……そんな馬鹿な！」

「だから言ったら、全てがゲームのシステム通りにはいかねえって。あくまでこれは、リアルなゲームなわけじゃなく、現実^{リアル}なんだよ。ボスゴドラは、重い鎧を纏ったポケモン。そりゃ、格闘ポケモンは頑丈だから鋼も撃ち抜くが、反対に鋼だって、生身の体には大きな衝撃を与える。鋼タイプは、ポケモン世界じゃ優遇されてるな」

……鋼タイプに毒は効かないのに、か。本当に優遇されてるよ。

「……まったく、まさか手で受け止められて投げ飛ばされるとは思ってたよ」

「スマン、俺がいながら……」

「いや、私も少し油断してた」

手をぶらぶらと動かすドクロッグ。屈伸とか、伸脚とか、準備運動みたいなものを始める。

「……本気でいかないなあ。殺す気でいっても、死なないよね？」

「舐めてんのか？ 殺す気でいっても傷一つ与えられないっての」

「さあ、どうかなあ——」

そして、彼女が明らかにスピードを上げた。相手と戦うために近づくのではなく、まるで突進するようなスピード。

——インファイトか！

「ボスゴドラ、受けるな、攻めろ！」

「言われなくてもそうするっての！」

「ああもう、てのてのうるさい！」

「んなどうでもいいことに気を散らすな！ 最大限神経使って、何とか倒してくれ！」

そして、ボスゴドラとドクロッグがぶつかり合った。

ボスゴドラは、大柄で力もある。が、鈍い。反対に、ドクロッグは素早いが、力はボスゴドラに劣る。

よってドクロッグは素早さで翻弄できるが……一発でも当たったら分からない。俺には、試合の流れをそこまで見定める技術はないから、再びドクロッグを見守るだけ、ということになる。

反対に、

「ボスゴドラ、前に出て攻めろ！」 「おうっ！」

「ボスゴドラ、後ろだ！」 「うおっ、危ねっ！」

「違う、翻弄されたらおしまいだ！ 一発当てたらこっちのものだ、落ちついて当てに行け！」

「うう……やり辛いなあ」

出雲は、さすがポケモン世界の先輩、悔しいがアドバイスは的確だ。ポケモン同士一対一での対決なら、間違いなくドクロッグが勝っているだろう。今までも、出雲のアドバイスが無ければ勝っていたところがいくつもあった。

……先程から、モンスターボールが微かに揺れる。「私たちを使え」と言いたいのだろうか。だけど、それは無理だ。確かに今、ドクロッグは不利な状況だが……はつきり言ってしまうえば、ドクロッグはこの三人より遥かに強い。今ここで出しても、状況は変わらない……いや、更に不利になるだろう。ドクロッグは、この三人に弱いし、多分身を呈してでも守ってしまうだろう。まだ、だめだ。

ドクロッグが、ボスゴドラを倒した瞬間……その瞬間に、一気に三人で突撃すれば、抜けられる。狙うのは、その瞬間しかないのだ。

「ドクロッグ……」

やはり、今頼れるのはドクロッグのみ。

「――そらあっ!!」

「あっぐ……!!?」

「ドクロッグ!」

しかし、遂にボスゴドラの繰り出した掌打が、ドクロッグにヒットしてしまった。そのまま、床へと叩きつけられる。しかも今度は、投げ飛ばされたんじゃないく直接の殴打で叩きつけられたんだ、そのダメージはさっきよりも明らかに重いはず……!!

「ドクロッグ、大丈夫か!」

——ドクログ、大丈夫か!?

シグの声が聞こえる。

……返事はできそうにないなあ。

まったく、どうしてこんなことになったんだろう。可愛い子たちと一緒に観光とかしてみたかっただけなんだけど。それなのに、成り行きでポケモンタワーなんて霊園に来るわ、なんか、大ピンチだわ、もー、散々。

だけど、ゴースちゃんも助けたいし、ゴーストちゃんたちも助けてあげたいしな……かといって、あの子たちに頼る訳にはいかない、というか、ぶっちゃけこの人相手に何もできないだろうしなー。っと、いけない。倒れたままだ。早く起き上がらなくちゃ——

……………。

起き上がれない。

意識はある。

起き上がれない。

……んー。

これは、まずいんでない？

「……意識はあるようだな。一応、もっかい叩きこんどくかー」

ああ、やばい。ここで私が戦闘不能になったら、全滅確定だ。そして、まんまとゴーストちゃんたちは連れてかれて、ついでに私たちも連れてかれて……シグはどうなっちゃうんだろうなー。そのまま身ぐるみはがされてポイ、か、それとも殺されちゃうか……でも、出雲って奴の口ぶりからして、それはないかな。

でも、サイホーン、イーブイ、アブソルは……どうなっちゃうんだろう。私も、あの人たちに怪しいことされかけたし、きつとみんな酷いことされちゃうのかな。

あの子たちだけでも守ってあげたいけど……今の私には、ムリ。

長年あの人に鍛えられてきたけど、まだまだ未熟だったってことか。

シグ、期待にこたえられなくて、ごめんね

「ドクログ、頑張れえーッ！」

――。

「あ？　頑張れって、こいつもう動かないっての」

「諦めないでくれ！　頼む、もう少し、もう少し頑張ってくれ！」

あはは、シグ。

私、倒れてるのに、もっと頑張れなんて無茶言わないでよ。

「お前なら、勝てるはずだ！　ボスゴドラより強いんだから！」

そうかもしれない。

でも、出雲がいるから、勝てないよ。あいつのアドバイスは、本当に的確だもん。

「俺も、もっとトレーナーとして強くなるから、約束するから！
その為にも、今は……今は、勝ってくれ！　お願いだ、立ってくれ
！」

……そうだよ、ここで負けたら、みんなバラバラだ。
だからって、何も私にそこまで頼らなくてもいいじゃない？ 私だ
って、女の子なんだから。頼りたいんだよ。

……まあ、今後のシグに期待ってことで。

だから、しょうがない、もう少しだけ頑張ってみるよ。

ガシッ、と、音がした。

ボスゴドラの攻撃がヒットする音ではなく、

その攻撃が、受け止められる音だ。

「なっ……お前、どこにそんな力残ってたんだ!？」

「残ってたんじゃないくて、もらったんだよ。シグにね」

ドクログが、ボスゴドラの攻撃を受け止めた音――！
信じてたぞ、ドクログ！

そのまま攻撃を振り払い、立ち上がる。

「まったく、か弱い乙女に頼り切りなんて、男として失格だよー？」
そしてそんな軽口を言うのだから、勝てない。

「そうだな、今度はお前を守るように頑張るよ」
だから、今は勝ってくれ、ドクログ。

「ぐっ……ざけんなっ、応援だけで、そんな強くなれる訳ないだろ
！　なんかしかけたなお前！」

「応援は馬鹿に出来ないぞ。心理学的にも生理学的にもな」

「なんだそのしんりがくせいがくって……っが!？」

ガキィ!!　という音と共にボスゴドラの鎧が大きく軋んだ。

「もう少しで鎧ごとぶち破れるかなあ？」

「バツカ、これは皮膚だつての!!」

「あ、そうなんだ」

皮膚なんだ……。

「ふむ、それにつけてもこれは一転不利だな。……ルールに則らないと負けな気がして自重していたんだが、これは仕方がない。残りの奴らも出すか」

なっ!?! そんな卑怯な――

……そうか、これはあくまで現実だ。ポケモンバトルがいつでも平等とは限らない。出雲はもともと人間世界にいたから、ゲームのルールをある程度リスペクトしてただけなんだ。

くそ、ドクロッグはボスゴドラの相手で精いっぱい、残りの三人では到底出雲のメンバーに敵わない。

万事休すか……!?!?

「いけ、ドサイドン――」

出雲がモンスターボールを取り出したとき、

突如として現れた炎球が出雲の手に襲いかかった。

「なっ!?!」

さすがの出雲でも驚いて、モンスターボールを手放してしまった。中のポケモンも、まだ出てくる気配がない。

「二対一の対決に水を差すとは無粋じゃないか、出雲」

「……ウインディか。余計なことを」

え？

ウインディ、来てくれたのか！？

「お前が私に説いてくれた『武士道精神』はどこへやら、だな。お前の言うところ、随分と姑息になったものだ」

「人間として強くなった、といってほしいね」

「ふん、どこが」

「強者とは戦いの場に最後まで立っていた者のこと、という言葉もある」

「お前は戦いの場になぞいない。人の上に威張って立っているだけだろう？」

「うまいこと言うじゃないか」

会話の間でも、構わず炎球の追撃が入る。出雲も一応は人間のように、当たるとやばいのか必要最小限の動きで避けながら会話している。

さっきからとりとめのない会話を淡々と話しているけど……やっぱり、二人は知り合いなのか？

って、そんなこと考えてる場合じゃない。
……これはチャンス、じゃないか？

「シグ、といったか。出雲は私に任せろ」

そう言った瞬間、ウインディが消えた。

そして、いつの間にか出雲に突きを繰り出していた。出雲が、それを腕で受け止めている。

「ぐっ……あのな、ウインディ。いくら鍛えている俺でも、人間だ。

お前の神速はそれなりにきついんだぞ」

「大丈夫だ、私の神速を受け止めている時点でお前はもう人間の枠を超えている」

「褒められてんだか、けなされてんだか」

神速……そうか、神速か！ 神速は、ゲームでは先制攻撃、その名の通りものすごい速さで攻撃する技だ。この世界では、スピードも相まってものすごい威力なのだろう。だが、その分大技で、ある程度の間合いが必要、ってところか。

なんにしても、今がチャンスだ！

「よっしゃあ出て来い三人共おっ！」

「はい待ってましたあ！」

「きゅうくつだった」「やっと出れましたー」

「お前ら状況は掴めてるよな！ アブソルはあの奥にいるロケット団を迎撃して、ゴースト達を解放してくれ！ イーブイは落ちたモンスターボールからポケモンが出て来れないように抑えて、サイホーンはドクロッグに加勢！」

「はい！」

まず、イーブイがモンスターボールを抑えた。これで、中のポケモンは出てくるができない。

そして、

「ちよっ、また脳天直撃踵落としとか勘弁——」

「ごめんね」

アブソルのえげつない踵落としてロケット団幹部（っぽい奴）を沈めた。

「ようやく私の番だね、ドクログそこどいて！」

「やーだよー」

「よし、突進準備……ってええ！？」

「だって、私一人で倒さなきゃ、こいつに悪い気がしてさ」

「ぐう……舐めやがって、絶対倒してやる！」

「出雲の助言なしに？」

「うっ」

確かに、その通りだ。出雲がウインディと格闘している今、出雲は助言を出すことができない。

そして、ボスゴドラは彼の的確すぎる助言で今まで有利な状況にあったというだけで、本当の一对一であれば、ドクログの方が強い。

「だ、黙れ！ お前は今手負いだ、俺が負けるわけないっての！」

「ふーん？ あらそう」

出雲の助言がない今、ボスゴドラは焦っている。本来の実力すら出し切れていない。今も、大ぶりの攻撃を余裕でドクログにかわされた。

「ぐっ……」

「どうしたの？ 負けるわけないんだよね？」

「う、うるさい！」

「……まったく、相手の力量も自分の力量もわきまえないでさあ？」

ドクログが、避けながらもゆっくりと力を溜め始めているのが、俺でも分かる。いろいろされたし、その恨みもこもっているんだろう、少しずつ声もドスの聞いた声になって来ている。でも、興奮状態のボスゴドラには気付かれていない。

「――相手選べよ、青二才」

顎を撃ち、脳を揺らす、渾身のアッパー。
ボスゴドラは2、3mほどまで浮かび上がり、そして落ちた。

動かない。

ドクロッグの勝利、ってわけだ。

「みんな、できて」

それと同時に、アブソルがゴースト達を解放した。

「戻れボスゴドラ。……あー、くそ、またかよ。畜生、また何匹かゴースト捕まえて――」

「それはできねえよ」

「あ？ ……ああ、そういうこと」

残念だが、もうゴースト達を捕まえることはできない。

お月見山のポケモン達は、解放した途端に逃げ出したから、やはり何匹かは捕まってしまったんだろう。

だが、ゴースト達は違う。

全員で固まって、出雲を反撃せんと迫って来ているのだ。

「お前の負けだな、出雲。分かっていると思うが、隙を見てモンスターボールを出せるほど、私は甘くないぞ」

「……ウインディよお。お前、何でこいつらの味方をするんだ？」

「敵の敵は味方だ」

「利害が一致するとは限らんよ」

「利も害も無いさ。お互い、ポケモンを助けただけなのだから」

淡々と、会話を続ける二人、出雲とウインディ。

「ふん、まあいいさ。ここでゴースト達に殺されちゃ、それこそ敵わない。退散させてもらう」

そう言っ、出雲はゆっくりと階段を下って行っ。目覚めた幹部も、慌ててそれについていく。

……これからも、こいつは何度も悪事を働くのだろう。ここで捕まえた方がいいのかもしれない。

でも、やっぱり駄目だ。こいつを捕まえることはできない。ロケット団を、出雲を止めたいと言っているウインディさえも、出雲が去っていくのをただ見ているだけというのが、そう考えさせた。

そして、

後に残ったのは、ゴースト、ゴースの嬉々とした歓声だけだった。

シオンタウン。後編（後書き）

やっとりトルポケモントリオが出てきた…
シオンタウン編はだいたいがドクロッグ回でしたね。ちよつと目立ち過ぎてた感もあります。

目指せタマムシ。(前書き)

しばらく投稿しない内に何件もお気に入り登録が減りましたが、私はまだ生きております

目指せタマムシ。

「大丈夫だったみたいだな。間に合ってよかった」

「ありがとうウィンディ。おかげで、みんな助かったよ」

ウィンディがいなかったら、今頃どうなっていたか分からない。

「出雲が怖かったんだろう？ それなのに来てくれて、本当にありがとうな」

「えっ？ あ、ああいや……こんな子供たちを見捨てるのは、あまりに酷だと思ってな。その、勇気を振り絞って」
？

ウィンディが、なぜか少し戸惑った。

そして、なぜか後ろでドクロググがニヤニヤと笑っている。

「……自分で言った嘘を忘れるなよー」

「ん？ ドクロググ何か言ったか？」

聞き取れなくて聞き返したのだが、ドクロググはそれ以上何も言わなかった。

「それにしても、出雲とウィンディは、一体どういう関係なんだ？」

「……ふむ、簡単に言えば、旧友だろうか」

「旧友？ 出雲のポケモンだった、とかじゃなくて？」

「えっ」

「えっ」

そんな心底意外そうな顔されても。普通はそう考えるだろ。

「いやいや、あり得んあり得ん。あいつなんかのポケモンなど」

「あ、そうすか……」

鼻で笑うウィンディ。うーん、そうだと思ったんだがな。でもそう

だとしたら、まだチャンスはあるってことか。

「俺なんかのポケモンになるってのは、どうだ？」

「……………」

そんな提案を、出してみる。ウインディが少し黙った。そして、じっとこちらを見つめた。

「……ふむ」

なんだか照れくさくなるが、ウインディのことだし、何か見定めているのだから黙っている。

「……ふーむ」

「ど、どうだ？」

「うむ、血色がいいな。いたって健康だ」

……………。

「……突っ込んでくれ」

「すまん」

こいつは真顔で冗談を言うから反応しづらいんだよ……。

「冗談はさておき、それはやめておくよ。一匹狼というわけではないが、人間の足に合わせてはいささか遅すぎる。まあ、私の足に合わせてくれるというなら別だが」

「いつもは、どれくらいの速さなんだ？ まさか神速のスピードをいつも続けてるわけじゃないだろ」

「ああ、そうだな。いつものスピードとなると……だいたい時速50kmくらいだろうか」

「無理」

平均の速さが人間の限界超えてんじゃないか。

「なら、私が運んであげるよ！ 私ならそれくらい出せるし！」

「勘弁してください」

サイホンに乗って旅なんてしたら、中身が全部出る。それにお前、まだ曲がるの苦手だろ。

「はは、まあ無茶するな。私は、私だけでロケット団を追う。お前たちは、お前たちの旅を続けてくれ」

「……残念だが、そうだな。そうするよ」

俺の目的は、ポケモンリーグを目指しつつ元の世界へ帰ることだしな。

待てよ？

今更、本当に今更だけど。

こいつらは、俺を元の世界へ帰る手伝いをしてるんだよな。

俺と別れるために、俺と旅してるわけなんだよな。

……今まで明言してないから、みんなは知らないだろうけどさ。
言ったほうがいいのか、言わないほうがいいのか。

でも、俺がそれを言ったら、こいつらはどうするんだ？
それでも俺の手伝いをしてくれるんだろうか？

……あーくそっ、俺はこいつらに信じられていながら、こいつらを
信じることができないのか。
自己嫌悪って、まさにこのことだな。

「シグ、どったの？」

「あー、いやなんでもない。それじゃ、また縁があったら会おうぜ、
ワインディ」

「ああ。無事でな」

「そんじゃー、行こうか！」

目指すは、タムムシシティ。

とりあえず、ポケモンリーグへ行くための旅。

そういうことで、

「サイホーン！」

「は、はいっ！」

「アブソル！」

「……はい？」

「イーブイ！」

「は、はい」

「ドクロッグ！」

「はい！」

全員の名前を、確かめるように呼んだ。
一緒にいることを、確かめたくて。

馬鹿だよな。騙してるのは俺のほうなのに。

「出発だ！ 目指すはタمامシシティ！」

さ、何事も切り替えが大事だ。
次に行く街について考えるか！
タمامシシティは、デパートもあるし都会といってもいいだろうな。
きっと他のポケモン達もたくさんいるんだろう。しばらく滞在してもいい気がする。

お金？

それは、3つのジムリーダーを制覇したことで結構貯まったよ。
現在、ざっと二十万くらいかな。

「オイゴルア！　そのてめえ、金よこせや！」

「……はい？」

突然そんな叫び声が聞こえてきた。ブロロロロとうるさい改造バイクのエンジン音も聞こえる。

……お金の話をした瞬間にこれかよ。

「はい？　じゃねえだろ！　金よこせって言ってんだよ！」

バイクに乗って現れたのは、いかにも世紀末な髪型モヒカンをした4、5人の男。

どう見ても暴走族です。

つうか、本当にこんな格好してんのかよ、暴走族。

「あゝ……いや、持ってますん」

「嘘つけゴルア！　ポケットから札見えてんだよ！」

あ、本当だ。

ふゝむ、そろそろ財布買わなきゃな……。

「シグー、どうする？　めんどくさいし、のしとく？」

ドクロググがニヤニヤしながら聞いてくる。……あれだけ戦ったのに、まだ暴れるつもりかよ。

「いや、いいよ。大勢を相手にするんじゃ、時間かかるし」

「ふむ？　じゃあ、どうするの？」

「いけ、ベトベター！」

「ドガースもでてこい！」

「……おいおい」

話しあってる間に、勝手に暴走族たちがポケモンを出してきた。一人対大勢とはさすが暴走族、ルール無用だな。ちなみに、ベトベターは紫色の布を羽織った紫色の髪をした紫色ジト目の女の子で、ドガースは紫色の服を着て紫色の髪で紫色の目をした背の小さい女の子。

うう……目に悪い色だなあ。

ま、そんなことはさておき。

「しょうがない、サイホーン出番だ！」

「あ、私？ 分かった！」

「ベトベター、ヘドロばくだん！」

「……はい」

「サイホーン——地震だっ！」

「わっふうーいっ！」

「……あ？ 何だこの揺れ」

サイホーンも、さぼっていたわけではない。確実に、強くなっている。だいぶ地震の精度も上がってきたみたいだな。1m以上の

誤差はほとんどなくなってきた。

まあ、少しポケモンかじってる人なら分かると思うが……

ベトベター——毒タイプは、地震、すなわち地面タイプの技に弱い。
そのころは、

「いだあっ！」

「べ、ベトベター!？」

ベトベター、全員戦闘不能。

んでもってだ。

この世界でのいいところは、

ルールを無視するようなトレーナーも、問答無用で懲らしめられる
ってこと。

「ぐえっ!？」 「あだだだっ！」

「ちょ、ちょっ……ますたー、しっかり！」

ベトベターは全員戦闘不能だが、ドガス組は転げまわる暴走族を
必死に追っている。

あ、そういえばドガスは特性が浮遊だから地面タイプの技は効か
ないんだよな。

……まあ、この調子なら逃げても大丈夫だろう。

「よし、サイホーン、地震やめ！ みんな、今の内に逃げるぞー！」

「……ふう。走ってる内に、タマムシまでついたみたいだな」
「え、もう次の街？」

くさむらの向こうには、いくつもの建物が顔を出していた。
予想していたが、やはりカントー地方の中でもタمامシシティは都会らしい。

「タمامシはどうやら都会みたいだ。ジム戦の前に、いろいろ見物してまわってみるか？」

「おー、いいね！」

「でもマスター、お金は？」

「心配ないよ。お前らには結構助けられてるし、ここらへんで羽目外そうぜ」

「……なにもやることない」

「ま、まあいろいろ見て回ってみようぜ。ひよっとしたら面白いものがあるかもしれないし」

「わかった」

みんなの賛成を得られたことだし、それじゃ都会見学といこうかね。

え、ドクロググ？

「おーい、みんなあ！ 早く行こうよ！ 見て見てアレめっちゃ高い！ 何メートルあるんだろー？」

ホッホーウ、とご機嫌な声をあげて、既に行く気満々です。

「んにゃータمامシにはどんな可愛い子がいるんだろー……はっ、

そこにいるのはニヨロモちゃん!? おー仲間仲間! カエルカエル! ケーロケロケロ!

「わっ、私はまだカエルじゃないです!」

「いづれなるでしょう? 同じ同じ!」

……テンション高いな、酒でも飲んでのかアイツは。ほら、ニヨロモ困ってるじゃん。

「もう、なんなんですかあなた! もう、行っていていいですか?」

「うえゝ待ってよう!」

「ちよっと、追いかけて来ないでくださいよ! 大丈夫ですか!? 酔ってるんじゃないですか!?」

「うえへへ待て——いたっ」

もう完全にスイッチ入ってたので、ごつんと頭を叩いてやる。

「……うちのカエルがごめんな」

「い、いえいえ……じゃあ、私、もう行きますね」

そそくさとニヨロモは川の方へ行ってしまった。

……タマムシに行って大丈夫かなあ、こいつ。都会であんなことしたら、間違いなく裁判モノだよ。

……はあ。前途多難だ。

「んゝ? どしたのシグ、溜息なんてついて! 元気出してケロツ

☆

「うぜえ」

お前は元気ハツラツだな。つか、ケロツ☆ってなんだよオイ。アイドル気取りか。

……っていうか、みんなドン引きしてっけど。

「さて、ダッシュで行こうシグ。あいつが追いつけないくらいダッシュで」

「まってサイホンちゃん」

「……早くいこう、シグ。カエルはほっといて」

「カエルはひどいよアブソルちゃん」

「そうですね。カエルはその川で泳いでてください」

「容赦ないねイーブイちゃん」

イーブイがどんどんDSになっていく。

「ま、まあまあ……お前ら、仲良くな。ドクログも落ちつけ」

「はい……いやー、あんな高い建物初めて見てさ……。ほら私、

田舎、むしろ山育ちだからさ……。あの、まさに井の中の蛙っていう

か……」

「カエルのくせにややこしい例え方すんな」

「ま、まあ、ちょっとはしゃぎすぎたね。ちょっと自重するよ！

さあみんな、行こう！」

まだ街にもついてないのに、不思議な奴だ。

……はあ。

ほんと、前途多難だな。本気で心配になってきた。

大丈夫なのか、タマムシ観光。

玉虫や 毒の蛙の 舌鼓

シ
グ

目指せタマムシ。(後書き)

イーブイよ、何故どんどんサドになっていくんだ…

ちなみに最後の俳句もどきは10秒で考えました。
季語2つありますし、微妙ですけど

カフェ。

「――うわぁー！ 広いねー！」

「おおきい」

「うわー、みんな高い」

都市を間近で見て、みんなも徐々に騒ぎ始めた。

それにしても、タマムシって結構な大都市だったんだな。正直俺も、都市部の方とかあまり行ったことないしよく分かんないけど。

「あんまり見上げるなよ？ 田舎者だと思われるし」

「私、田舎者以前に山育ちだよ？」

「わたしも」

「私も山育ちだねえ」

「そういう問題じゃねえ」

ホント、大丈夫かなあこいつら。

「ねえねえ、次はどこ行くの？」

「んー、そうだな。そうだ、カフェで休憩するか？」

「うん、そうするー！」

そんな中で、ポケモンと人間のカップルみたいな二人が前を通った。

……うーん、赤い髪に耳、ふわふわしっぱ……あ、ブースターか。パーカーを着て、すっごい楽しそうに、隣のイケメンと並んで歩いている。

そして、それをウチのポケモンたちがぽかんと見ている。

「ねえねえ、次はどこ行くの？」

「……次も何も、まだどこにも行っただけだよ」

予想通り、サイホンがわくわくしながら聞いてきた。

「ねえねえ、次はどこ行くの？」

……そしてこれも予想通り、ドクロッグがにやにやしながら聞いてきた。

「んー……そ、そうだな。そうだ、カフェで休憩でも、するか？」

「「うん、そうするー！」」

おいおいお前ら、さっきのをコピーしただけじゃなかよ。

まあ、ノった俺も俺だけど。

「……」

「……イーブイ？」

尻尾、ビンッビンだけど？

「なっ、なんでもないですっ」

「うにゃははー、照れてるイーブイちゃん可愛いー！」

「て、照れてないですってば！ さ、マスター、カフェ行きましょう、カフェ！」

……まあ、ブースターはイーブイの進化形だ。言わば姉妹みたいなもの。その憧れとか、羨望とか、みんな以上に感じるんだろうな。

自分と重ねちゃって。
だけどもめんな。

俺、あんなにイケメンじゃない。

「……つつても、まだこの街のことなんてまったく分かんねえしな
ー。カフェってどこ？」

「あのカップルに、こっそりついてけばいいんじゃない？」

「みっともねえなあ……」

でもま、ドクロッグの意見が一番確実か。

「ま、しょうがない。……あんまり、気付かれないようにな」

「わかった！」

いい返事だ、サイホーン。暴走するかと思ったけど、これなら何とか……

そろーり。

そろーり。

抜き足、差し足、忍び足……

「つてアホかあ！ んな歩き方してたら、すぐ怪しまれるだろが！」

「えっ！？ こっそり、気付かれないように、じゃないの？」

「さりげなくっ！ さりげなく歩け！ モブを装え！ んな忍者歩きで都市を歩くなバカホーン！」

「バツ、バカホーンってちよい!？」

「……だいじょうぶ、私についてきて」

「アブソオール! ほふく前進はやめろ! それじゃもはや変態だ!」

「へ、へんたっ……!？」

「……ちよつといいですか?」
「ん? 何、イーブイ? どうしたのこんなところで?」
「ここらへんにカフェってあります?」
「ああ、それなら俺達も今から行くところだ。一緒に行く?」
「わー、いいね! 同じイーブイ系だし、これも何かの縁だよ!」
「あ、いえ。マスターから頼まれただけなので、場所を教えてもら
えるだけでけっこうです」
「……なーんだ、つまんないの」
「まあまあ、そう言うなよブースター。えっと、それならこの道を
曲がって――」
俺達がバカやってる間に、
イーブイは、さっきのカップルに道を聞いていた。
「……こっそりついてくって言ったのは、お前の意見だろーが!」

「マスター、カフェがどこにあるか、きいてきましたよー」
「ありがとな」

「……………バカって」

「……………へんたいって」

「……………気にしすぎだろ、お前ら」

「だってえ、そんな、私は元々バカホーンって種族ですみたいな言い方……」
「い方……」

「してねえよ」

「だって、へんたいって、そのカエルみたいな言い方……」

「アブソルちゃん。そろそろ私おこっちゃうよ？」

「まあ、それはすまんかった」

「待てい」

ドクロッグに軽くチョップされた。地味に痛い。

「…………あの、えっと、早く行きましょうよ、カフェ」

「あ、ああそうだな。道を教えてくれ、イーブイ」

「はっ、はい！」

嬉しそうに歩き出すイーブイ。

…………一番行きたがってるのは、どうやらイーブイみたいだな。

「いらっしゃいませー。五名様ですね？」

イーブイのおかげでカフェにつくことができた。ウェイトレスが、笑顔で席を案内した。

……正直言うと、カフェとかそういう洒落たところはあんまり来たことがないんだ。彼女もないし。えーっと、こういうのって、なに頼めばいいんだろ？ まあ、コーヒーでも頼むか。

「お前らは何飲むんだ？」

「うーん……よく考えたら、飲み物とかよく知らないんだよね、私たち」

そりゃー山育ちなんだから知らないでしょうよ。

「……サイホーンとアブソルとイーブイは、適当にオレンジジュースでいいんじゃないか？」

「どうせだから、みんな違うの頼んで飲みあいっこしようよ！」

「じゃあ、わたしはこの『コーヒー』っていうの」

「私はこの『コーラ』というのにしましょうか」

「……おいおいアブソル、コーヒーなんて頼んで大丈夫なのか？ 苦いぞ」

「なにごとも、チャレンジ」

なんでそんな無駄にチャレンジーなんだよ。

「ドクログは何飲むの？」

「うーん……緑茶ってないのかなあ」

「緑茶？ いや、紅茶ならともかく、こういうカフェに緑茶はあんまりないと思うけど」

「そっかあ。お茶とかってさ、師匠と一緒に飲んだ緑茶くらいしか知らないんだよねー」

……師匠？ ドクログの？

「よく見るとこれ、『ポケモン専用』っていうメニューがあるね」
「へえ、そうなのか？」

「うん。あ、この『毒タイプ専用ジュース（ヘドロ味）』っていうのにしようかな」

「どんなジュースッ!？」

「あ、ドクログも、のみあいっこするの？」

「アブソル、今の聞いてた!？」 ヘドロだよヘドロ! そもそもヘ

ドロ味ってどんな味だよ!？」

「ヘドロ味でしょ？」

「知ってるわい!」

ヘドロ味ってなんだよ……どんな味なんだよ……。

つうかもう、『ヘドロ』がゲシュタルト崩壊してきたんだけど……。

「とっ、とにかく……みんな、決まったんだな? 俺もコーヒーにするし、んじゃあ押すからな」

「何を？」

「……何をつて、ベルだよベル。店員さんと呼ぶ」

「へえー、私に押させて!」

子供か! つて、お前はそーいや子供か。

サイホーン。ピンポーンがベルを押した。あ、間違えた。
ピンポーン。サイホーンがベルを押した。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「えっとー、コーヒーが二つ、オレンジジュース、コーラ、……ヘドロ味の、ジュースが一つずつ」

「はい、かしこまりました」

普通に注文できちゃったよ。普通なのか、このヘドロ味のジュースって？

……あ、そういや、タمامシのジムって草タイプのジムだけど、草タイプって毒タイプがつくことも多いからな。その影響だろうか。

ほどなくして、全ての飲みモノが運ばれた。

……ちなみに、『ヘドロ味のジュース』は予想通り紫色のジュースで、しかしさすがに臭いは無い。

つうか、ヘドロにストローさして飲むってどういう状況なの？

まあ、いいか。えーっと、ミルクは入ってるな。よかった、ブラツクはあんまり好きじゃないんだ、俺。

……カフェは入ってて当たり前なのかな？ よく分らん。

さて、ちょうどいいことにスティックシュガーもあるし、入れて――

ブシュッ！

そのとき何か、勢いよく液体が吹き出る音が聞こえた。

「……アブソル？」

「……………に、にが、にが」

アブソルが、コーヒーを吹き出す音だった。

目を丸くして、涙目のまま固まってる。

「……だから言ったら、コーヒーは苦いって。しかも、砂糖も入れてないじゃん」

「そざいのあじをたのしむのが、いいかなって」

「何その無駄に立派な心構え」

「……ふにゆう。シグ、代わりに飲んで」

「はいはい、分かったよ」

「それで、サイホーン。そのおいしそうなジュース、ちょっとちょうだい」

「う、うん。いいよ」

「お姉ちゃん、コーラもおいしいよ?」

「それ、こーひーとおなじ色してる」

「……………おいしいけどなー」

アブソルはひよっとしたらオレンジみたいな柑橘系もダメなんじゃないかと思ったけど、そんなことは無かった。美味しそうに飲んでいる。

でも、アブソルに断られたイーブイは若干しおれてる。まあ、大好きな人とおんなじ味を共有したいって気持ちは、分からんでもない。

「……………んで、そのヘドロ味のジュースはどんな味だ?」

「ヘドロの味」

わかるかボケ。

……………一応、美味しそうに飲んでるから、まあ、いつか。ちょっと気になるが、飲んだらぶっ倒れそうだからやめておく。

「ねえ、シグ」

「ん? なんだサイホーン」

「ひよっとして、カフェってこれだけ?」

「これだけだけど?」

「……………あの、すっごく美味しそうな食べ物?」

なんだそれ?

サイホーンの指差す先には、例のイケメンとブースターのカップル

がいた。

「すごく大きいね、これ！ 食べられるかなあ？」

「はは、ノリで頼んだけど、休憩のつもりがさらに疲れそうだな」
二人は、大きなパフェを仲良く食べていた。

……お前は、どんだけまねっこしたいんだよ。

「つか、なんだよあの大きなパフェ。何？ 巨大パフェって、こっちでも流行ってんの？」

メニューを見ると、なるほど確かにある。

『ジャンボパフェ』 5980円

……高っ。

「おいおい、クリームが口についてるぞ？」

「わぷっ、えへへ、ありがとー」

ブースターの口についたクリームを、指でふき取るイケメン。
少女漫画とかでありそうだな、今の。

「ねえねえー、あれ食べてみたい！」

「お前な、あれけっこう高いんだぞ？ いくら都会にそうそう来れないからってなあ……」

「ええー……」

「わ、私も、食べてみたいですっ」

「イーブイまで……だから、高いんだってあれ」

そうだよな、あんまり贅沢させるのも駄目だ。

……いくら二人がすごい落ち込んでるからって、駄目なものは駄目だ。甘やかしすぎても、ポケモンは駄目になってしまう。それは人間と同じだ。

だから……だから、
だけど、

「……すいません。オレンジジュースと、『ジャンボパフェ』ください」

「あ、はい。かしこまりました」

「ふえ？」 「えっ」

「し、シグ、今頼んだのって」

「……だからー、あのパフェと同じもの。今日は特別。お金もある程度余裕あるし、と・く・べ・つ・に、今日は大目に見る！」

「わっふーい！ ありがとうシグ！」

「うわあー、あれと同じのが……♪」

……はあ。

甘いなー、俺も。この喜んだ顔が見たかったからってさ。

ま、この顔が見れて出費が何千円っていうなら、安いもんか。

結局ポケモントレーナーってさ。

自分のポケモンが可愛くて可愛くて仕方がないんだよな。親が子を
想うみたいに。

うん、今日だけ特別！

**カフェ。
(後書き)**

ちなみに、イーブイ系はみんなパーカー着です。
イーブイも同じく。

パフエ。
(前書き)

ギャグにキレがでない…

パフエ。

目の前には、とにかく大きいけど、美味しそうな食べ物があった。ジャンボパフエっていうらしい。

「ま、マスター……これ、本当に食べてもいいんでしょうか？」

「当たり前だろ。せっかく頼んだのに食べなかったら怒るぞ」

「んじゃー、いただきます！」

「待つてサイホーン！ 待つて！」

「うえっ！？ な、なにイーブイ？」

……しまった。なんか、食べられるのがもったいなくて止めちゃった。

えっと、サイホーンが口を開けたままずっとこっちを見てるんだけど、どうしよう。

「……どっちが先に食べるか、じゃんけん」

「な、なるほど！ 一口目って大事だもんね！」

私が最初に食べたい、っていうのはわがままだから、じゃんけんで決めることにした。

「……」 「……」

無言で、しばらく睨みあう。

「「じゃんけんポン!!」」

「りゃあー!」「むぎゃー!」

「お前ら元気いいな」

かつ、勝てた!

「……じゃ、じゃあ遠慮なく先に」

「はーい、焦らさないで早く食べてよー?」

……………。

「どうやって食べるんですか、これ?」

「そのスプーン使ったらどうだ?」

……………。

「えっと、これ、どっから食べたらいんですか?」

「その上にあるさくらんぼ食べたら?」

「いやですよ! それは、なんというか、ロマンがない気がするんです!」

「……パフェ食べたこと無いくせに何言ってるんだか」

……………。

「ところで、そもそもこれどんな味が――」

「いいから早よ食べい！ みんなお前が食べるの待ってんだけど！？」

「はっ、はい」

上に乗っているのは、イチゴとかメロンとか。すっごく甘そう。

でも、この全体的に盛ってある白いのと黒いのは見たことないなあ……。

まあ、毒じゃないんだから、食べても大丈夫だよな。

パクッ。

「……ふにゃあああああああつ」

「ああっ、なんかイーブイがとけてる！」

「えっ、これ毒でも入ってるの！？」

「いや、あれはなんというか、すごく美味しいからああなってるんだと思う！」

「ええ！？ 体がとけるくらいおいしいの！？」

「いやー……あれはきつと、イーブイがそういう体質なんだと思う！」

「おいしいものを食べると体がとける体質なの！？」

……シャワーズになる素質でもあるんかイーブイは。
そう思いながら、俺はイーブイを氷で冷やしていた。徐々に元の形へ戻っていく。

「……結局どうだったんだ、パフェは」

「この世の天国を見ました」

「実際に天国に行きかけてたしな。とけて」

「そ、そうだ！ パフェ、どうなりました？」

「サイホーンとアブソルがゆっくり食べてるよ。まだまだ余ってる」

「あ、イーブイ起きた？ 早く食べないと、無くなっちゃうよ！」
「……ゆっくりしてていいよ。のこしておくから。サイホーンはまかせて」

「ちよっ、なにそれ！？ 冗談だよ、全部食べたらないよ！」

「……ふう、よかったー」

「食べてもいいけど、とけるなよ？」

「気をつけます」

しかし、このパフェ本当にでかいな。無くなる気がしない。
今のところ、サイホンもアブソルも美味しく食べてるけど、絶対
こういうの飽きるからな。

……？

「ん？」

「ドクロッグは食べないのか？」

「これさ、でかいじゃん」

「ああ」

「甘いじゃん」

「ああ」

「太るじゃん？」

「……それさ、あいつらの前で言うなよ？」

「ふふん、その辺の気配りもできないなんて、あの子たちもまだ甘いね。パフェだけに」

うまくねえよ。

でも、ドクロッグは一応そういうこと考えてんだな……。ちょっと意外だ。ああでも、こいつスタイルいいもんなー。

「それより、シグも食べてみたら？ 美味しーよ、たぶん」

「いい加減なことを……」

でもまあ、確かに頼んだ俺が食べないってのもおかしいよな。

パクッ。

……うん、うまい。すごくうまい。」

「おいしいな、これ。夢中で食べるのも分かるわ」

「でしょでしょ？ 分かるでしょ！」

「うんうん、パフエって美味しいもんだな」

「私のとけるのもわかりますよね！」

「それは分かんねーよ」

でも、本当においしいな、これ。

これなら、全部たいらげられるかも――

無理でした。

サイホーンもアブソルもイーブイも俺も、額を押さえてパフエを見ていない。

「みんな見えないから分かんないだろうけど、かなりシュールな光景だよこれ？」

ドクロッグの声が聞こえてきた。

「……シグ、食べないの？」

「食べない。俺はもう無理。お前らこそ、最初の勢いはどうしたよ」

「……ダメ、ムリ」

まだ、盛り上がってるところが無くなったにすぎない。ソフトクリームで言えば、これからコーンだ。マジできつい。

「……ドクロッグは食べないのー？」

「私は食べないよー？」

くそ、少しくらい食べるの手伝ったっていいじゃないか、ドクロッグめ。

「……私は、まだ食べれますよ」

「イーブイ？ 大丈夫？」

「ええ……だって、もったいないじゃないですか。こんなっ……こんな、美味しいものを、残すなんて」

無理してる。

確実に無理してる。これ以上食べたら、お腹壊すだろ、絶対。

(……ドクログー)

ちらり。

にやり。

「ねえねえイーブイ」

「なんですか？」

「カ・ロ・リー♪」

「——っ！」

その時、イーブイに電流走る。

正確に言えば、イーブイ・サイホーン・アブソルに電流走る。

「……も、もったいないけど、残しましょうか！」

「そうだな、十分食べたよな、俺達！」

「サイホーンもアブソルも、異論ないよね！」

「う、うん」「……うん」

結局、俺達はそのままカフェを出た。

「うーん、久しぶりの外ですね……！」

「大げさすぎだろ」

開口一番これだ。本当は限界だったんじゃないか。

「さあ、次はどこ行きましょうか？」

「次はポケモンジムだな」

「えっ」

「えっじゃねえ」

この街に来た目的を忘れてやがったなこいつ。

「ジム挑戦にあたって、ある程度ドクログのことも知っておかなくちやなんないし、まずはどこかの草むらで特訓といくか！ さあみんな、観光はこれまでだ！」

「」「ええ……」「」

いかん、みんなの士気が思いっきり下がってる。アブソルまで不満を漏らす始末だ。

これはなんとかしないと……。

あ、

「ブースター、頑張ったな！ レインボーバッジゲットだ！」

「あはは、ありがとうーマスター！」

さっきのカップルと、またすれ違った。

どうやら、レインボーバッジ……タマムシジムのバッジを、手に入れたばかりらしい。はしゃぎながら、俺達の前を通り過ぎていった。

「……さーてみんな。今までどおり、あのカップルのまねっこしにいこうか！　なあサイホーン！」

「うっ……」

「な、イーバイ！」

「うゝん……」

「というわけでレッツゴー！」

たまにはあのカップルにも感謝だな、うん。

さあ、特訓特訓！

パフエ。(後書き)

サイ「ねえシグ？」

シグ「なんだ？」

サイ「シグはメインの一人称だし、アブソル、ドクロッグも一人称やったし、今回でイーブイも一人称やったよね？」

シグ「まあ、そうだな」

サイ「なんで最古参の私の一人称がないの？」

シグ「それはほら、アレだ、お前何にも考えてないだろ」

サイ「なにそれひどい!？」

※ホントはちょっとだけ出てます。

まさか、作者自身も忘れてたとは言えないなあ：

襲来。(前書き)

遅くなって申し訳ない。

でも評価は上がったようで、皆さん見捨てずにいてくれてありがとうございました。

襲来。

「ねーアブソル、もうちょつと早く行こうよー」

「しょくごのうんどう、ほんとはからだによくない」

「おお？ アブソルちゃん物知りだねえ！　ところで、人とポケモンは抱きしめられると幸せな気持ちになれるっていうのは知ってる？　知らないなら実践してみせようか？」

「……幸せな気持ちになれるからこそ、大切な人としかしちゃいけないんだよ」

「えー？　私のこと大切だよねー、アブソルちゃん♪」

「……………た……たいせつ」

「……どもった。あのアブソルちゃんがどもった」

「お前らさあ……テンション下がってた割に元気だよな」

さすが山育ち、と言わざるを得ない。イーブイは少し疲れ気味。もちろん人間スペックの俺も疲れ気味だ。

「ねーねーシグー、今回はバーベキューするの？」

「いや、さすがに毎回する余裕はないな……。今回は、普通にお弁当」

「シグが作ったのっ？」

「俺に5人分の弁当を一晚で作る技量は無い」

「ええー、買ったの？」

手作り弁当に憧れるのは分かるけどさ。

「さー、歩く歩く。歩いて疲れりゃどんな弁当だって美味しいさ」

「美味しいとか美味しくないとかじゃないよ！ シグはわかってないなー！」

ポケモンに人間の文化を分かってないと言われるとは……。

「とにかくなー、俺はお前らのお父さんじゃないんだから、お弁当まで見きれません！」

「あつらあくん？ シグがお父さんなら私がお母さんかなー？」

「ままごとでもするのか？ お前意外と子供っぽいんだな」

「ケロッ……今日のシグつまんない」

「お前が俺と何日過ごしてるって言うんだよ……」

「さあ……107日くらいかなあ？」

「なんでだよ。一年どころか一日しか過ごしてねえよ」

「マジでっ？」

まあ、その気持ちは分かる。ほんと、今日は濃い一日だったからな。……つうか、その生々しい日数はどこから出てきたんだよ。

「でも、シグはどっちかっていうとお母さんだよね！」

「どっちでもよろしい。さー、歩くぞ！ 何はともあれ、まずは上を目指せ！」

「最後尾の人に言われても説得力無いなあ……」

そんなこといったってしょうがないじゃないかア。人間なんだから。みつを。あれ？ 違ったっけ？

「今回はどれくらい歩くのー？」

「山じゃないから、特にどこまでってことはないな……。でも、もう少し人がいないようなところで」

「まあ、人気のない所に連れ込むなんてシグってばダイタン♪」

「俺、そんな巨人じゃないよ？」

「シグ、それタイタンじゃない？」

ギリシャ神話はポケモン世界にもあるのか。ホント不思議な世界だ。つうか、そもそも金が円単位だもんな。

「さ、もうすぐ野営地につくはずだ。アブソルも言った通り、食後の運動は体によくない。そこで今日は、例のキャンプセットでお泊り」

「お泊り！？ ほっほーう、ステキなふいんきの言葉だね！」

ふんいきな。ドクロッグのことだから、いささか心配だ。それとお前テンション高いなオイ。あ、いつものことか。

「じゃあ、今日は別に何もしないの？」

「ああ、そうだ。今日はみんな、一日頑張ってくれたしな」

「ケローう、そだねっ！ ロケット団撃退やら、パフェ大食いやら大変だったし！」

ロケット団とパフェを並べるか……というか、お前パフェ食べてねえだろが一片たりとも！

「じゃあ、もう少し速めに歩きますか……パフェ食べ過ぎて、苦し

いですけど」

「うん、がんばろう」

「はは、俺も頑張るか……」

俺が歩みを速めたとき、

———クロス。

恐ろしく、不気味な声が聞こえた。

「シグッ、伏せて!!」

次に聞こえたのは、ドクロッグの、ポケモンタワーで聞いたような声。

不気味な声が聞こえていただけに、俺は咄嗟に伏せた。

ところが、

俺は吹っ飛んだ。

「なっ……なっ!？」

「シグッ!　——イーブイちゃん、シグをお願い!　苦しいとか言
ってたけど、動けるね?」

「そ、それくらいの自制力くらいある!　わかった、シグは任せて
!」

イーブイが、吹っ飛んで近くの木にぶつかった俺に近寄って来る。

——危険だ!

「戻れ、イーブイ!」

「え、ちょっと——!」

その瞬間、イーブイが今までいたところを、凄まじい速度の水が光

線のように通り抜けた。木々が次々に倒れていく。

……この余波で、俺が吹っ飛んだんだ。あぶねえ、これが当たってたらまず生きてなかった。

「……っドクログ、原因は分かったか!？」

「シグの考えているとおり、ポケモン！ その川から狙撃してるみたいだね！」

「わかったありがとう！ サイホーン、アブソル、伏せて攻撃を避けろ！ 木の後ろに隠れるんじゃない駄目だ、木ごと吹っ飛ばされる！」
まったく、ロケット団の後は、野生のポケモンか……しかも、これはやばい。

サイホーンと初めて会った時と、感覚は似ている。だが、あの時サイホーンは無邪気に遊んでいるだけだった。

今回は勝手が違う。はっきりと殺す気でこちらを狙っている。

……だが、怯えてはいられない。今回は仲間のポケモンだっているんだ。しっかりと伏せて、近くの木にしがみついた。

——ッ！！

再び、俺の頭上を水のレーザーが通り過ぎる。

何度か攻撃されたが……これは、ハイドロポンプか？ 威力120の、水タイプの主力技で、数多くの水タイプが覚えられる技だ。これだけだと、特定はし辛い。

「サイホーン、アブソル、無事か!？」

「うん!」 「なんともない」

よかった、二人は無事だ……。とにかく、サイホーンだけは早くボールに戻さないと! 水タイプ技、それもハイドロポンプなんて大技受けたら、生死すら危ない!

「今の内に戻れ、サイホーン!」

「……わかった」

もう少しわがまま言うかと思ったが、素直に了承してくれた。ありがたい、サイホーンも少しずつ成長してるんだな。……つと、今はこの謎の襲来者について考えないと。

「ドクログ、アブソル、お前らの能力で、敵がどこにいるか分からないか!？」

「川に潜んでいるっていう以上には、何も分からないよ!」

「……ごめんなさい、わたしもそこまで」

川に潜んでいる……まあ、ハイドロポンプを覚えている時点で水タイプのポケモンだろう。しかも、何故かは知らないがひどく人間を

憎んでいる様子だ。

「……あのさ！ 誰かは知らないけど、出てきてごらんよ！ 私たち、そんな悪い奴らじゃないから！」

ドクログが叫ぶ。

確かに、有効かもしれない。ポケモンを乱獲しようとする悪人だと勘違いしているだけなのかもしれないからな。

彼女が叫んだ数秒後に川の辺りから、ざば、と何かが上がって来る音が聞こえた。

ぺたぺたと、裸足でこちらに近づいてくる。

そして、

——空気が凍りついた。

襲撃者の姿が見えた瞬間、はっきりとドクログがたじろぐのが見えた。怯えたといってもいいかもしれない。……おそらく危険予知の本能だろうが、1，2秒ほどだが身を震わせた。

アブソルも同じだ。いや、彼女に至っては、先程から一步も動けないでいる。

「……………あらら、可愛らしい。スターミーちゃんだっけ？」

「……」

「無視ですか」

襲撃者は、ドクロッグと同じかそれ以上の年といったくらいの女性だった（そんな人に可愛いって言うドクロッグはどうなんだろうか）。紫色の髪に、紫色の服を着ている。ドクロッグの言った通り、スターミーだ。同じ種族であるカスミのスターミーはどちらかというところ子供らしくて可愛かったが、彼女は正反対だ。背が高く、何より一睨みすれば人を殺せるんじゃないかというくらい鋭い目をしている。

「……あんたらが」

「え、何？」

「あんたらが、こいつ殺すの手伝ってくれんなら見逃してやるよ」
「不思議なこと言うねえ。こいつ守るために私たちは命張ってるってのに」

「……ドクロッグ、挑発するような真似はやめろ」

「ごめん」

一触即発の中、よくもそんな軽口を言えるもんだ。

「つとーいうわけで、交渉決裂かな？　悪いけど、少し痛い目見てもらうよ」

「……ハッ」

「ケロ？　何で笑ったの？」

「お前らよオ、どちらが交渉権握ってるのかくらい分かれよ」

「――ッ!？」

一瞬だった。

一瞬で、ドクログが吹っ飛んだ。木々を倒して、かなり遠くの方まで飛ばされた。

ハイドロポンプじゃない。

「ドクログ!？」

返事が来ない。余程遠くまで吹っ飛んだのだろうか。

……これは、

——サイコキネシス。

エスパータイプの大技だ。……特に、ドクロッグにエスパーはまずい。

毒・格闘どちらも効果抜群で4倍の威力……ドクロッグは、一番エスパー技に弱いポケモンなのだ。

「さあ、交渉決裂だ。悪いがお前ら全員死んでもらう」

「ま、待てよっ！ 目的は、何なんだ一体！？ 人間が憎いのか！？」

「……さてな。オレにも分からない」

意味が分からん！ 目的が分からないなら、なんで俺達を襲うんだ！？

「まったく、奴が格闘タイプでよかった。厄介そうな相手だったから、真っ先に潰させてもらったよ。さあ、そこで固まってるアブソルとお前を殺すか。ボールから出さないようにしてたら、殺さずに済むかもな」

「……………」

ボールから出さなかったら、ね。

「シグ、なに考えているの？　今、わたしをボールのなかに入れたらおこるよ」

「ああ、分かってる」

俺だって、死にたくないさ。死ぬわけにはいかない。

「さあ決めたか？　一人で死ぬか、心中するか」

スターミーが、ゆっくりと歩み寄って来る。……凄まじい殺気は感じるけど、別に全力で潰しにかかる様子もない。むしろ、ただ苛立つて物にあたってる、って感じた。

「シグッ……どうすれば、いいの？」

「今は、全力で避けてくれ」

……ハイドロポンプとサイコキネシスだったら、まだ分からない。もう一つ、技を出せば、分かるんだが……。リスクは大きいが、頼ってみるか。

「アブソル！　相手の攻撃に気をつけながら、かまいたちだ！」
「わかった」

かまいたち。あんまりアブソルには向かない特殊技だけど、この世界では遠距離攻撃ができるため重宝してる。ゲームだと1ターンの溜める必要があるわりに威力が大したことないからあまり注目されないんだが、鍛えれば溜めも少なくなるし、威力も上がっていく。熟練度システムみたいなもんだ。

アブソルの周りに、円状に渦巻く空気の塊ができていく。……見えにくいってのが弱点だ。相手にも分かりにくいのが、自分たちにも分かりにくいデメリットの方が大きい。でも、アブソルもだいぶ慣れてきたみたいで、俺の方には少しも風が来ない。

そして、かまいたちがスターミーへ飛んで行った。

近くの草を切り裂きながら、まっすぐ飛んでいくのが僅かなが見える。

「……鬱陶しい」

バリバリバリッ！！ と音がして、あたりが白い煙に包まれる。辺りが黒く焦げる。

……そして、何事もなかったかのように、スターミーが再び歩み始めている。

「嘘っ……！？」

「気にするな、アブソル。新しい技を出させたってのは大きい」

今のは、十万ボルト。その名のとおり、十万ボルトの電撃を放つ技

だ。おそらく、電撃を放って空気を乱し、かまいたちを防いだのだろう。

十万ボルトを覚えている、ってことはだ。

このスターミー、やっぱり人に育てられたんだ。しかも、相当の腕利きトレーナーか、……はたまた、出雲に。

何故かって？ スターミーの、典型的な育て方だからさ。ハイドロポンプ・サイコネシス・十万ボルト・冷凍ビームってな。とすれば、フルアタッカー。アブソルの不意打ちが、必ず刺さるってことだ！

「アブソル、不意打ちの準備だ！」

「わかった」

「……ふん」

ビリリッ、と、

先程より数段弱い電気が迸った。

「……あ、あれ？」

アブソルが、いきなり地面にへたり込んだ。

「ど、どうしたんだ！？」

「か、体が、うごかない」

わ、訳が分からない。ということだ、……麻痺状態？ 電磁波？

「邪魔だ」

そして、スターミーが無造作に空を薙いで、

「——あぐツ！？」

電撃の弾が、十万ボルトの電圧が、アブソルに直撃した。

やっぱり、何事もないようにスターミーは歩みを止めない。

「……っあ、アブソル！？」

何を思考停止してんだ俺は！ 予想が外れたくらいで！ シグ、お前のせいでアブソルが負わなくてもいい傷を負ったぞ、畜生！

「アブソル戻れ！」

咄嗟にアブソルをボールの中に戻した。

……それにしても、何でだ？ 普通、ハイドロポンプ、サイコキネ

シス、十万ボルトときたら冷凍ビームしかないだろ。ふつうそこで電磁波を選ぶなんて、ドラゴンタイプや草タイプ対策ができないし、あり得ないはず……。

……あっ!!

代表的厨ポケとはいえ、いつから俺はゲームのポケモンと混同させていた!?

技を4つしか覚えないうん、いくらでも覚えるんだ!

……ああもうっ、こんな切羽詰まったときに、なんて勘違いをしてるんだ俺!

「覚悟を決めたか?」

スターミーの口がゆっくりと動く。彼女は、もうすぐ近くにいた。2, 3メートルほどしか距離が空いていない。

そして、俺の周りには、一人のポケモンもいなかった。

アブソルは大ダメージに加え麻痺状態、ドクロッグは吹っ飛ばされてどこにいるかも分からない。サイホーンは相性が悪いし……イー

ブイしか頼れないか。

さっきから言う様に、こいつは全力で俺を殺しにかかる様子は無い。本当にただ当たってる感じだ。気持ちが悪揺してるだけなんだろうから、できれば傷つけたくはない。……だが、このままでは俺が死ぬ。それもごめんだ。

コンコン、と、イーブイが入ったモンスターボールを軽く叩く。

「てやあっ！」

出てきたイーブイが、スターミーに飛びかかった。

襲来。(後書き)

107日…10月7日はケロロ軍曹役渡辺久美子さんの誕生日であります。

蛙つながりです。けろー

反撃。

「てやあっ！」

出てきたイーブイがスターミーに飛びかかった。

「な——ッ！？」

さすがのスターミーも反応しきれなかったようで、そのままイーブイと一緒に倒れ込んだ。

「離せよッ！」

「嫌です！」

「いいぞイーブイ！ そのまま離すな！」

しょうがない、このまま捕まえるのが確実だ。……捕まえても暴れるようだったら、仕方ない、ボックスの方で預かってもらうしかないか。

「よしっ……捕まってくれ！」

モンスターボールを、スターミーに向かって投げる。あとはイーブイに抑えてもらえば、捕まえられるはず……！

「捕まって……たまるかっ！」

なっ……！

モンスターボールが弾かれた？

何にも当たってないのに？

よく見ると、スターミーはイーブイに抑えられながらも右手だけ空いていた。

「しまった、サイコネシスか……!」

「あっ……ごめんなさい」

「いや、いい。そのまま頑張って抑えてくれ!」

イーブイがスターミーの上で押さえていれば、スターミーも技をイーブイに撃つことができないはずだ。

……でも、このままじゃじり貧だな。もし振りほどかれたら……

って、待てよ。

もしかして右手が空いたこの状況、俺が一番危ないんじゃないじゃ——

「うわあああああっ!?!」

「マスターっ? ……あれ、マスターどこですかっ!?!」

イーブイの声が僅かながら聞こえる。

イーブイ、俺はお前の上だ。

30mくらい。

ポケモンって、本当に人間にとっちゃ驚異だな。

まさか、サイコキネシスでここまで上空に飛ばされるとは。

しかもご丁寧に、鋭そうに尖った木の真上。

ああ、

俺死ぬのか

「おーらいおーらあい」

……。

ん？

「よ、っと。うわっ、シグ軽っ」

何にも刺さることはなく、

俺は、何かに受け止められた。

「……てっきり気絶してるかと思ったよ、ドクロッグ」

器用にも彼女は、尖った木の上に器用に立って、俺を受け止めていたんだ。

「ふふーん、私はそんな囁ませ役やらないよ。私はむしろ大役を苦労せずかつさう、いわば白馬の王子様かな？」

「はは、お前らしいな。だけど苦労はしてもらう。……イーブイに加勢してくれ」

「りょうかい！」

……つうか、この体制は、ひょっとして、お姫様だっことか？ うわー……なんだか嫌だ。男としてのプライドが傷つくな、なんて言われてられないか。

ドクロッグに地上に戻され、やっと足をつく。……まだ若干震えるけど。

「ドクロッグ、早く……！ もう抑えてるのも限界！」

「別に抑えてなくてもいいよ？」

「えっ？」

「シグ、イーブイを戻してあげて」

「あ、ああ分かった……戻れイーブイ」

当然だけど、イーブイがいなくなってスターミーが起き上がる。

「何だ？ オレに加勢する気にでもなったか？」

「ならないならいい。ただ、一対一の方がやりやすいからさー、格闘技って」

「……？」

スターミーが構える。

何考えてるんだ？ エスパークタイプのスターミーに格闘で勝負を仕掛けても、不利になるのはこちらのはずだ。そりゃ近接戦に持ち込めば分からないが、いくらドクロッグでもスターミー相手にそこまです持っていけないだろう。

それに、意味不明の技宣言。ドクロッグらしからぬ（？）正々堂々な発言だ。

格闘技に何か秘策が……？

あつ、そうか、わざと相手を警戒させておいて、その隙に気合いパUNCHを――

「なーんちゃってヘドロ爆弾でーす！」

……オイコラ。

ドクロッグの右手から出た、ソフトボール大の紫色の塊がスターミ
ーへと飛んでいく。格闘技と聞いてすっかりドクロッグが接近戦を
仕掛けてくるものだと思っていた彼女に、思い切り当たってはじ
けた。

「っ！？ ひ、卑怯者！」

「川からハイドロポンプ狙撃してくるポケモンに言われたくないな
あ……ってアレ？ シグどったの？」

「……いや、お前を信じた俺が馬鹿だったと反省していた」

「なんでえ！？　ちゃんと攻撃当てたよ私！？」
もうコイツには騙されん。

ドクロッグのハツタリにまんまと引っ掛かったスターミーも同じことを考えているようで、毒を払いながらもいっそう殺気が高まった気がする。

「……………」

「あのねえ。相手を殺すことより自分が殺されないことを考えなよ。大体、目に毒入っちゃったでしょ？　しばらくは見えないよー。それとも、心の眼でも使うつもり？」

「っ」

「大丈夫だよ。目に入ってたって数時間もすれば治るような弱い毒だから」

でもさ、と、ドクロッグは付け加えた。

「――命まで狙っておいて、その程度で帰れるなんて思わないでよね」

その瞬間、ドクロッグがスターミーに接近した。今度こそ、格闘技を仕掛ける気か。

「せいやッ!!」

掛け声とともに、スターミーの太股辺りに蹴りを入れた。

「――がつ!？」

「ローキック♪ 相手にダメージ与えて動きも鈍らせるんだから、お得な技だよねー」

ローキックか! 威力60、攻撃と同時に相手の素早さを下げる技だ。効果はあまりゲームと変わらないらしいな。

「どうするシグ? トレーナーとしてこの子を捕まえるって言うなら、チャンスだよ?」

「……………そう、だな」

トレーナーとしてではないけど。

あいつは、まだ俺達を殺す気にいる。そしてターゲットは、口ぶりからして俺個人じゃなく人間だ。だから、俺があいつをこのまま追い払えば、他の人間も襲うだろう。そして、いずれは捕まって、…殺される。

あまり嫌がるポケモンを無理やり捕まえたくはない。……だが、それが俺達の為であり、自己満足かもしれないけど、あの子の為にもなるなら。

俺は、モンスターボールを投げた。

「……いやだあっ！」

だけど、スターミーはまたボールをはじいた。

目もうまく見えないのに、サイコキネシスではじいたんだ。

「嘘お!？」

「……人間に捕まりたくないっていう、執念だろうな」

「じゃあ、しょうがない。ローキックもう一度して、さらに鈍らせてから——」

「……どうした?」

ドクロッグが、静止した。

——そして、そのまま倒れた。

「おい、ドクロッグ!？」

慌ててドクロッグを支える。

「……あー、限界がきたみたい、だね」

「限界……?」

「ごめん、シグ。我慢、してたんだけどさあ……もう、無理みたい」

……ああ、そうか。

いくらドクロッグでも、やっぱりサイコネシスはきつかったのか。そりゃそうだ。エスパークタイプはドクロッグの天敵のようなものだからな。

「ごめん……先、眠らせて」

「ああ、ゆっくり寝てな」

ドクロッグをモンスターボールの中に戻した。

「ッ……ッ……目が見えなくても、人間一人くらい殺せる！」

「うわっ!？」

手当たり次第に十万ボルトや冷凍ビームを撃ちまくりやがって、危ないことこの上ない!

「疲労したイーブイと手負いのアブソルじゃ、お前の命は守れんだろう!」

ん?

「お前、何か忘れてないか？」

「……またハッターか？」

十万ボルトと冷凍ビームの連撃が一旦止んだが、すぐにまた始まった。

ハイドロポンプとサイコキネシスは集中力があるのか、使ってくる気配がない。

これならいける！

「大トリは任せた、サイホーン！」

「わたしを忘れるなあーっ！！」

サイホーンが、モンスターボールを投げた勢いそのままに、スターミーへと突進する。

「――っ」

「三度目の正直だ！」

スターミーが倒れたところへモンスターボールを投げる。

ボールは、三度揺れ、

動かなくなった。

「……………はあああゝゝゝっ」

総動員。

俺の手持ち総動員で、やっと捕まえることができた。

……怖かった。

今になって膝が震えてくる。

「はいシグ、モンスターボール」

「おお、ありがとう」

これでボールの中から出てきて、ボールを踏み砕かれたんじゃない話にならない。

サイホーンから、モンスターボールを受け取る。

「……スターミー、ゲット、だぜ？」

「シグー、自信なさげに言うのはやめなよ」

了承なしにポケモン捕まえるのは、これで二回目か。

なーんか、嫌なんだよな。ポケモンに悪い気がして。

アブソルは、怪我してたところをポケモンセンターで治すために捕まえた。

イーブイは、ロケット団から守るために。

ドクロッグは……シンオウへ戻る道中の、観光がてら。

サイホーンは、山では仲間外れにされてたし、スターミーは人間をすごく憎んでるし。

なんていうか、ワケアリなポケモンばかり仲間になるよなー。

「それでどうするのシグ？」

「ん？ あー……どうしようか」

スターミーを捕まえたはいいが、それからどうすればいいのだろう。サイホーンみたいに、動きが読みやすくて、遠距離攻撃ができない奴ならいいけど、スターミーは違う。

……でも、このままってわけにはいかないだろ。

「……しょうがない、一旦出す。サイホーンはボールの中に入ってくれ」

「わかったー」

「待った」

その声は、サイホーンの口から出た言葉じゃなかった。ボールからでてきたドクロッグの言葉だ。

「おい、ボールから出て大丈夫なのか？」

「いやいや、ちょっとやそつと休んだくらいで元気になるなら苦労しないよ」

「じゃあ、何で？」

「あのスターミーは危険だよ。私がシグと一緒に見てる」

「……ドクログはもう充分頑張っただろ、無理すんな」

「シグ。卑怯な言い方だけど、シグが死んで困るのはあの子たちなんだよ」

「……………」

ホント、卑怯なことで。

なんというか、ドクログはふざけてばかりいるけど、シオンタウンでも、さっきの戦闘のときも、妙に誰かを助けたがる、というか、助けることに執着している、というか。彼女には、善意とか仲間意識とか、そういったものとは違う、何かがはたらいている気がする。

「ドクログ……こういうこと言うのもなんだけどさ」

「ん？」

「お前、過去に何かあったのか？」

ドクログは、しばらく黙った。

「……シグ、話をそらしちゃあ駄目だよ」

「お互い様だ」

……。

ドクログが苛立ってる。軽口で誤魔化しているつもりだろうが、分かる。

しょうがない、ここは俺が引くか。

「分かった、分かったよ」

「じゃあ、私にスターミーを見張る許可をくれるんだね？」

「ああ、ドクログ含め全員をボールから出して話をしよう」

「……………はい？」

「スターミーをどうするかっていう大事な話に、俺一人だけが参加するってのは失礼だろうからな」

「……………あー、そー」

「というわけで、全員でてこい！」

そして全てのボールを、一気に投げた。

……分かってたけど、みんな傷だらけだ。

「アブソル、一応まひなおしと傷薬かけとくな」

「わかった」

「イーブイ、ダメージは受けてないと思うけど、きずぐすりいるか？」

「いえ、擦り傷くらいならすぐ治りますから」

「サイホーンも大丈夫か？」

「うん！ 私は全然平気だよ！」

「ドクログには凄い傷薬が必要だな」

「ありがとねー」

「スターミーにも、どくけしと凄い傷薬かけとくな」

「……………」

「ちょっと待ってシグ」

「え、どうした？」

ドクログが手をあげた。

「弱らせたままでもいいでしょ！ 回復させる義理がどこにあるっていうのさ！」

「そうは言っても俺が捕まえた、俺の仲間なわけだし。回復させる義理はあるだろう」

「まだ仲間と決まったわけじゃないでしょーが！」

「分かっている。ボールは、人間とポケモンを繋ぐ絆だ。モンスターボールがある限りな、俺とスターミーは仲間なんだよ」

我ながら、歯の浮くようなセリフだ。

「まったくもー……きれいごと並べたってどうにもなんないんだからね」

まあ、ドクログの言い分が正しい訳だけどな。そんなフェアじゃない状態で話したって、なんの解決にもなんないだろ？ スターミ―が、いつでも逃げられるような状況でいいんだよ。

「というわけで、毒消しと凄い傷薬だ。人間が嫌いなら、自分で使ってもいいぞ」

「……毒、ということもある」

「はは、違うってことくらいスターミ―も分かるだろう？」

「………ああ、分かるよ」

実におもしろくなさそうな顔で、スターミ―は答えた。

彼女は、様々な技を覚えている。あれだけの技を覚えるのは、トレーナーがいないと無理だ。形はどうあれ、もともと彼女は誰かのポケモンだった。

だから、どくけしや傷薬なんてトレーナーアイテムを見たこと無い訳がない。

「人の親切くらい素直に受け取っとけ。もらえるときにもらったかなきゃ損するぞ」

「……ふん」

あ、そんなぶんどらなくても。

スプレー状のどくけしと傷薬を、自らに吹きかける。うーん、これ

で傷が治るんだから不思議だ。何度見てもよく分からん。

「言っておくが、オレは今の一瞬でもお前らを殺すことができるんだ。それを分かってるのか？」

「そんなことも分からなきゃ、今頃俺達はお前に殺されてるよ」

「……だったらなんで」

「だーかーらー、お前は俺達の仲間なんだから、治すのは当たり前だろ？」

今度は黙ってしまった。なんとも複雑な顔をしてる。

……うーん、困った。

何があったかは知らないけど、予想以上に人間を憎んでるみたいだ。というより、「人間は悪」だと思い込んで、といった感じかな。今のところ敵意は感じないけど。

「……あのさ！ その、人間はみんながみんな悪いってわけじゃないんだよ！」

「サイホーン？」

意外なことに、サイホーンが説得を始めた。こういうのは苦手だと思っていたけど……というか、そもそもスターミーのことが、本能的に苦手みたいだ。さっきからちよっとおどおどしてるし。

でもまあ、俺達とスターミーのことを想って、思い切って発言して

くれたんだよな。ちょっと、我が子を見守る気分だ。ここは、黙っておこう。

「だとしても、オレは悪い人間しか見たことがない。だから、オレは信じない」

「だっ、だから、それは……！」

まあ、でもやっぱりそれ以降となるとうまく言えないよなあ……。

「お前らだって騙されているなんて可能性は、考えたことないのか？　ただ自分たちが利用されているだけだと、そう考えたことは」

「いやっ……ち、ちがつ……！」

「何が違うんだ。結局、お前ら人に飼われてるポケモンってのは、何も考えずにトレーナーの言うこと聞いてるだけじゃないか。お前たちが想っているほどに、トレーナーはお前たちを想っていないんだよ」

「ふえっ……ち、ちがうもんっ……！　そんなこと、ないもん……！」

「はいはい、そこまで。小さな子をいじめちゃだめだよ」
泣いているサイホーンを、ドクロッグがフォローする。

「ありがとな、サイホーン」

「……ごめん。ぜんぜん、分かってももらえなかった」

「大丈夫だよ。……ちゃんと、分かってももらえてるさ」

「まったく、小さな子泣かして何が楽しいのさ」

「教えてるだけだ。人間にいい奴なんていない、って現実をね」

「自分の常識の押し付けは良くないねえ」

「経験則さ」

「同じようなもんだよ。井の中の蛙、大海を知らずってね」

お前が言うか、って、前も同じことを言ったような。

「おおかた、トレーナーから酷い目に合わされて逃げてきたってとこでしょ。どうしていいかわからず逃げ回ったあげく、闇雲に自分を酷い目に合わせた人間に仕返しを……とか、そんなシナリオかな？」

「ちよつと、ドクログ……！」
イーブイが制する。

……ドクログの、すぐ挑発する癖はどうにかならんもんなかな？

「まあ、間違っちゃいない。少し混乱していたのも認めよう。……だが、別に酷い目に遭ったってわけじゃない。ただ、嫌気がさしたのさ」

「嫌気がさして、人間を殺そうとする程混乱するの？」

「少し違うな。オレが混乱していたのは、それとは無関係……というわけじゃないが、とにかく直接関係ない」

「ケロ？　じゃあ、なんで？」

「……………」

再び、スターミーが黙った。

「……なあ、よければ教えてくれないか？ 何があったのかさ」

そして、ここで俺が発言した。

スターミーが、何で逃げてきたのか。何で俺達を襲ったのか。

その理由を知るのは、こいつのトレーナーとして必要不可欠だろう。……まあ、話したくないならしょうがないとして。

でも、多分教えてはくれないだろうなあ……。

「いいよ、話してやる。話したら、少しは心が軽くなるかもしれないしな」

だけど、意外にもあっさりと彼女は了承した。

反撃。(後書き)

スターミーは擬人化しても性格が掴みにくいです……何色にも染まるのでしょうかね。

スターミィの記憶。前編（前書き）

またしばらく更新できないかもです。

スターミーの記憶。前編

——オレが言うのもなんだが、これでも昔は普通のオンナノコだったんだ。

この辺のくさむらや川で、よく友達と遊んだもんさ。

こちら辺はあまり人が来なくてな。その代わりたくさんポケモンが集まってた。その時は知らなかったが、それこそ、海を越えた方にいるはずのポケモンもここにいたらしい。

名前を覚えている奴で、ニャース、オタチ、……それにコドラもいた。ああ、お前と同じ、イーブイもいたよ。

あの頃は、……なんというか、毎日が輝いてた。充実していた。幸せだったんだ。

——。

——ターミー

「ちょっと、スターミーってば！」

「うわっ……あれ、ええっと、どうしたのコドラ？」

オレは、物ごろついたときからスターミーだった。何故だかは知らないが、きっと川の底にでも水の石が落ちていたんだろう。

「どうしたのはこっちのセリフだよ、さっきからぼーっとして。かくれんぼをやるうって言ったのはスターミーなんだからね！」

「あ、うん、ゴメン」

「ほらほら、もっと遠くに行こう！」

コドラはオレの親友だった。いつも一緒に遊んでたよ。逃げる時も隠れる時も一緒だった。当時のオレは気が弱くてな、一緒というよりはくっついていたに近いが。

あの日も、いつもと変わらず……かくれんぼかなんかして遊んでいたんだ。その日、私は、嫌な予感がしていたんだがな。皆を遊ばすに
なんか、誘うべきじゃなかったんだ。

「ねえ、街が見えてきたよ……！」
「うわわっ、ホントだ。ちょっと遠くに来すぎたね。しょうがない、ちよっと戻ろう」

人里に近づきすぎて、引き返そうとしていた時だった。

「……ねえ、ちよっと」

「何、スターミー？ 早く戻らないと。街まで来ちゃったら、お母さんに怒られちゃうよ！」

「……………あれ、なんだろう」

黒い塊が、こちらへ向かってくるのが見えた。

初めは、またタマムシの連中が勝手にヘドロでも流したのだろう、と思った。

けど違う。液体があんな動きする訳ないし、そもそもヘドロを流すんなら川だ。道路にそのまま流したら、さすがに人間だってまいったもんじゃない。

じゃあ何だろう、と思って、

ようやく、それがおびただしい数の、黒い服を着た人間だと気付いたんだ。

「……ッ!! 逃げよう、スターミー! 早く、早くみんなに知らせなくちゃ!」

「う、うん!」

そりゃもう、一目散に逃げた。人間が一人二人でポケモンを捕まえに来たことなら何回もあるが、あの人数ともなると、この周辺のすべてのポケモンが捕まってもおかしくない。それか、このくさむらのボス……ボスゴドラを捕まえに来たか。『大量乱獲は禁止』『山海等のリーダー的存在のポケモンは、私的理由で捕まえてはならない』これらの法は、子供のポケモンだって知ってる。これらを破る人間たちに関しては、例外で野生のポケモンが人間の法にのっとって訴えることができる。

「あ、コドラとスターミーみつけ……」

「そんなこと言ってる場合じゃない、人間が僕等をらんかくに来たんだ!」

「ええっ!?!」

「……ところで、『らんかく』ってなに?」

「え? ええっと、それは……とにかく、お母さんに知らせてくるよ! みんなは隠れて!」

「わかった!」

……まあいくら子供でも知ってる法律だからと言って、言葉の意味が分かるってわけじゃなかったただけだな。

呼ばれたボスゴドラは、何人かの幹部と共にやってきた。その中には、俺の母もいた。それと、シャワーズだったかな。

しばらくして、大勢の足音が聞こえてきた。

近くで見ると、奴らの胸には『R』のマークが入っていた。

……人間なら分かるだろう？ ロケット団さ。

奴らは、当時のオレたちのボス、ボスゴドラを見て、ボスだと気付いたのかそこで止まった。

「……どういことだ、人間。このような小さなくさむらで乱獲行為など。お前たちは、たしかロケット団とかいったか？」

「あー、そうだよ。最近ボスになった出雲だ。ここらへんじゃイーブイも出るって聞いたんでな、乱獲させてもらう」

「そうはいかない。イーブイも私たちの大切な同胞だ、乱獲など許さん」

「あーそうかい、まあどうせお前も捕まえるんだけどね――」

「……どうしました、出雲様」

「…………お前たち、乱獲は中止だ」

「えっ？」

「法に触れるのは、できれば避けたい。そうだろう？」

「ええまあ、確かにそうですが……」

そいつは、何が見えたのか、不敵に笑っていた。ボスゴドラでもなく、周りの幹部でもなく。

オレと、ボスゴドラの子供、コドラの方を見て。

「……どっちとも6V。理由は分からねえが、この世界じゃ奇跡の他ない。神様からの、ロケット団ボス就任記念ってことかねえ」

「お前が神様から好かれる男とは到底思えん」

「ちがいない」

ロケット団のボスは、わけがわからないことを呟いていた。

ボスの横にはウィンディもいた。ボスの方は笑っていたが、彼女は面白くなさそうな顔をしていたのを覚えている。

「決めた。乱獲はやめだ。その代わり、そのスターミーとコドラを
いただいでいく」

「なっ——！？」

それでボスはオレとコドラを捕まえようとしたんだが、もちろんあいつの母であるボスゴドラも、オレの母であるスターミーも黙っちゃいなかった。

「ま、待て！ お前たちのような悪党に我が同胞は預けられん！」
「おいおい、俺達の制服は確かに真っ黒だが、別に悪党と決まったわけじゃあないだろ」

「……ロケット団の悪名、この辺境にも届いている！ 誤魔化すな！」

「知ってるかこの世には正義も悪もないんだぜ」

「どのような言葉も所詮は詭弁にすぎん！ ポケモンの悪用は人間とポケモン共有の法律でも禁止されている！」

ボスは、真面目なのかふざけているのか分からないことばかり言うてはぐらかした。

「……で、だからと言ってどうするんだ？ お前に合わせて法律で言うんなら、『リーダー的存在のポケモンは、いかなる場合においても人間を傷つけるのを禁ずる』はずだろう？」

「……私が、なんとしても守ります。私の娘と、ボスの子供を渡すわけにはいきません！」

「ほほう、あんたの子供だったわけか。そりゃ必死になって止めるわな。なるほどなるほど、子供なら、突然慌てて止めるのも無理はないな。群れにいる他人ならともかくな」

「あっ、こ、このっ……！」

とことん嫌な性格をしていたよ、ロケット団のボスは。

オレの母も加わって、しばらくは論争だった。オレはそこまで詳しく法律を知らないから、あまり会話の内容は覚えてないが。

「……はあ、これじゃ水掛け論だ。ポケモンを説得するなんてのは、やっぱりに性に合わねえ」

「おい、出雲……！　もうやめにしたらどうだ」

「そうはいかない、二匹の6Vが並んでるなんて、この先十年経つてもあるかどうか。個体値の研究も充分に進んでねえんだ、このチャンスは逃せない」

「だからと言って、無理やり親子を引き離すのは……」

「ウインディ、人もポケモンも皆等しく親を持つてる。俺がポケモンを捕まえるにしたって、それは親の前か親の見えない所か、それだけの違いさ」

「また、そうやって屁理屈を……！」

「大人なんてのは屁理屈だらけさ。重箱の隅をつつき合って、先に何か見つけた奴が、いつの間にやら論議の勝者になってるわけだ。俺は苦手だな」

この出雲って奴、なかなか偏屈でな。ああ言えばこう言って、話が見えなかった。その上、面倒になったら力づくで解決するんだから、そこらへんの偏屈よりよっぽど厄介だ。

「埒が明かないから、ウインディ、適当に弱らせてくれ。ただ捕まえるだけなら、法には縛られないからな。別にいいだろう？　あ、お前らもう帰っていいよ。さっきも言った通り、乱獲は中止。本部

へ戻って、野生のポケモンの一匹でも育ててな」

ロケット団が大量にいたのはやっぱり乱獲するためだったらしくて、乱獲をやめると決めたボスは、他の下っぱ共を帰らせた。

「……しようがない」

弱らせろ、と命令されたウインディが、ゆっくりオレたちに近づいてきた。だけど、まったく殺気は感じなかった。今思い出してみると、むしろ、子供を優しくなだめるような雰囲気だったな。

あのウインディは弱らせる気なんてなかったんだんだが、当時のオレ達には当然知る由もなく、ただただ怖くて怯えてた。

「ひいっ……！」

「怯える必要はない。……君たちに痛いことなどしないよ。ただ、聞いてほしいんだ。この長も、聞いてはくれないだろうか」

「……………」

「おい、ウインディ？」

「確かにロケット団は悪名高いことで知られている。だが、つい最近、そこにいる出雲が新しいロケット団のボスとなったんだ。彼は、きつと何らかの形でロケット団を変えてくれる。その権力を利用して、こうやって強引に乱獲をしようとするような乱暴者でもあるが、優しいところもあるんだ」

ウインディは、私たちを説得しようとしたんだ。あの男のよさを並べて、納得させようとしてた。

「ポケモンに対して少し手厳しいこと、冷淡なこと、強引なこと嫌味なこといい加減なこともあるが、その、自分で捕まえたポケモンは、責任を持って育てる奴なんだ。奴なりの礼儀を持っているんだよ。……だから、というのもおかしい話だし、もちろん皆と別れるのは嫌に決まっているだろうが……懸けてみてはくれないか、この男に」

「……………」

何も言えなかった。彼女は冷静さを取り繕ってはいたが、すごく不器用に、若干照れながらすぐ後ろの男の良いところを言っていくんだ。

子供心に、「ああ、ウインディはこの人が好きなんだな」って気付いた。

でも、それとこれとは全然違う話だ。

「し、しかしだな……!」

「ボスたるものが親バカとはいけねえな」

「出雲は茶々を入れるな!!」

「はいはい、わかったわかった」

「まったく……! あ、えーと、それでだな、本当に普段はこんな偏屈な軟弱者なのだが、いざという時はポケモンを守ってくれる、根は、根は優しい奴なんだ。確かに出雲は厳しく、何度も辛い想いはするだろうが、あいつはポケモンを見捨てたりせず、どんなポケモンも強くなるよう育てるんだ」

捕まってもいいかもしれない。

そう一瞬だけ、確かに思ったよ。一匹のポケモンがこれほど好きになる人間なら、信頼できるかもとな。

だが、所詮それとこれとは全く違うことだった。

「えっ……!!?」

その瞬間、あいつ以外の全員が固まった。

私たちは――オレ達は、ボールの中に捕えられたんだ。

ウインディが話している途中でな。

油断していたオレ達は、たやすく捕まった。

「よいしょっ、と……これで二匹とも捕まえられたな」

ボールの中から、あいつがボールを拾うのを見た。

「出雲っ……お前!!」

「あれ？ 話して油断しているところを捕まえるって作戦じゃなかったのか？」

「……お前たち、最初からそのつもりだったのか!」

「違う! 私は……本当に、嫌がっているポケモンを捕まえるなんて嫌だったから……!」

「エアームドオー」

「はい、何でもしようご主人」

気付くと、あいつは違うポケモンを出していた。

「そらをとぶ、だ。本部へ戻るぞ」

「はい」

「ほらほらウインディ、早くしないと生きて帰れないぞ？」

くさむらや川から、様々なポケモンが出てきて、生きて帰すまいと近づいてきた。

「ぐっ……すまない！」

やがてウインディは諦めて、パッと消えた。どうにかして移動したんだろう。

「おー、相変わらず速いな。早くしろとは言ったが、俺たちより早く行く必要はないのに。なあ、スターミー、コドラ」

空の上で、あいつはオレたちに語りかけた。

それから、ロケット団での生活が始まったんだ。

スターミィの記憶。前編（後書き）

回想が入ったらワンピース並に続きます。

久しぶりにウインディ書けたやっほう

スターミリーの記憶。後編（前書き）

※重要な所を書き忘れていました。
既にみた人はもう一度流し見しておいてください。

スターミリーの記憶。後編

ロケット団に入ってから、文字通り毎日が戦いだった。

毎朝5時起きで、すぐに朝食。食事を終えたら、30分後にランニングと準備運動。そして実践訓練だ。

本部に入った直後に、オレはわけのわからない機械で、頭の中をかき回された。技マシン、とかいう、見かけはただの円盤なんだが、それに触れると気持ち悪くなって、頭の中に無理やり記憶を植え込まれるような感覚がする。

それが数秒続くと、またわけのわからないことができるようになる。電撃を撃てたり、氷を放てるようになったり、いろいろだ。人間の科学力ってのは、まったく、本当にわけがわからない。

士気向上のためか、実践訓練でいい結果を出していくと待遇が良くなっていく仕組みになっていた。ランキング100位以内のポケモンは個人で行動できるようになる、10位以内は個室、とかな。

オレは元から強かったから、はやい内から個室がもらえた。コドラもだ。

最初の内は、帰りたくてたまらなかった。だが、それも三カ月したら慣れた。

一年したら、他のポケモン達とも仲良くなれた。

二年したら、とりあえず訓練を頑張り始めた。

三年したら、うまい具合にサボるコツを覚えた。

そして、四年したら生活が嫌気がさしてきた。

「そこ、何さぼってんだ！？　たらたらすんなよ、昼飯抜くぞ！」
「す、すいません！」

驚くべきことに、訓練中のポケモンの管理はすべて出雲がやっていた。こればかりは、出雲でないとできないだかなんだか、言っていた気がするな。だからたまに目を盗んでサボることもできたんだが。確かに、この集団は揃いも揃ってエリートばかりではない。というか、むしろ使えない下っ端の方が多い。

だから、抜け出すことができたんだがな。

ある、夜のことだった。オレが、もうぐっすりと寝ていた時だ。

「――スターミー」
「うわっ……！　だ、誰？」

誰かが、小声でオレを起こした。

「私だ、ウインディだよ」

「あ、えっ、ウインディっ？　今まで一体どこに……？」
ウインディだった。

彼女は、オレが入ってからもしくはしばらくはロケット団の中で出雲と行動を共にしていたんだが、いつだったか急にいなくなってしまったんだ。あまりに急だったし誰も何も言わないから、自然と忘れかけていたんだが……その彼女が夜中に私の部屋に来たんだ。

「すまないが、理由は言えないんだ。そうだ、ココドラは？　個室の方か？」

「あ、はい、『ボスゴドラ』なら、個室です。どこかは分からないけど」

「……ああそうか。そうだな、進化していたっておかしくない。まあ、それはいい。言っておかなければならないことがある」

ただごとではない雰囲気だった。眠気もいつのまにか吹き飛んで、話を聞いたよ。

「……出雲が、お前たちを一軍にしようとしている」
「えっ!？」

一軍。

それは、出雲が正規で使う6匹の精鋭のことだ。

ここで育てられたポケモン達の、ゴール地点とも言える場所だった。

だが、それはここで生まれ育ったポケモンか、馬鹿真面目に頑張ってるポケモンだけだ。オレのように、隙あらばサボるような奴からしてみれば、そんなのたまったもんじゃない。

「そ、そんなの嫌ですよ!」

「ああ、……お前ならそうだろうな。とにかくだ、出雲の一軍になってしまえば、常に出雲の傍にいることになる。そうになったら手遅れだ。だから、その前に逃げろ」

「に、逃げる、って?」

ウインディは、そこで紙を取り出した。

「……非常用の避難経路だ。非常出口の位置はポケモンには知らされてないが、そこから外に出ることができる。鍵は壊しておいた。メンテナンスなんてほとんどしないから、しばらくは気がつかないはずだ」

「えっ……それって!」

「そう、外に出られる。ロケット団から解放されるチャンスだ」

「で、でも、ボールが……」

そう、ポケモンってのは、一度ボールの中に入ってしまったえば、相手の言葉一つで強制的にボールの中に戻ってしまう。それが壊されない限り、とても自由とは言えない。

「心配ない。ほら」

「あ、それ……!」

ウインディは、手にモンスターボールを持っていた。

「それ、私のボールですか？」

「ああ。幹部が持っていたから、適当に気絶させて奪っておいた。

……これを壊すのは、このモンスターボールに縛られたお前自身が
やった方がいいだろう」

「わ、分かりました」

オレは、急いでボールを手を取った。

モンスターボールは、いとも簡単に壊れた。

「よし、これで安心だな」

「でっ、でも……何で、私を？」

「……いろいろ、理由はある。とにかくだ、明日の朝、ボスゴドラ
を起こして一緒に逃げろ。夜に部屋から出たら怪しまれるだろうか
らな」

「わ、分かりました」

「すまない、まだ行かなければいけない所があるから、私はもう帰
るよ」

ウインディは、避難経路の地図を渡して、すぐに出て行ってしまっ
た。だけど、彼女はこうしたとか、そんなこと考えられないくらい
にオレは興奮してた。

それくらい、願ってもない幸運だったんだ。すぐにでもボスゴドラ
にこのことを伝えたかったが、確かに夜に部屋を出て怪しまれるの
は避けたかったから、我慢した。興奮して中々寝つけなかったが。

そして、朝になった。

「ココドラっ、あ、いやっ、ボスゴドラ！」

「うわ、何だ！？ ……あれ、スターミー、久しぶりー」

「すごい、すごいものをもらったの！」

「と、とりあえず落ちつけての！ 肩をゆするな！」

「あっ、ごめん」

オレは、誰よりも早く起きて、ボスゴドラの部屋を訪れた。まだ寝てるとか、そんなことおかまいなしに扉を勢いよく開けて飛び込んだ。

まあ、なんだ、それくらい興奮してたんだ。

「それで、何だよこんな朝早く」

「これ見てよ、これ！」

「……？」

ボスゴドラにも、その避難経路図を見せた。

「避難経路の道が書いてあるんだよ。これを辿って行けば、外に出られる！」

「えっ……えっ？」

「私たち、出られるんだよ、外に！」

「な、何言ってるんだ、スターミー？」

「だから……このロケット団から逃げることができるんだって——」

「そんなことして何になるんだ？」

「……えっ？」

しばらく、それがどういう意味だか理解ができなかった。それ以前に、思考が停止していた。

「いやっ……だから、私たち、このままじゃ、一軍になっちゃうから……その前に、逃げなきゃ……」

「えっ、一軍に!？」

ボスゴドラが驚いて叫んだ。

でも、それはオレと同じ意味じゃない。

喜びの叫びだった。

「マジかよ！ 俺、ずーっと頑張ってきたけど、まさか一軍になれる日が来るなんて……!」

「ね、ねえ、ボスゴドラ……」

「ん？」

「あんだ、一軍になりたいの……?」

「そりゃ、ここで訓練してる全てのポケモン達の目標なんだから、なりたいにきまつてるだろ！」

ここで、はっきりと頭が理解してしまった。

ボスゴドラは、ここにいることを望んでるって。

「……なに、何なの！？ ボスゴドラは、こんなところでロケット団なんかの為に働いてて悔しくないの！？」

「な、何だよ？ 別にいいだろ！ 今の俺達は、ロケット団の為に戦うのが目的なんだからさ！」

「むりやり、みんなと別れなきゃいけなくなっちゃったんだよ？ みんなみんな、ロケット団の仕業なんだよ！？ 忘れたの、4年前のこと！ みんなに会いたくないの！？」

「そ、そりゃあ……会いたくないわけじゃないけどよ」

「一軍になったって、死ぬまで出雲に利用され続けるだけなんだよ！？ 馬鹿みたいに訓練してさっ、訓練したって、自分の為じゃなくて、出雲の為なのに！ 自分の得にはなんないのに！ それで、目指すものだって、出雲のポケモンでしょ？ 家畜になりに行くよ

うなもんじゃん！　なんで分かんないのよ！」

「お、落ちつけて！　お前、なんかおかしいぞ？」

「おかしいのはお前らだっ！！」

私は……いや、オレは、ヒステリックになってた。今考えれば、もう少し冷静に話してたら、何か変わったのかもしれないな。もう確かめようもないけど。

「意味もなく闇雲に頑張って、ロケット団とかいう意味分かんない奴らに利用されて！　それで満足してるお前らがおかしいんだ！　そうだよ、なんでポケモンが人間なんかに運命振り回されなきゃいけないの！？　ロケット団に捕まってさえないなきゃ、私だって今頃、お母さんや、あんたや、他のみんなと一緒にいっぱい遊んで、いっぱい笑いあって、いっぱい恋して、ふつうの女の子でいられたのに！」

「そりゃ……みんなのことは今だって思い出すし、たまに、無性に会いたくなったりもするし、ロケット団がいなきゃ、今頃どうなってたんだろうな、とか考えるけどさ……」

「……………けど、何？」

「『これ』が、今だろ？　昔の事言っても、始まらないしさ。今を生きて、今の目標に向かって精一杯努力するから、俺達は前へ進めるんじゃないか？」

「は………？」

「もう、四年も経ってる。俺は、『今』の俺、ロケット団の俺として、頑張ってるよ。だけど、お前は『あの頃』のお前のまま、ずっとひきずつてるだけなんじゃないか？ ……まあ、それがお前の生き方だってんなら、逃げるのを止めやしないけどさ。俺はここに残るよ。残って、一軍になる。……出雲は、悪党だけど、悪い奴じゃないよ。だから、信じてみようかな、って」

「そ、そんなの……そんなのって……！」

正論かどうかは分からないが、当時の俺には、それがもつともない言いに聞こえた。

諭されているようで、悔しくて仕方がなかった。

オレはあいつを助けてあげるつもりだったのに、何で俺が子供みたいになってんだ、って。

「じゃあっ……じゃあっ……！ もう勝手にすれば！？ ロケット団に利用するだけ利用されて、過労で死んじゃえばいいんだ、アンタなんかっ！！」

「おいっ、あんまり大きな声出すなよ！ 見張りが来たら逃げられないぞ？」

「あ、アンタは、もうっ……！！」

馬鹿だろ、アイツ？

死ねって言われたのに、心配してくれるんだよ、オレのこと。

どこまでも馬鹿で、お人よしで。だからロケット団にもいいように利用されるんだろうけどな。

オレは、最後の最後で、やっぱりボスゴドラを外に連れて行きたく

なった。

けど、私は――オレは、逃げるみたいに部屋から出て、そのまま驚くほど簡単に外へ出た。

ボスゴドラの言う通りにしていれば、少なくともボスゴドラと一緒にいられただろう。

一軍の仲間に入り、悪名をとどろかせていたことだと思う。

だけど、オレは外に出たかった。

自由を選んだんだ。

だけど、……いや、だから、か。

オレは一人だった。

隣にアイツはいなかった。

それが、たまらなく悔しくて、悲しかった。

スターミィの記憶。後編（後書き）

回想書くのが苦手なんですよね…。
さて次からはようやくいつものメンバーが出てきます。

スターミーは仲間。

「――それから、怒りがロケット団からすべての人間に移るのはそう遅くなかった。誰でもいいから、人間を殺してやりたくなった」

「……そうだったのか」

「自分でも、分かっている。完全な八つ当たりだ」

みんなが静まり返っていた。

あの陽気なドクロッグも気まずそうに視線をそらしている。

それにしても、あのロケット団……出雲は、そこら中で動き回っているんだな。ボスがそんなふらふらしていいもんなのか？

それよりも、またロケット団に因縁のあるポケモンが仲間に……。

ボスゴドラって、十中八九あのボスゴドラだろうなあ……。

と、ふいにスターミーが笑った。

「どうしようもない屑だと思ったろう？ オレは、物事が自分の思い通りにいかなかったってだけでお前らに八つ当たりしたんだ」

「そんなこと、ないよ」

「気を遣わなくていいさ。自分が余計に惨めに感じるじゃないか」

「本心からだ。同情とか取り繕いで言ったわけじゃない。お前は屑なんかじゃないよ」

「……そう感じる理由を、教えてほしいもんだな」

「お前さ……ボスゴドラのこと好きだったんだろ？」

「——っ」

「分かるんだよ。なんとなーく、だけど……失恋したときの顔って」
スターミーが、露骨に目をそらす。やっぱり凶星なんだろう。

「そりゃ、自分じゃなくてロケット団を選んだんだから、振られた
つてのと同じだよな。悲しくて、悔しいに決まってる。だから、無
理もないさ。人間だって、色恋沙汰で殺人なんてやらかすんだから」
「殺されかけておいて、よく『無理もない』なんて言えるな」
「ああ。分からないでもないからな、その気持ち」

昔のことだけだな。

まあ、今言ったってどうしようもないから、言わないけど。

「……そうさ、オレはあいつが好きだった。頭の中じゃ、あいつと
一緒に走って逃げるなんていう、ロマンティックな状況が浮かんで
た。だけど、実際は違った。あいつは、オレよりもロケット団の方
が好きだった。オレからボスゴドラをとったロケット団が許せなか

った。ロケット団が、人間が、ボスゴドラをおかしくさせたんだって思った。……けど、実際のところどうなんだろうな。分からなくなってきた。軟弱だな、オレは。情けねえ限りだ。男に一回や二回振られたくらいでこんな混乱してよ」

「スターミー……」

スターミーは、自嘲する。

彼女の眼は、潤んだ。

一回や二回って言うけど……本気で惚れた人に振られたって考えれば、それがどれくらい辛いものかは想像がつかない。しかも、スターミーの大嫌いなロケット団に。

……いじっぱりだなあ、こいつは。

ゲームのスターミーとしちゃ、相性最悪だぞ？　なーんて。

「どいてくれ。……わざわざ回復までしてくれたってのは、逃げてもいいってことだろう？　オレは人の所有物にならない。一人で、目的を果たす」

「どうするつもりだ？　また、人間を襲うってのか？」

「言っただろう、それはただの八つ当たりだったって。……ただし、ロケット団だけは許さない。理屈並べても、憎いものは憎い。奴らを壊滅させなければ、オレの気が収まらない」

「お前一人で行く気か？　そんなの、また捕まるのがオチだろう！　何のために、ウインディがお前を逃がしたと思ってるんだよ！」

「今のオレは、ロケット団に縛られてはいない。中へ入って、ハイドロポンプで攪乱すれば捕まることはない。だいたいあんな集団、

真っ先に、出雲を潰せば、ただの烏合の衆だ。そして、説得なんて言わず、俺がボスゴドラを奪い返す」

おいおい……その出雲が問題なんだろうが。

ウインディがロケット団に潜入してまで、わざわざスターミーを逃がしたんだ。無駄にするわけにはいかない。
どうにか、説得できないもんかな……？

「……スターミー、今のお前じゃ絶対あいつには勝てない」

「何故、分かるんだ？」

「俺達に、勝てなかったからだ」

「……………」

「出雲は、お前よりもずっと強いポケモン、ずっと高い戦術を持ってる。俺達五人に勝てなかったんだから、まず無理だ」

「……あの時は、混乱してただけだ」

「ボスゴドラと戦うってのに、混乱しないって言えるのかよ」
「ッー!!」

スターミーの口が止まる。

「俺達は、一度出雲と戦った。あの時のボスゴドラ、あいつがお前の言うボスゴドラなんだと思う。出雲はやっぱり、ボスゴドラを一軍にしたんだ。だから、出雲を倒すのにはボスゴドラとも戦う必要がある。……出雲は、ある程度のプライドこそあるが、勝利主義者

だ。スターミー相手なら、平気でボスゴドラと戦わせる」

「……………それでも、やる」

「そんなこと、俺が許さない」

「お前には関係のないことだろ」

「ある。お前は俺たちの仲間なんだからな」

「……………つまだ言うか」

スターミーの目が微かに揺らぐ。

「お前が、野生として生きたいって言うんなら、それでもいい。人間なんかと一緒にいたくないって言うんなら、仕方ない。けどどな、お前がわざわざ不幸になりに行くような真似だけは絶対にさせない」

「……………どいてくれ。仲間だろうがなんだろうが、オレを止めるんなら容赦はしない」

「スターミーッ……………！」

こいつは本気だ。感情が高ぶってるとか、そんなんじゃない。一晚明けたって同じことを言うだろう。

でも、こいつをロケット団のところへ行かせるわけにはいかない。むぎむぎ捕まえられには行かせない。こいつをわざわざ逃がしてくれた、ウインディのためにもな。

なんとかして、説得するんだ。

そう思って、俺が動いた時だった。

俺よりも早く、誰かが俺の後ろから飛び出した。

そいつは、ゆっくりとスターミーの前に立ちふさがった。

「アブソルっ!？」

「……いっちゃだめ」

彼女は、幼いながらもしっかりとした目でスターミーを見据えていた。

「話を聞いていたのか？ 止めるなら、容赦はしない」

「……今のスターミーは本気だ。危険だ、アブソル!」

「シグは、ひとりでむちゃしすぎ。……わたしだって、みんなをまもりたい」

「アブソル……!」

「スターミー、わたしのはなしを、きいて」

「……………」

スターミーが、おそらくはハイドロポンプの標準を合わせるために、手をアブソルに振りかざしながら立っている。

……とはいっても、彼女がハイドロポンプを発動させるのに、ここまで時間はかからない。聞くだけ聞いてやる、ってことだろう。

「わたしたちも、ロケット団にはいんねんがある。……でも、この

前たたかってわかった。いまのわたしたちじゃ、ぜったいに
出雲には勝てない、って。だから、わたしたちは、シグと一緒につよくな
って、いつか出雲をたおす」

アブソルは、スターミーを見据える。

「だから、スターミーもいっしょにつよくなろう。つよくなって、
出雲をぜったいにたおそう」

「……………」

だけど、スターミーは何も言わない。

「スターミー。わたしたちといっしょに、いこう？」

それでも、アブソルは彼女の目を見続ける。

仲間として。新しい仲間を受け入れる、仲間として。

そして、スターミーが手を下げた。

今度は彼女が、みんなの目を見る。

「……アブソル。イーブイ。サイホーン。『こいつ』は、本当に信
頼するに足るトレーナーか？」

「もちろん!」「うん」「はい!」

三人が三人とも、とてもうれしい返事をしてくれた。

……本当にありがとう、三人とも。

「ケロ? 私は? 私は?」

「お前からはまともな返答が返ってくる気がしない」

「そんな酷い」

ドクロッグを一蹴するスターミー。

つかドクロッグ、お前だんだん耐性ついてきてない? イーブイのおかげ? あれ、イーブイのせい?

「シグ、っていったか」

「は、はい?」

いきなり名前を呼ばれるとは思わなかった。

でもまあ、アブソル、イーブイ、サイホーン、ドクロッグときて順番的には俺か。

「お前のポケモン達は、ロケット団にいた奴らとは全く違う目をしてる」

「ああ。俺たちは『ロケット団じゃない』からな」

「『俺が育てたポケモンだから』とは言わないんだな」

「もちろんだ。俺は別に、自分の育て方に自信がある訳じゃない。知識こそあるが、本当にポケモン達が求めていることができているのかどうかなんて分からないんだ」

俺がゲームから学んだのは、ポケモンを強くする方法。

性格や個性こそあるが、あくまでもゲーム上のシステムで、バトル以外では関係ない。

俺は弟も妹もないし、ペットもない、後輩を指導した記憶もない。ポケモンを強くする技術ならあるが、育ててる相手がどう思っているのかなんて、分からない。

……ただ、

「ただ、俺はポケモンを愛してる。それは、トレーナーだと言える最低条件だと思ってる。……みんながロケット団みたいな奴らじゃない、むしろポケモンが大好きなトレーナーの方が多い。俺は、そのポケモンが大好きなトレーナー達の一人にすぎないよ」

スターミーが納得できる答えを、探す。不器用ながら、言葉をつないでいく。

「だから……頼むから、ロケット団だけを見て人間を決めつけないでほしい。お前が思ってるより、ずっと世界は広いんだ。だからさ、

スターミー。……一緒に世界を見てみようぜ」

「……ふん。まあ、上出来だ」

「ありがとよ。じゃあ、お前の答えは？」

「一緒に行くよ、——お前たちと」
「よっしゃあ！」

その途端、みんながスターミーに抱きついた。

「——うわっ!？」

「「「よろしく、スターミー!」「」「」」

抱きついた四人が声を合わせて言った。

「ちよっ、離せっ……!」

「よいではないかよいではないかー! ケーロケロケロ、シグの仲間になったポケモンはみんなに抱きつかれる仕来たりなのだ!」

「嘘つけ! つーかお前だって今日仲間になったばかりだろ!」

「お、おいおい、一日でこんなに打ち解けるものなのか……?」

「だいじょぶだいじょぶー。ドクロッグは慣れ過ぎ!」

「そーかな? 別に普通だと思うけど?」

「……………べたべたしすぎ。やだ」

「アブソルちゃん、最近イーブイちゃんに似てきたんじゃないかな……？」

「それって遠まわしに私が毒舌って言ってるの？」

「ソナコトナイヨ」

「何故に片言……？」

「…………ふふ」

「お？　今笑ったねスターミー！」

「あ、いや……そんなことない」

ん？

なんか、一瞬だけスターミーの雰囲気違って見えたような。

以前の、ロケット団に入る前のスターミーの姿、なんだろうか？

いつか、俺たちにそうやって接してくれる日が来るのかな。

だとしたらそれは、たぶん、俺たちを認めてくれたってことで。

自分の居場所を見つけたってことだよな。

……よし、なんかまたやる気が出てきた！

「よっしゃ！　スターミーが仲間に入ったら、今日は二人分の歓

迎会をやんなきゃだな！　ちよつと待っててくれ、焼き肉買ってくる！」

「ふおおおおおつつつ、や、焼き肉ですかっ」

「さかなはー？」

「いや、魚は今回は無理かなあ」

「……ふにゅー」

「まあまあ、おいしい焼き肉買ってくるからさ！」

「もふっ」

「アブソルって、口数少ないのに分かりやすいよなあ……」

とりあえず「もふ」はアブソル語で「うれしい」で確定したな、うん。

「お、ってことは私も羽目はずしていいのかな！？」

「お前常に外れっぱなしだろーが！」

「シグ、シグツ、ピーマンもよろしくね！」

「あー、そういえばお前は草食だったなあ。分かった、他にもどうもろこしとかいるか？」

「どうもろこしっ！　いるいる！」

「マ、マスター……焼き肉、たくさんお願いしますっ」

「はは、分かってるって」

イーブイは、未だにあの味が忘れられないんだなあ……。

「ふふん、こういうときくらいは空気読んで食べるかなあ。どーせ明日特訓するんでしょ？」

「そうだな。あんまり食べ過ぎて腹壊すとかはやめろよー？　特に

リトル三人組」

「し、しつれーなっ！ 私はサイだよ！ サイは頭も胃も頑丈なんだから！」

「結局食べ過ぎる気満々じゃねえか。お前らの歓迎会じゃないんだから、頑丈だろうがなんだろうが食べ過ぎない！」

「大丈夫です、私は焼き肉しか食べませんから！」

「焼き肉がメインだから！ ほとんど焼き肉しかないからっ！」

まったくこいつらは……ドクログとスターミーの歓迎会だったのに。

「そうだ、スターミーは何か好物とかある？」

「……そうだな。魚とか」

「さ、魚かあ……じゃあ、買ってくるかな」

「いや、いい。……アブソル、魚、好きなのか？」

「うん」

「採ってきてやるよ、その川で」

「わたしもいくっ」

「いや、ここらへんには魚はいなくてな……少しばかり上流に住んでるんだ。オレ一人が行くよ」

「……わかった」

「大丈夫なのか、一人で？」

「おいおい、4年ぶりとはいえ、毎日ここで遊んでいたんだぞ？ それに、オレは水タイプだ、溺れることはないさ」

「そっか。それもそうだな」

こうして、この世界に来て二度目のバーベキューをすることになった。

今度は、六人で。

スターミーは仲間。(後書き)

時雨「すたぁーみー、すたぁーみー」

スタ「どうした時雨。そんなゾンビみたいなポーズで」

時雨「話を引っ張りすぎだよ、スターミー」

スタ「いや、あんたが書いたんだろ」

時雨「いつになっても、話が長引く癖が直らないなあ……」

イブ「ダメ作者ですねえ」

時雨「そこー、ドS属性発動しなーい」

第二回 バーベキュー回。

4年ぶりの道を、ゆっくりと歩く。

4年ぶりの木々、4年ぶりの川。人間があまり来ないここは、今までとあまり変わらない。

そして、その川の中で、何か泳いでるのが見えた。

ああ、あれで間違いない。

「――母さん」

『私』の、母親だ。

オレより少し背が低くなった、同じスターミー。

彼女は、オレを見るなり目を見開いた。

「あっ……そ、そんな、まさかつ、スターミーっ!？」
「久しぶり、母さん」

できるかぎり笑顔を作って、なんでもないように話す。

「ど、どうしたの？ ロケット団云々っていうのは？ 逃げてきたの？」

「ああ、いやまあ……その通りなんだけどさ」

どうも歯切れが悪くなってしまう。

そりゃそうだ。ロケット団から逃げてきたのはいいが、さっそく別のトレーナーに捕まったんだから。

「逃げてきたはいいけど、また捕まっちゃったよ。別のトレーナーに」

「えっ……そ、それならなんでここに？」

「『抜け出して』きた」

「……そうなの」

若干の寂しさが、表情から見て取れた。

再会できたと思ったら、また別れるんだから、オレだってさみしさはある。だが、ロケット団みたいにポケモンを悪用する奴らに捕まるならいざ知らず、ポケモンがトレーナーに捕まるのはもう仕方がないことだ。

だから、母さんはすぐに気を取り直して笑顔になった。

「それにしても、大きくなったわねえ……いつのまにか背も越しち

やって。髪も長くなっちゃって。切ってあげようか？」

「いいよ。……この方が、今のオレらしいから」

「あら？ 何か、あったの？」

母さんが尋ねた。口調の変わりぶりに気付いたみたいだ。

「ボスゴドラ……ココドラの奴さ、ロケット団を気に入ったみたいで、まだあそこにいるんだ」

「あら……そうなの？」

「それでかな？ 『私』が、まだボスゴドラから離れようとしなんだ」

ボスゴドラが好きな、女の子の『私』。

それが、心からぽっかりなくなってしまった。ボスゴドラの吸い寄せられるように、より強い磁石に引っ張られるように。

そうして、オレだけが残ってしまった。

「だからさ、オレはもう一度ロケット団のところへ行こうと思う。今度は、ボスゴドラと『私』を取り戻すためにね。新しい仲間と一緒に」

「よく分からないけど……また、行っちゃうのね？」

「ああ。ごめん」

感動の再会って言うには、少し短すぎる時間だな。

でも、オレはこれだけ伝えられれば充分だ。

「母さん。オレはずっとロケット団で嫌々暮らしてきたけど、今度
は違う。ちゃんと、自分の居場所、みたいなものを、見つけた気がする。
……だから、これ以上心配する必要はないよ。それだけ、伝えたくて、こっさり抜け出してここに来た」
「……そう」

母さんは、少しだけ寂しい顔をしたけど、すぐにまた笑顔になって
オレを見つめた。

「ならいいわ！　あなたが満足なら、私も口の出しようがないしね。
その仲間さんと一緒に、好きなどころへ行ってらっしゃい」

「……うん」

これでいい。

別れを後悔するつもりはない。

あとは、魚を採って帰るかな。新しい仲間の為に。

「今日のご飯はああああ、焼き肉かあああああつ！！？」

「「焼き肉だあああああ！！！」」

「なまにくだー」

「焼けよ！」

スターミーとドクログの歓迎会って言ってたけど、俺もスターミーがいらないのに勝手に盛り上がっていた。というか、まだ焼いてすらいらないのに盛り上がりは絶頂だった。

おっ？ スターミーが帰ってきた。

「おい、アブソルー。魚、採ってきてやったぞ」
「もふもふもふうっ」

合計3もふ出ました。

どれくらいうれしいのかは知らん。

彼女が持っていた二匹の魚の、大きな方を遠慮なくぶんどっていく。

「さあ、じゃあバーベキュー始めるか！」

「「「おーっ！！」」」

「さかなおいしい」

「だから焼いて食べろおおおっ！」

「元気だなあ、お前ら……」

「まあまあ、せっかくの歓迎会なんだ、これくら盛り上がらなきゃな。それに、お前も今日の主役なんだ。少しくらい羽目はずして、盛大に食べようぜ」

「……そうだな。最近はろくなものも食べていなかったし」

「よっし。じゃあ、あのお祭り騒ぎに加わろうぜ！」

すぐそこでは焼き肉の取り合いが繰り広げられていた。

アブソルも生で魚食べたから焼き肉の取り合いに即参加。

サイホンも器用にとうもろこしを焼きながら待ち時間で焼き肉を食べ、イーブイは誰よりもすさまじいオーラで焼き肉を死守している。

ドクログはそれをものともせず箸で焼き肉をすくっていく。

って、

「俺にも食べさせろよ！　なんでもう焼き肉が半分近く消えてるんだ！」

「ふっ……シグ、自然での食事はこれすべて戦いなんだよ」

「せめて歓迎会という人間のイベントのときに戦うんじゃない！　郷に入っては郷に従う！」

「とりあえず、魚を焼くか……」

「今はやめとけスターミー。アブソルにとられるぞ」

「ふいうち」

「うわっ!？」

ポケモンの技まで使ってスターミーが持っていた魚を掠め取るアブソル。

つうか、今の技はどっちかつうと「どろぼう」じゃないか？

「おい、アブソル！　スターミーの魚を盗むな！」

このままではスターミーの取り分がマジで無くなる！

そう思って没収しようとしたが、それはスターミー自身が止めた。

その隙に、アブソルは魚をぺろりとたいらげてしまった。

意地汚い。ふだんの大人しさからは想像できないくらい意地汚い。

「……ふっ」

「どうしたスターミー？」

「アブソル……いつからオレが魚を二匹しか持っていないと錯覚していた？」

「な、なにっ」

なにっじゃねえ。

スターミーが、胸に巻いた布と腰に巻いた布から、魚を二匹ずつ取り出した。

合計4匹。

つうか、あの面積の小さい布からどうやって魚を4匹も……。というか、暴れる魚を忍ばせて涼しい顔をしてたってのもすげえ。

「修行が足りないな、アブソル。視覚からの情報でしか行動できないとは」

「……またとればいい」

「甘いな。ふいうちされると分かってわざわざ真正面から突っ込む馬鹿はいない」

「……？」

「そういえば、サイホーンが『食事は戦い』と言っていたな」

ビリリッ。

電流の音がして、突然アブソルが動かなくなった。

「でんじはだ。覚えておけ、『ひとのものをとったらどろぼう』なんだよ」

……すげえ。

ごくごく当たり前のことを名言っぽく言っただけだ。

「うご……かない……」

「ではオレは焼いた魚を美味しく食べてくる。そこで指を咥えて見ているといい。とはいっても、咥えられないだろうがな」

「シグ……シグう……」

「まったく……食い意地はるからこうなるんだ。ほれ、まひなおしスプレーを吹きかけろ。そしてしばらくすると、起き上がった。」

「おとなしく、やきにくたべる」

「それがいいな」

もう半分しかないけど。

結構多めに買ったのにこれって、絶対誰か生で食べてるだろ。

ていうか、そんなことはどうでもいい。

「お前らあああ！俺にも食べさせろおおお！！」

今日の戦果。
焼き肉二枚。

「……疲れた」

「お疲れー。いやー、楽しかった！」

「まあ、ドクログが楽しかったんなら別にいいんだけどさ……
つたく、あのリトル三人組め」

ドクロッグが適当に茶々を入れたりしていたが、結局一番食べたのはあいつらだった。
今は真っ先に寝ている。

そして俺たちは、今度はゆっくりと雑談。

「しかし、今日は本当に濃い一日だったな」

「ほんとほんと。私に加わってから、ポケモンタワーで出雲たちを倒して、カフェで休憩して、それからスターミーを捕まえて……」
「その前にはジム戦もやったんだよな。はーっ、本当、77日間分くらいあった気がするよ、今日は」

「シグこそ、その生々しい数字はどこから出てきたの……？」

「……シグ、ちょっといいか？」

「ん？ どうした？」

さっきまで木に寄りかかっていたスターミーが、話しかけてきた。

「今日お前らと本気で戦ったときの違和感を言っていないか？」

「……ああ。なんだ？」

「まずイーブイは、相応の実力だった。ドクロッグに至っては、出雲のメンバーともまともに戦える実力を持っている。……だが、残

りの二人は、実力が能力に振り回されてるような気がした」

「実力が、能力に振り回されてる……？」

「潜在能力は、出雲のメンバーと同じでずば抜けてる。……だが、扱いきれていない」

「なるほど……」

「何も、それが駄目だって言ってるわけじゃない。ただ、非常に惜しい、とな」

「……まあ、少しずつ慣らしていくしかないよな」

「そうだな。でも、少しでも早く慣らすくらいはできるだろう？」

「……？」

「明日の朝、オレも特訓の手伝いをする。いいか？」

「そ、そりゃもう大歓迎だ！ 頼んだぞスターミー！」

「まあ、打倒出雲というからには、本気でかからなきゃな」

「じゃあ、私もお手伝いするよ！」

「ああ、頼む。よし、明日は忙しいな！」

こうして年長組三人も、明日の特訓に向けて寝ることにした。

第二回バーベキュー回。(後書き)

ドク「結局、シグの言ってた生々しい数字は何だったの？」

時雨「あれさ…実は、あれ一日を書くのにかかった日数なんだ」

ドク「さすがに伸ばしすぎでしょ…？」

時雨「うん。伸ばしすぎた。なにせ、全話中のほぼ半分くらいあの一日で埋まっちゃったからね」

ドク「うわお……」

特訓。(前編)

「――シグゥ。朝だよー。起きろー」

ドクロッグの声が聞こえる。

ああ、そういえば、今日は特訓の日だったっけな。すっかり熟睡してた。

情けないな……結局俺もだいぶ疲れてたってことか。

ドクロッグって、本当意外なくらい働きの者だよな……後でお礼を言っておこう。

「シグゥ？　どしたの？」

「ああ、今起き――うわぁっ！？　顔近っ！！」

目を開けたらニヤニヤしたドクロッグが視界を占領していた。

なんかもう少しで鼻が触れるんだけど、これ！

「あらら残念。いやー、シグが起きるまでの時間、少しずつ顔を近づけていたのだよ。もう少しでキスできたんだけどなー」

「こんのバカガエルっ……！」

「てゆうか、ここまで近いんだからいつそのことしちゃえばいいんじゃない？ よーしそうしよう！」

「やめろコラアアアアア……！」

「朝からセクハラとは賑やかだな、お前ら……」

「いるんなら止めるよスターミー！」

「馬に蹴られて死にたくはないんでな」

「恋路じゃねえええ！ つーかお前も今さっきセクハラって言っただけだろうがあ！」

「……はー。疲れた。なんで朝から疲れなきゃいけないんだ」

「でも、目は覚めたでしょ？」

「あまりの疲労感にもう一度寝たい」

「だが、そんな暇はないからな。あいつらの為にも」

「そんなこと、トレーナーの俺が一番分かってるさ。さて、あいつらを起こしに行くか」

案の定、隣のテントで寝ている年少組は、起きる気配ゼロで熟睡していた。

まあ、昨日はみんな頑張ってくれたしな……。でもだからと言って、甘やかしてはいけない。きっちり起こしてやらないと。

「ほら、三人共！ 起きろ！ もう朝だぞ！」

起こす。

だが、

「……………」 「……………」 「……………」

起きねえ。

「お・き・ろおーっ!!」

「……………うるさい」

シグの　どなりごえ！　こうかは　いまひとつの　ようだ

つかアブソルお前、うるさいって言ったな今。

「うーん、どうしたもんかな」

「おやおやシグう、子供を起こすこともできないようじゃまだまだだねえ」

何がまだまだかはよく分からないが、確かにトレーナーとしてはよくないだろう。
うーん。

「みんな起きろ！！　ドクログがお前らを襲いに来るぞ！」

「シグは私のことをなんだと思っているんだい？」

「「「い、いやーっ！！」」」

「わーみんなわたしのことをなんだとおもってるんだろー」

というわけで、ドクログへの多大な精神的ダメージを払ってみんなを起こすことに成功した。

「まったく、今日は特訓するっていったら。ほら、さっさと顔洗ってこい」

「うえー、シグが厳しい」

「どーこがだ。昨日、めいっぱい焼き肉食ってたのを忘れたとは言わせねえぞ」

「はい……」

三人共、ふらふらとおぼつかない足取りで河原へ向かっていった。

すごく不安。

「言っとくが、不調でもやらせるぞ。実力は伸びなくても、体調管理の大切さをきっちり教えることならできるからな」

「なるほどな……。でも、あの調子なら大丈夫だろ」

「どこをどう見たら、今のが大丈夫に見えるんだ？」

「まあまあ、あいつらはああ見えて単純だから」

「どこをどう見ても単純にしか見えないんだが」

「よっしゃ！ さあシグっ、特訓始めよ！ いやー、朝は気持ちがいいね！」

帰ってきたサイホーンが、さっそく元気良かった。

「め、さめた。はいてんしょん。かつかー」

「お姉ちゃんもすっかり元気だね。あくまで比較的に」

「かつかー」とは何の音だろうか。目がさめる時の「カツ」みたいな？

「でも、どんな風に特訓するの？ また周りのポケモン達に手伝ってもらおう？」

「いやいや。今回はそういうのはなし。だって、せっかく6人いるんだぜ？」

「……？ どゆこと？」

「サイホーンはドクロッグと。アブソルはスターミーと。そして、イーブイは俺とだ」

「げっ」

「さーて、サイホーンちゃん？ 私があー、手取り足取り教えてあげるよぉ〜？」

「いいーやあーっ！ 私がシグとするのーっ！！」

今まで嫌がられていた腹いせか、変にハイテンションなドクロッグ。そして、ずるずると引きずられていくサイホーン。

……本当に大丈夫か不安になるけど、まあドクロッグはやる時にはやる奴だから大丈夫だろう。

「わたしは、スターミーとなにをするの？」

「簡単なことだ。ひたすらオレのまねをすればいい」

「ふ〜ん……？」

アブソルとスターミーは、意外とすんなり歩いて行った。

……さて。

「あの……マスター。失礼ですけど、人間のマスターが私と何を特訓するんですか？」

「特訓のすべてが実践とは限らないぞ？ 俺とやるのは、イメージトレーニングさ」

特訓、開始だな。

「ほれほれ、私に一発当てたら終わりだよ？　がんばらばー」
「なっ……何が手取り足取りなのさっ……！」

当たりに行っても当たりに行っても、ことごとく避けられる。
実体のないものを相手にしてるみたいだ。

特訓の内容は、「ドクロッグに一発でも攻撃を与える」。
これをクリアできれば今日の特訓は終わり。

まあ、そう簡単にできるわけないんだけどさ。

「ほおら、集中集中」

「ど、ドクロッグが気の抜けた声出すから集中できないんじゃないっ」

「人のせいにしない。だいたい、誰と戦うか分かんないってのに、んなこと言ってたらきりないでしょ。挑発なんてだいたいそんなもんだよ？」

「ううっ……た、確かに」

「でもさ、この特訓、なんか雑じゃない？ シグの特訓は、確かに強くなってるって実感あったけど……これ続けてて、本当に意味あるの？」

「……ほほう」

そう言った途端、ドクロッグの顔が変わった。

まるで、自分のプライドを思いつきり傷つけられた、みたいな。笑ってるけど、目が笑うのをやめた。

確かに、ドクロッグは怒ってた。

「——サイホーン。あんたは、この私が、武道家の私が、シグみたいなド素人より教え方が下手だと。そう言いたいわけだ」

「いや……だ、だって、攻撃したってどうせ避けられ続けるだけだ

し。それじゃ、むしろドクロッグの回避の練習にしかたないよ
うな……」

「自惚れんなっ!! あんたの、ガキでも避けれる攻撃なんて回避
の練習になんかなるか! 一発でも当ててから言いな! 今までの
敵は弱いのは確かだったんだろうけど、これからはそううまくいく
わけがない。これから、一生敵に勝てなくなるよ?」
「うっ……」

「この特訓は、一旦やめよう。……あんたは、まずその認識の甘さ
から直さなきゃいけないみたいだねえ?」

「はっ、はい……」

返す言葉もなかった。

やっぱり、ドクロッグもものすごく強いポケモンなんだ……。

改めて、自分とドクロッグの遙かな差を見せつけられた気がした。

「まず、あんたは自分の位置が分かってる？　どれくらいの強さってことがさ」

「えっと……イーブイとアブソルにはたぶん勝てるから、この中だと三番目？」

「ぶつぶー。つか、ばあーか」

「ひどっ！」

よっぽど私が悪いこと言っちゃったのか、さっきからドクロッグが素だ。素になってる。

「酷いもんか。いくらなんでも自惚れすぎ。はっきり言ってやろうか？　あんたはこの中じゃ6番目だよ」

「ろ、ろく……？　って、今、5人しかないよね？」

「なに、自分のマスターも分からないって？　シグ含めて6人ね」

「え、ええっ！？　なんでシグよりも弱いのかさ！」

「当たり前でしょ？　どんな馬鹿力でも当たらなきゃただのバカよ」

「い、いやいやちょっと……さっきから毒舌すぎでしょ！」

「はいー？　なんですかー？　んじゃあやさしく赤ちゃん言葉で話してあげましょうかあー？」

「くっ、くうう……っ！」

「まったく、訓練のときくらい、私だって本気になるよ。んで、あんたはまず攻撃することばかり考えて、攻撃を当てることを考えてない。そんなじゃ当たるわけがないよ。100だろうが100000だろうか、0でかければ0ね」

「ま、まあ確かに……でも、今まではちゃんと当たってたよ？」

「だからー、それは相手のポケモンも未熟だったからよ」

「で、でも、ロックカットって技を使えば速くなるんだよ！　スピードで補えば問題ないでしょ？」

「まだちゃんと努力もしてないのに別の能力で補うことなんか考えんなバカホーン」

「うう……」

さつきから、毒を吐かれっぱなしだ。

さすが毒タイプ。

あれ、関係ない？

「とにかく、命中力の重要性が分かったところだし、もう一度――」

ズガアアアンツツ！！

「うわわっ!」 「ケロおッ!？」

突然、激しい地鳴りがした。

音がした方を見ると、なにやら煙が上がってる。……アブソル・スターミー組の方だ。

「あーびっくりした。派手にやってるねえ、あっちは。新技でも習ってんのかねえ」

「うぐ……アブソルは、もうそんなところまで……」

私は、ここでひたすら鬼ごっこ。

でも、それだけ自分が未熟ってことか……。

「ドクログ……特訓、やろう」

「おお、やる気になったかな？」

「アブソルには、負けてられないもん!」

「その意気その意気! よき友、そしてよきライバル。ついでによき先生。いいねー青春」

こうして、また特訓が始まった。

特訓の内容は、一切変わらない。ドクロッグに攻撃を当てるだけだ。

……落ち着こう。

落ち着いて、ドクロッグに狙いを定めるんだ。

……

「たあああっ！」

「はい残念」

今度は突進を使わずに手を突き出したけど、やっぱり避けられる。

「わわっ……！」

勢いにのっていたから、そのまま止まらずに転んでしまった。

「狙いすぎ。それ以外のこと全然できてないじゃん。まったくも
ー、不器用め」

「たあっ！」

次は、一直線にドクロッグに向かって突進する。

「はい外れ」

今度も勢いは殺しきれなかったけど、二、三回転がりながら、うまく間をおかずに立ち上がった。

そのまま、またドクロッグに向かって思いっきり跳ねる。その勢いのまま、ドクロッグに目がけて腕を振りかぶった。

「外れ」

でも、また外れる。今度はジャンプしてたから、そのまま地面に叩きつけられた。

「相手を点としてしか見てないみたいだね。相手は人形じゃない、動く生き物だよ？ ある程度避けるのも想定しながら当てにくく。

あ、それと。跳躍はよっぽどのがない限りしちゃダメ。無防備になっちゃうから」

「わかった！」

返事をして、またドクロッグへ突進。だけど、案の定避けられる。

「ほら、また雑になってるよ！ 一つ一つの攻撃に、『当ててやる』って気持ちを思いっきり込める！」

「うん！」

もう一度、落ち着く。

深呼吸。

「っ！！」

もう一度、突進。

もちろん、避けられる。

周りの声が聞こえない。

勢いを殺す必要はない。

その勢いのまま、曲がれば――

「っ！！」

「おおうっ！？」

そのまま、ドクロッグの至近距離で方向転換。

駄目押しの突進。

これなら――！

「危なっ！」

だけど、

私はその勢いを逆に利用されて、投げ飛ばされた。

さっきの突進と一緒に。

そのまま叩きつけられ、地面を転がった。

「あ、危ない危ない……もう少しで当たるところだった」

「……今の中でも、当てらんないか」

自分で言うのもなんだけど、今のは会心の一撃だと思った。

完璧だと思ったのに――。

「あれ？ 何落ち込んでんの、サイホーンちゃん」

「え？ だって、決まらなかったし……」

あれ？ サイホーン、ちゃん？
戻った？

「とんでもないとんでもない。完璧だったじゃん、今の。正直あそこまでできるとは思わなかった」

「え、えっ？ でも、当たらなかったじゃん？」

「いや、最初っから当てることなんてできないよ」
「……え？」

「よく考えてみ？ 危険予知も持っていて、回避に自信のある私が、さらに回避に専念してるんだよ。そんなん、出雲のポケモンといえども当てるのは無理」

「……じゃあ、この特訓は？」

「だから、命中率を上げる特訓だってば。私相手に手をつかわせたんだから、すごいよ。なんたって、攻撃がすぐそこまで届いたんだから。ただ、本当に当てるのはまだ早い。ただ、当てられたら、出雲のポケモンに技をかわされることは絶対ないね。私、回避だけには絶対の自信があるから」

「え、ええー……？ なんか、騙された気が……」

「でも、そんなもんよ？ 攻撃なんて、『避けよう』と身構えてたら避けられる。忘れないで、これは出雲のポケモン達でも同じ」

「……つまり、どういうこと？」

「警戒されてる状態じゃ、技なんて当たりっこないってことさ。いい？ 私までとは言わないけど、ぶっちゃけ大技を出す前は油断させることが大事。どん引きさせるくらい変な行動したって構わない。

ただ、それ一発で決めるつもりでね」

なるほど、いつもドクログがふざけてる理由はそれなのか……あれ？ 違うのかな？

ともかく、今日のところはこれで合格らしかった。

「それじゃー、帰ろっか。単純な特訓だったとはいえ、たぶん一番乗りだよ」

「……うん」

でも、納得がいかない。

ドクログに勝てないっていうのは、もう最初っから分かり切っていることだけどさ……。

それでも、ドクログを出し抜きたいって気持ちがある。どこかにある。

「ドクログ！」

「ケロっ？ な、なにになに？」

「いつかドクログに、一発当てるから！」

「……ふふん、できるかな？ まあ、その意気やよし。がんばれー」

ドクログは、手をひらひらさせて笑ってる。

……でも、いつかその余裕を崩してやるんだから！

私、サイホーンは、ひとつ目標ができた。

特訓。(前編)(後書き)

どんどん前後編に分かれるのが当たり前になって来てる・・・。

特訓。 (後編) (前書き)

みなさん明けてましておめでとうございます。

特訓。(後編)

「……わたしは、どうすればいいの？」

スターミーが、しばらく歩いたあとに止まった。

それから、ずっとわたしの顔を見ている。

「とりあえず待ってくれ。もう少し」

スターミーは、あいかわらずわたしの顔を真顔で見ている。

すごくしんけんだから、つつこみづらい。

「アブソル、お前、何の技が得意だ？」

「えっと……ちょうはつ、ふいうち、おいうち、だましうちがとくい」

「もう少し違う言い方出来ないのかお前は。それだけ聞けばただの悪党だぞ」

そんなこと言われてもほかに言いようがない。

「特殊技は使えないのか？」

「いちおう、かまいたちは使える」

そうか、とみじかく返して、スターミーは後ろに下がった。

「やってみろ」

自分の胸をたたいて、言った。じぶんについてみる、ってことかな。そのときに、スターミーとわたしの胸の差にきづいておちこんだのはひみつだ。

「……いいの？」

「躊躇うことはない。おもいつきりやってみろ」

おもいつきり、って言われても……そんなかんたんにできない。でも、しかたないからやってみる。

かまいたちをつくるのは、けっこうむずかしい。
かぜをつかむイメージで……それを、そのまま投げつけるかんじ。

えいっ。

「……意外とできるじゃないか」

スターミーは、少しだけ感心したように笑って、

当たり前のようにわたしのかまいたちを消し去った。

バリバリバリッ！！　って、すごい音がする。

聞いたことがある、というか、受けたことがある、というか。

「十万ボルトが怖いようだが、いちいち受けた技を怖がってはいけませんぞ」

「……わかってる」

それより、あっさりとじぶんのわざが消されたことにがっかりした。しよっく。

「さて、問題はここからだ。オレが言ったこと、覚えてるか？」

「スターミの技を、まねする、っていうの？」

「ああ。――やってみろ、今の」

「えっ……いきなり？」

「無論だ。かまいたちができるってことは、イメージはできるんだろう？　同じだ、電撃を放つイメージを持って、実行する。これだけだろう？　そこの草に向けて打ってみろ」

……あんまりだ。

でも、やるしかない。

こう、……でんげきを、はなつイメージ？

それを……放つつ。

そのとき、「ボウっ!!」と音がした。

「ちょ、何してんだお前!」

「えっ? ——ぎゃんっ」

なんかよくわからないけど、いきなり水をぶっかけられた。
べつに技じゃないからダメージはうけないけど、それでも痛い。

「え……わたし、なにしたの?」

「周りを見つてみる、この馬鹿!」

周り……?

周りの草は、黒こげになっている。
十万ボルト、成功したんじゃないの?

「黒こげどころか、消し灰になってるだろ。お前が今放ったのは、『炎』だ。まったく、なんで電撃を出せと言ってるのに炎が出てくるんだ、不器用め」

「ほのお……？」

「火炎放射、ってやつだ。オレはできないけど」

「へえー……」

「へえー、じゃない。ここらを火事にするつもりか？ まったく……危なっかしいから、これは後回しだ。次は、これをまねてみる」

そう言うと、スターミーは下の草に手をかざした。

すると、手から光線が放たれ、みるみるうちに草が凍った。

「冷凍ビーム。凍らすイメージだから、間違っても炎が出ることはないだろう」

「ふーん……凍らせる、イメージ。やってみる」

たしかに、そのとおりだ。マイナスのイメージなら、プラスのイメージはでてこない。

凍らせるイメージ、凍らせるイメージ……。

……それっ。

何故か、ビームとはかけはなれた黒いかたまりが、スターミーへとんでいった。

「うわあっ!？ 何するんだこの馬鹿!」

「え? ——むぎゃっ!」

今度は、さっきより数段つよい水をかけられた。すっごく痛い。

「え、え……? 何したの?」

「よりにもよって、オレにゴーストタイプのシャドーボールを放つか!？ もう不器用っていう範囲を超えてるぞ!」

「えっへん」

「威張るな!」

おこられた。

「まったく、本当に訳が分からない……。確かにシャドーボールもマイナスのイメージだが……」

「すごいのか?」

「すごくない。出そうとした技が出ないなんて、失敗以外の何物でもないだろう」

「……たしかに」

「こうなったら、オレだってとことん付き合うぞ。お前は特殊技の素質があると思っていたけど……イメージ通りの技が出ないなら、

危なっかしいことこの上ない。もう少しで大ダメージを受けていたところだ。ほら、もう一回やってみろ！」

「……はーい」

わたしは、どうやらとても不器用だったらしい。

そのあとも、かみなりがでたり、何故かふいうちをつかってしまったり、あたりがふぶきでつつまれたり、いろいろ散々だった。

でも、しばらくやって、ようやくイメージが固まってきた。

スターミーに、ものすごくめいわくをかけながら。

あたりの木々も、燃えたり凍ったりなぎ倒されたりいそがしい。

「……これで、やっと成功率は九割ってどこか。まあ、良く頑張ったな」

「ありがとう」

「だけど、まだたまに失敗してるってことだ。イメージをこれからもかかさず固めろ」

「……はーい」

スターミーはあめとむちがすぐかわる。いそがしい。

わたし、アブソルは、ひとつ課題ができた。

「さて、イーブイ」

「は、はい。なんでしょう？」

私とマスターは、向かい合って座っていた。なんだか緊張してしまう。

「最初に言っておくと、これはイーブイだから必要なことなんだが……うーん、まあ早い話質問にただ答えて行くだけだ」

「は、はあ……」

と、言われても。

「イーブイ。お前、ぶっちゃけ何になりたい？」

「何になりたいっていうのは、もしかしくなくても、」

「そう、進化のことだ」

トレーナーとしては、やっぱり重要だね。進化したら戻れないもん。

私にしたって、すごく重要なことだ。

「でも、何になりたいと突然言われても……まだはつきりとは決めてません」

「そっか。ま、そうだな。突然言われたって、そんな大事なこと答えられる訳がない。実は、俺が聞きたいのはお前は何の素質があるのか、ってことなんだ」

「何の、素質があるか……？」

「パフェ食べてる時さ、イーブイが溶けたことあったろ？」

「あ……あ、ああ、はい。あんまり思い出したくありませんけど……」

「あの時、思ったんだ。『ひょっとして、イーブイごとにある程度、属性の向き不向きがあるんじゃないか』って」

「な、なるほど……？」

よく分からないけど。

「だから、ちょっと適正チェックというかな。例えばイーブイ。この草むらに入ってて、どう思う？」

「ど、どう思うと言われても……すみません、何にも感じないです」

「あー、いや、しょうがないよ。難しいだろうしな。じゃあ、雷について、どういう印象がある？」

「雷……ですか。大きい音がして、……すごく、怖いもの、でしよるか」

「なるほど。じゃあ、炎については？」

「暖くて、安心するもの……かな」

私の、進化系統に合わせて質問してるんだろうか？

ポケモンっていうのは、本能で自分の進化系統が分かっている。

私も例外じゃない。

けど、それは決して人間には言えないんだ。そういう決まりがあるから。

その後もマスターは、水、太陽、月、森林と氷について訊いた。

私の答えは、こうだ。

水は、冷たくて気持ちがよくて、楽しいもの。

太陽は、眩しくて熱いもの。

月は、綺麗だけど、どこか寂しいもの。

森林は、幻想的で落ち着く場所。

氷は、ひんやりしてて気持ちがいいもの。

「なるほどな……ありがとうイーブイ」

「それで、何か分かったんですか？」

「なんとなーくな。でも、最終的に何になるか決めるのはお前だし、あんまり気にしないでいいよ」

「は、はあ……」

私が決める、か。ロケット団にしばらくいた私だけど、そんなこと言う人は初めてだ。

もちろん、ロケット団は悪い人達だっていうのは分かってるし、シグはロケット団とはまったく違うってことも分かってる。

……だけど、やっぱり嬉しいな。

「えっとなー……じゃあ、思い出したくもないだろうけど、少し訊

いいいいか」

「何をですか？」

「イーブイさ、ロケット団にいたころ、何に進化するとか、そういう実験させられてたろ？」

「……………はい」

「進化に対して、怖い、とか、そういう気持ちって、やっぱりあるのか？」

怖い、か。確かに、今の自分の姿が変わったりするのは、ちょっと怖いかもしれない。

それに、ロケット団にだって、散々進化進化と言われてきた。そういうったトラウマも、少しだけある。

でも、私は強くなりたい。

だって、私だってみんなの力になりたいもん。

その為には、どうやって力が必要だし、力を得るには進化が必要だ。

だから、

「怖くないです」

「そっか。ならいいんだ。…………じゃあ、ちょっとこれを持っててく

れるか」

マスターが、懐から何かの石を取り出した。

「リーフの石。タムムシ行った時に、いくつか石を買っておいたんだ。これを、ポーチの中に入れていてくれ」

「わかりました」

リーフの石？ しかも、ポーチに入れるだけ？

……マスターの考えは分からないけど、そうしておこう。

「それにしても、イーブイが『進化は嫌だ』って言ったらどうしようかと思ってたよ」

「そんなこと言いませんよ。……少しでも、強くなりたいですし」

そっか、とマスターは笑った。

なんか……今日のマスター、やけにやさしいな。

「イーブイ。……お前さ、自分に自信がないんじゃないか？」

「え……？ まあ、それは、みんなの中で一番弱いですし、……だ

から、あんまり役に立ってませんし」

「俺は、お前がいて本当によかったと思ってる。お前がいなきゃ、ハナダジム挑戦も、ゴースト達の救出も、スターミーを捕まえるのも、うまくいかなかった」

たしかに、そうかもしれない。

でも、そうじゃない。だからこそだ。

「……ギャラドスの攻撃を、俺を信じて耐えてくれたし、ポケモンタワーの時だって、出てきたら危ないポケモンのボールを、躊躇いなく抑え込んでくれた。お前も一発喰らったら危なかったのに、スターミーに飛びかかって、必死に抑えてくれた」

ギャラドスと戦った時も、実際あれ以上何もできなかった。あの後は、結局ポケモンセンターですつとぐったりしていたんだ。

ゴースト救出のときもそうだ。ボールを押さえれば出て来ないんだから、危険ではあるけど人間だってできる。

スターミーのときも、私は戦いには参加せずに、時間稼ぎをしただけだ。

言ってしまうば、それだけ。

やるべきことはやったけど、やっぱりみんなに守ってもらいながら、単純なことをしてるだけ。

マスターもそれを分かってるから、私に単純で力のいらない仕事を任せる。

……それが、私にはたまらなく悔しかった。

それにしても、よくそこまで私の事をすらすらと良く言えるなあ……。

トレーナーだからか、単なる褒め上手か？

「お前は、俺よりも、他の皆よりも、ずっと勇気と根性があるじゃないか。お前は、強いよ」

「そんなの、詭弁じゃないですか。勇気と根性だけじゃ強いとはいいませんよ。……私はただ、マスターとみんなを守りたくて。力がないなりに、危険なことを頑張ってるだけです」

「それでいいじゃないか。精一杯頑張ってるのを見て、それを誰が責めるって言うんだ？」

「駄目ですよっ！ 責められるとか、責められないとか、そんな問題じゃないんです。私は、そんな温かい目で見守られたいわけじゃない。みんなの役に立ちたいんです。詭弁じゃない、本当の、みんなを守る力が欲しいんですよ！」

「うーん……みんなを守る力、ね。何も、腕っ節だけがみんなを守

る力じゃないと思うし、それでみんなの優劣を決めるのも好きじゃないが……。そこまでお前が本気なら言うよ」

？ 何を？

「お前が秘めてる能力は、実はこの中で一番高いんだ」

「……え？」

「つまり、潜在能力だ。進化した時の能力は、お前が一番高い。イーブイ族はマイナーだけど、決して弱くないんだ。むしろ強い。だから自信持て、イーブイ」

「……そうなんだ」

つまり、

私がいみんなと対等に戦えたり、あるいは前線で活躍したりできるってことかな？

……考えるだけでも、うれしさがこみ上げる。

「私、頑張ります！」

「おう、頑張れ。ただ、絶対に進化を急ぐなよ。じっくりと考えるんだ」

「分かりました！」

ありがとう、マスター。

私、イーブイは、ひとつ希望ができた。

特訓。(後編)(後書き)

イーブイの合計種族値って割と高いですね。なんと合計525です。

これは、スターミーの合計種族値520よりも高いんですね。ちなみに、ドクロッグは490です。

だから、なんとブイズは他のみんなよりも合計種族値が高いんですよ。

…え？ ドサイドン？ H A H A H A サイホーンの最終進化はサイドンじゃないですか。
は、ははは…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5119v/>

Dead in pokemon world!

2012年1月1日21時46分発行